府内三丁目南遺跡(第1地点) 白鍬宮腰遺跡(第8・10次調査) 大在家遺跡(第2・3次調査) 茶臼塚古墳(第1次調査) 側ヶ谷戸貝塚(第8次調査)

2018

さいたま市教育委員会

府内三丁目南遺跡(第1地点) 白鍬宮腰遺跡(第8・10次調査) 大在家遺跡(第2・3次調査) 茶臼塚古墳(第1次調査) 側ヶ谷戸貝塚(第8次調査)

2018

さいたま市教育委員会

例 言

- 1 本書は、埼玉県さいたま市に所在する埋蔵文化財の発掘調査結果を報告する『さいたま市内遺跡発掘調査報告書』の第17集である。
- 2 収録した発掘調査は、5遺跡における7件である。これらは、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財記録 保存を目的として、平成21~24年度にさいたま市教育委員会が実施したものの一部である。
- 3 発掘調査の実施及び出土品整理・調査報告書の作成にあたり、国庫補助金の交付を受けた。
- 4 収録した発掘調査は次のとおりである。

遺跡名	県遺跡番号	発掘調査期間	調査担当者	本書収録部
がないさんちょうめみなみ 府内三丁目南遺跡(第1次調査)	77-051	平成22年1月28日~2月26日	中村誠二•青木文彦	第1部
白鍬宮腰遺跡(第8次調査)	01-230	平成22年5月10日~5月25日	中村誠二•関根俊雄	第2部
白鍬宮腰遺跡(第10次調査)	01-230	平成22年11月9日~11月22日	澤栁秀実•関根俊雄	第2部
大在家遺跡(第2次調査)	01-208	平成22年6月18日~7月22日	青木文彦·澤栁秀実	第3部
大在家遺跡(第3次調査)	01-208	平成22年7月6日~7月15日	青木文彦·澤栁秀実	第3部
茶臼塚古墳(第1次調査)	12-305	平成23年5月19日~6月24日	澤栁秀実•小峰智仁	第4部
世間ヶ谷戸貝塚(第8次調査)	12-304	平成24年9月20日~10月12日	関根俊雄•橋本玲未	第5部

- 5 収録した発掘調査に係る届出・通知等の法的手続きの概要は次の通りである。なお、②及び③の通知の通知者は、いずれもさいたま市教育委員会教育長である。
- (1) 府内三丁目南遺跡(第1次調查)
- ①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成21年12月3日 受理年月日・番号:平成21年12月3日付教生文第2768号

②上記届出に対する指示通知 通知年月日・番号:平成22年1月22日付教生文第3277号 ③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日・番号:平成22年1月28日付教生文第3285号

(2) 白鍬宮腰遺跡(第8次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

届出年月日:平成22年3月26日 受理年月日・番号:平成22年3月26日付教生文第3984号

②上記届出に対する指示通知 通知年月日・番号:平成22年4月22日付教生文第239号

通知年月日・番号:平成22年5月7日付教生文第317号

(3) 白鍬宮腰遺跡(第10次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成22年9月22日 受理年月日・番号:平成22年9月22日付教生文第2141号

②上記届出に対する指示通知 通知年月日・番号:平成22年11月8日付教生文第2642号

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日·番号:平成22年11月9日付教生文第2714号

(4) 大在家遺跡(第2次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成22年5月25日 受理年月日・番号:平成22年5月25日付教生文第659号

②上記届出に対する指示通知 通知年月日・番号:平成22年6月2日付教生文第731号

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日·番号:平成22年6月8日付教生文第803号

(5) 大在家遺跡(第3次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成22年5月24日 受理年月日・番号:平成22年5月24日付教生文第641号

②上記届出に対する指示通知

通知年月日・番号:平成22年6月28日付教生文第1018号

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日·番号: 平成22年7月6日付教生文第1176号

(6) 茶臼塚古墳(第1次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成23年3月18日

受理年月日・番号: 平成23年3月18日付教生文第4109号

②上記届出に対する指示通知

通知年月日・番号:平成23年5月18日付教生文第528号

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日・番号:平成23年5月31日付教生文第531号

(7) 側ヶ谷戸貝塚(第8次調査)

①文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日:平成24年5月31日

受理年月日・番号:平成24年5月31日付教生文第720号

②上記届出に対する指示通知

通知年月日・番号:平成24年9月18日付教生文第1961号

③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知年月日·番号:平成24年9月19日付教生文第1979号

6 この調査による遺物および遺構図、写真等の資料はさいたま市教育委員会が保管している。

本書の執筆は、次のとおりに分担した。

第1部:鈴木久雄(さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主査)

第2部:橋本玲未(さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任)

第3部:永瀬史人(さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任)

第4部:鈴木久雄(さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主査)

※ (3章については、笹森紀己子氏及び元林恵子氏より御助言を賜った。)

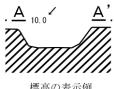
第5部:吉岡卓真(さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係 主任)

月, 例

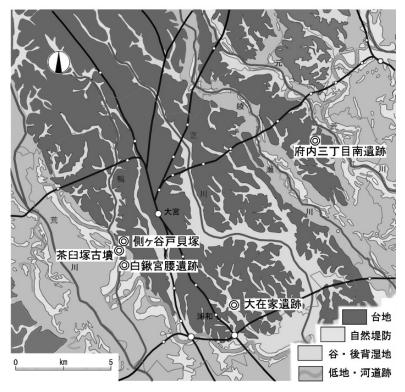
1 遺構断面図における水準は、右図例(矢印部分)のように示した。数値はすべて 標高を示し、単位はmである。

2 遺構図における方位は磁北を表している。

3 各部「発掘調査の位置」図中の遺跡範囲は、平成30年3月末日現在のものである。



標高の表示例



第1図 掲載遺跡の位置

目 次

例言	(1)	7 土 坑
凡例	(2)	8 溝
目次	(3)	9 溝出土遺物 18
		10 柱穴列 18
第1部 府内三丁目南遺跡(第1地点))	11 包含層出土遺物 19
第Ⅰ章 調査の契機と経過	1	12 遺構外出土遺物 20
第1節 調査の契機	1	
第2節 調査の方法と経過	2	第2部 白鍬宮腰遺跡(第8・10次調査)
第Ⅱ章 遺跡の概要	3	第 I 章 調査の契機と経過 ····· 21
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第1節 調査の契機2
第2節 調査区の概要	4	第2節 調査の方法と経過2
第Ⅲ章 遺構と遺物	4	第Ⅱ章 遺跡の概要23
第1節 縄文時代の遺構と遺物	6	第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 23
1 第3号住居跡	6	第2節 調査区の概要 20
2 土 坑	7	第Ⅲ章 第8次調査の遺構と遺物 28
3 第3号住居跡・土坑出土遺物 …	9	第1節 住居跡 28
4 ピット	10	第2節 溝 跡 31
5 ピット出土遺物	10	第IV章 第10次調査の遺構と遺物 33
第2節 弥生時代~古墳時代の遺構と遺物	11	第1節 溝 跡 33
1 第1号住居跡	11	第2節 その他の遺構と遺物 36
2 第1号住居跡出土遺物	12	第V章 まとめ 39
3 第2号住居跡	13	
4 第2号住居跡出土遺物	13	第3部 大在家遺跡(第2・3次調査)
5 第4号住居跡	14	第 I 章 調査の契機と経過 ····· 4
6 第 4 号住居跡出土遺物	15	第1節 調査の契機 4.

第2節 調査の方法と経過	41	第Ⅲ章 遺構と遺物	ö
第Ⅱ章 遺跡の概要	42	第1節 遺構と遺物60	6
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	42		
第2節 調査区の概要	44	第5部 側ヶ谷戸貝塚(第8次調査)	
第Ⅲ章 第2次調査の遺構と遺物	45	第 I 章 調査の契機と経過 72	2
第1節 第2次調査区の概要	45	第1節 調査の契機 72	2
第2節 住居跡	49	第2節 調査の方法と経過 72	
1 第2号住居跡	49	第Ⅱ章 遺跡の概要	
2 第2号住居跡出土遺物	49	第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 … 73	
第3節 その他の遺構と遺物	52	第2節 調査区の概要 76	
	52 52	第Ⅲ章 遺構と遺物 78	
		70-1 1211, 31211	
	52 54	211 THE THE	
3 溝・土坑・ピット出土遺物	54	第2節 竪穴状遺構 79	
4 遺構外出土遺物	57	第3節 土 坑	
第IV章 第3次調査の遺構と遺物	57	第4節 ピット 89	
第1節 第3次調査区の概要	57	第5節 周 溝 89	
第2節 遺構と遺物	59	第6節 溝状遺構 90	0
1 土 坑	59	第7節 遺構外出土土器 91	1
2 遺物	59	第8節 石器 95	3
第V章 まとめ	59	第IV章 貝類・獣骨・魚骨 99	5
		第1節 検出方法と整理方法 9	5
第4部 茶臼塚古墳(第1次調査)		第2節 貝類 9	5
第 I 章 調査の契機と経過	61	第3節 獣骨・魚骨 9	7
第1節 調査の契機	61	第4節 まとめ 9	7
第2節 調査の方法と経過	62	第Ⅴ章 まとめ 98	8
	63		
第Ⅱ章 遺跡の概要		写真図版	
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ·····	63 63	写真図版 報告書抄録	
第Ⅱ章 遺跡の概要	63	写真図版報告書抄録	
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ·····	63 63 64	報告書抄録	
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ·····	63 63	報告書抄録	
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ·····	63 63 64	報告書抄録	
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要	63 63 64 挿図[報告書抄録 目次	15
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ····· 第2節 調査区の概要 ······ 第1図 掲載遺跡の位置	63 63 64	報告書抄録 	15
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 ····· 第2節 調査区の概要 ······ 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡	63 63 64 挿図[(3)	報告書抄録 次 第17図 第4号住居跡出土遺物	15
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置	63 63 64 挿図: (3)	報告書抄録 次 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝	15 17
 第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図	63 63 64 挿図[(3)	報告書抄録 3 次 第17図 第4号住居跡出土遺物	15 17 18
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置	63 64 挿図 (3) 1 3 4	報告書抄録 次	15 17 18
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図	63 63 64 挿図[(3)	報告書抄録 次	15 17 18 19
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置	63 64 挿図 (3) 1 3 4	報告書抄録 次	15 17 18
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図	63 64 挿図 [(3) 1 3 4 5	報告書抄録 次	15 17 18 19
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構	63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物	15 17 18 19
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡	63 63 64 挿図[(3) 1 3 4 5 6 6	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 白鍬宮腰遺跡 第24図 遺跡の位置	15 17 18 19 20
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物	63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置	15 17 18 19 20
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第8図 土 坑 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物	63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第26図 遺跡の位置 第26図 調査区の位置	15 17 18 19 20 22 25 27
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第8図 土 坑 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構	63 63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9 10 11	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第24図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第26図 第8次調査全測図 第27図 第8次調査第1号住居跡	15 17 18 19 20 25 27 28
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構 第12図 第1号住居跡	63 63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9 10 11 11	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 白鍬宮腰遺跡 第24図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第26図 第8次調査全測図 第27図 第8次調査第1号住居跡 第28図 第8次調査出土遺物(1)	15 17 18 19 20 25 27 28
第1章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置 第3図 発掘調査の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第8図 土 坑 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構 第12図 第1号住居跡 第13図 第1号住居跡出土遺物	63 63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9 10 11 11 12	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第24図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第26図 第8次調査全測図 第27図 第8次調査第1号住居跡 第28図 第8次調査出土遺物(1) 第29図 第8次調査出土遺物(2)	15 17 18 19 20 25 27 28 30
第Ⅱ章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置図 第4図 調査区の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第8図 土 坑 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構 第12図 第1号住居跡 第13図 第1号住居跡出土遺物 第14図 第2号住居跡	63 63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9 10 11 11 11 12 13	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 白鍬宮腰遺跡 第24図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第26図 第8次調査全測図 第27図 第8次調査第1号住居跡 第28図 第8次調査出土遺物(1) 第29図 第8次調査出土遺物(2) 第30図 第8次調査第1号溝	15 17 18 19 20 25 27 28 28 30 32
第1章 遺跡の概要 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡 第2節 調査区の概要 第1図 掲載遺跡の位置 府内三丁目南遺跡 第2図 遺跡の位置 第3図 発掘調査の位置 第3図 発掘調査の位置 第5図 全測図及び全土層図 第6図 縄文時代の遺構 第7図 第3号住居跡 第8図 土 坑 第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物 第10図 ピット出土遺物 第11図 弥生時代~古墳時代の遺構 第12図 第1号住居跡 第13図 第1号住居跡出土遺物	63 63 64 挿図 (3) 1 3 4 5 6 6 9 9 10 11 11 12	報告書抄録 第17図 第4号住居跡出土遺物 第18図 土 坑 第19図 溝 第20図 溝出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第21図 柱穴列 第22図 包含層出土遺物 第23図 遺構外出土遺物 白鍬宮腰遺跡 第24図 遺跡の位置 第25図 調査区の位置 第25図 調査区の位置 第26図 第8次調査全測図 第27図 第8次調査第1号住居跡 第28図 第8次調査出土遺物(1) 第29図 第8次調査出土遺物(2) 第30図 第8次調査第1号溝 第31図 第10次調査全測図	15 17 18 19 20 25 27 28 30

第33図	第1号溝出土遺物	35	第54凶	調査区の位置(2)	66
第34図	第1号~第3号土坑	36	第55図	全測図及び全土層図	67
第35図	その他の遺物	37	第56図	出土遺物(1)	70
第36図	ピット	38	第57図	出土遺物(2)	72
大在家道	遺跡		側ヶ谷戸	貝塚	
第37図	遺跡の位置	43	第58図	遺跡の位置	73
第38図	発掘調査の位置	44	第59図	調査区の位置(1)	74
第39図	調査区の位置	45	第60図	調査区の位置(2)	76
第40図	全測図及び全土層図	46	第61図	全測図及び全土層図	77
第41図	遺構確認面と検出遺構	47	第62図	第 1 号住居跡	78
第42図	第2号住居跡	50	第63図	第1号住居跡出土土器(1)	80
第43図	第2号住居跡遺物出土状況	51	第64図	第1号住居跡出土土器(2)	81
第44図	第2号住居跡出土遺物	51	第65図	竪穴状遺構	82
第45図	溝・土坑	53	第66図	竪穴状遺構出土土器(1)	83
第46図	溝・土坑・ピット出土遺物	55	第67図	竪穴状遺構出土土器(2)	85
第47図	遺構外出土遺物	57	第68図	土 坑	86
第48図	全測図及び全土層図	58	第69図	土坑出土土器	88
第49図	遺構外出土遺物	59	第70図	ピット	89
第50図	第1次調査区の位置及び出土遺物 …	60	第71図	周溝・溝状遺構	90
茶臼塚古	5墳		第72図	周溝・溝状遺構出土土器	91
第51図	遺跡の位置と周辺の遺跡	61	第73図	調査区出土土器	92
第52図	発掘調査の位置	64	第74図	石 器	94
第53図	調査区の位置(1)	65			
	表	・グラン	フ目で	Ż.	
府内三丁	目南遺跡		第7表	遺構一覧表	48
第1表	ピット計測表	4	側ヶ谷戸	貝塚	
白鍬宮腰			第8表	石器観察・計測表	93
第2表	白鍬宮腰遺跡発掘調査一覧	24	第9表	遺構新旧対応・計測表	95
第3表	第1号住居跡内ピット計測表	28	第10表	貝層水洗前·水洗後重量 ······	95
第4表	住居跡内遺物・標高対照表	31	第11表	貝種構成	96
第5表	第1号溝内ピット計測表	31	グラフ1	貝種組成	96
第6表	第10次調査ピット計測表	39	グラフ2	ヤマトシジミ殻長構成	96
大在家谱	計計		グラフ3	マガキ殻高・殻長構成	97

図版目次

図版1 府内三丁目南遺跡

(1)1区全景 (2)2区全景

図版 2 府内三丁目南遺跡

(1)第3号住居跡 (2)第1号住居跡 (3)第2号住居跡 (4)第4号住居跡 (5)土製品 (漆玉) 出土 状況 (6)石器出土状況

図版3 府内三丁目南遺跡

(1) 第3号住居跡・土坑出土遺物(第9図1~6) (2)ピット出土遺物(第10図7~10) (3)第1号 住居跡出土遺物(第13図11~27) (4)第2号住居跡出土遺物(第15図28~32)

図版 4 府内三丁目南遺跡

(1) 第4号住居跡出土遺物 (第17図33~37) (2)溝跡出土遺物 (第20図38~57) (3)包含層出土遺物 (第22図58~74) (4)遺構外出土遺物 (第23図75~78)

図版 5 白鍬宮腰遺跡 (第8次調査)

(1)第1号住居跡完掘状況(北から) (2)第1号住居跡遺物出土状況 (3)遺物出土状況(第28図No. 5) (4)遺物出土状況(第28図No. 8) (5)遺物出土状況(第28図No. 9、15)

図版 6 白鍬宮腰遺跡 (第8次調査)

(1)第1号溝完掘状況(北から) (2)第1号溝遺物出土状況(東から)

図版7 白鍬宮腰遺跡(第8次調査)

(1)第1号住居跡出土遺物(第28図1) (2)第1号住居跡出土遺物(第28図2) (3)第7号住居跡出土遺物(第28図4) (4)第97号住居跡出土遺物(第28図3) (5)第1号住居跡出土遺物(第28図5)

図版8 白鍬宮腰遺跡(第8次調査)

(1) 第1号住居跡出土遺物(第28図6) (2) 第1号住居跡出土遺物(第28図7) (3)第1号住居跡出土遺物(第28図8) (4)第1号住居跡出土遺物(第28図9) (5)第1号住居跡出土遺物(第28図10) (6)第1号住居跡出土遺物(第29図11~13) (7)第1号住居跡出土遺物(第29図14) (8)第1号住居跡出土遺物(第29図15) (9)第1号溝出土遺物(第29図16) (10)第1号溝出土遺物(第29図17) (11)第1号溝出土遺物(第29図18)

図版 9 白鍬宮腰遺跡 (第10次調査)

(1)調査区全景 (2)第1号溝(東から)

図版10 白鍬宮腰遺跡(第10次調査)

(1)第1号溝(南西から) (2)第1号溝出土遺物(第34図 $1\sim9$) (3)第25号溝出土遺物(第34図10) (4)第1号溝出土遺物(第34図 $11\cdot12$)

図版11 白鍬宮腰遺跡(第10次調査)

(1)第1号溝出土遺物(第34図13) (2)第1号溝出土遺物(第34図14) (3)第1号溝出土遺物(第34図15・16) (4)遺構外出土遺物(第35図17~19) (5)遺構外出土遺物(第35図20) (6)遺構外出土

図版12 大在家遺跡

(1)第2次調査区全景(北西→) (2)第2号住居跡完掘(東→)

図版13 大在家遺跡

(3)第2号住居跡炉完掘(南→) (4)第2号住居跡炭化材出土状況(西→) (5)第2号住居跡土器出土状況(東 →) (6)第2号住居跡台付甕出土状況(西→) (7)第2号住居跡高坏出土状況(西→) (8)第2号住居跡炉直上出土鉢形土器 (9)第3次調査区全景(北→) (10)第3次調査区第1号土坑完掘(東→)

図版14 大在家遺跡

(1)第2号住居跡出土遺物(第44図 $1 \sim 16$) (2)第1号溝出土遺物(第46図 $1 \cdot 2$) (3)第2号土坑 出土遺物(第46図 $3 \sim 17$)

図版15 大在家遺跡

(4)土坑出土遺物(第46図18~25) (5)ピット出土遺物(第46図26~28) (6)遺構外出土遺物(第47図 1~11) (7)第 3次調査区出土遺物(第49図 1~4)

図版16 茶臼塚古墳

(1)調査区1区全景 (2)調査区2区全景

図版17 茶臼塚古墳

(1)出土遺物(第56図1~22)

図版18 茶臼塚古墳

(1) 出土遺物 (第57図23~51、板碑2点)

図版19 側ヶ谷戸貝塚

(1)調査区北側全景(東から) (2)調査区北側(南西から) (3)4号竪穴状遺構(北東から) (4)15 号墳周溝(北東から) (5)15号墳周溝(北から)

図版20 側ヶ谷戸貝塚

(6)1号住居跡(北東から) (7)1号住居跡第2・3貝層(北から) (8)1号住居跡第2・3貝層(北

図版21 側ヶ谷戸貝塚

(1)第1号住居跡出土遺物(第63図1~29) (2)第1号住居跡出土遺物(第64図1~10)

図版22 側ヶ谷戸貝塚

(1) 竪穴状遺構出土遺物(第66図1~33) (2) 竪穴状遺構出土遺物(第67図1~13)

図版23 側ヶ谷戸貝塚

(1) 土坑出土遺物(第69図 $1 \sim 11$) (2) 周溝・溝状遺構出土遺物(第72図 $1 \sim 10$ 、 $12 \sim 14$) (3) 周溝・溝状遺構出土遺物(第72図13)

図版24 側ヶ谷戸貝塚

(1)調査区出土遺物(第73図1~27) (2)石器(第74図1~11)

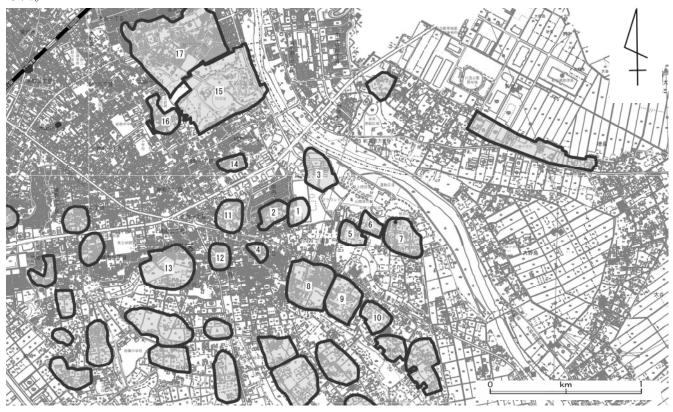
第1部

府内三丁目南遺跡(第1地点)

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

平成21年12月、さいたま市岩槻区府内三丁目における個人専用住宅の建設にあたり埋蔵文化財発掘の届出が工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に提出された。これを受け、平成22年1月16日に確認調査を実施したところ、縄文時代の土坑2基、縄文土器、弥生時代から古墳時代の住居跡2基、土師器、時期不明の溝を検出した。これらの遺構・遺物の現状保存が可能か否かの協議を実施したところ、予定される工事では発見された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため、さいたま市教育委員会が工事に先立って、記録保存のための発掘調査を平成22年1月28日から同年2月26日まで実施した。



1 府内三丁目南遺跡 2 木曽良貝塚 3 府内三丁目遺跡 4 城南五丁目遺跡 5 村国道下遺跡 6 村国貝塚 7 渋江鋳 金遺跡 8 飯塚原地遺跡 9 飯塚北貝塚 10 飯塚貝塚 11 府内一丁目遺跡 12 城南四丁目遺跡 13 真福寺貝塚 14 新曲輪遺跡 15 岩槻城(新曲輪・鍛冶曲輪跡) 16 太田貝塚 17 岩槻城跡

第2図 遺跡の位置

第2節 調査の方法と経過

1 方法

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設部分のうち確認調査により遺構が確認された範囲を中心に調査区を設定し調査を実施した。排土の処理の関係で、東側を1区、西側を2区として調査を実施することになった。重機により表土を除去した後、人力により遺構確認を行い、引き続き遺構確認調査を実施した。遺構の平面測量は平板測量により作成し簡易遣り方測量により実施した。

2 経過

発掘調査は平成22年1月28日から同年2月26日まで実施した。

1月28日、重機を使用して表土除去を実施。住居跡2軒を検出。その内の1軒を切る状態で検出してい たプランは緩く弧を描く溝であることが判明。2月1日、協力員参加。調査区壁面整序の後、遺構精査を 実施。表土除去時の所見とおり、住居跡2基と溝1基を検出、それらに切られる縄文時代包含層もしくは 遺構が全域に広がっていた。1区中央に位置する住居跡を第1号住居跡、南壁際に所在するものを第2号 住居跡、溝を第1号溝とした。2月3日、2号住居跡の覆土除去を継続。1号溝について、中央のベルト 部分にて土層図作成。北半のローム粒子濃い部分と南端の硬化部分を写真撮影・図化後除去し、完掘。 1 号溝北端で重複するプラン、大型のものを1号土坑、その南の小型をピット1とした。1号溝・1号土坑 ・北側壁面土層図、西側壁面土層図、東側壁面土層図の作成及び写真撮影を実施。2月4日、2号住居跡、 1号溝に加えて1号住居跡及び調査区北辺の縄文時代遺構にも着手。2号住居跡の覆土除去を継続。1号 溝断面にて観察された炉状の焼成部が30cmほどの広がりを持つことを確認。床面レベルでは炭化物粒 子、焼土粒子を含む黒色土が覆う。この覆土は周囲の覆土とは顕著に異なる。 1 号住居跡着手前に完掘状 態の1号溝の写真撮影。断面水準の計測も実施し、本遺構に関する調査を完了。北辺にて1号溝壁面の観 察及びトレンチによる確認を試みた結果、この周囲には縄文時代前期の遺構もしくは包含層が所在するこ とが確実となった。まず北東隅部周辺から掘り下げたところ、壁柱穴列を伴う掘り込みの南西隅部を検出。 住居跡と捉え、これを第3号住居跡とする。遺物は小破片のみであった。2月5日、2号住居跡の概ね床 面検出を終える。3号住居跡の完掘実施。2月8日、1号住居跡の東西の土層図完了し、写真撮影後ベル ト除去作業を実施。黒曜石石鏃等出土。炉跡土層図作成。2号住居跡の床面検出ピット等の調査。2月9 日、現況で完掘済みの遺構について、平板測量にて実測図を作成。 1 号住居跡の床面の精査を行い、ピッ ト状の落ち込みの調査を実施。炉跡を完掘する。棒状の土製品出土。5号土坑の土層図作成。2月10日、 1・2号住居跡の完掘状態の写真撮影実施。2号住居跡北西部の作業範囲を広げ、2号住居跡壁面にて観 察される土坑等の調査に着手。これを7号土坑とした。2月12日、1区南半部の遺物包含層及び包含層下 にて検出した遺構群の調査を実施。2月16日、南半部における縄文時代遺構群の調査を継続。7号土坑の 土層図を作成。2月18日、1区の調査作業を完了し、重機を使用して1区内を埋め戻す。引き続き2区の 表土除去作業を実施。2月19日、2区の調査を開始する。縄文時代遺物包含層上面を確認面として精査を 実施。大小の撹乱が著しいが、住居跡1基と溝1条を検出。前者を第4号住居跡とする。床面より僅かに 浮いて小玉(土製)出土。2月22日、4号住居跡は周溝まで覆土除去終了、平面図作成。4号住居跡東側 の溝は2条が併行していることが判明。西側のものが新しいが、撹乱により南端部分が残るのみであった。 調査区中位まで断続するのは東側のプランを確認。溝についても平面図まで完了。2月23日、4号住居跡

の床面除去完了。縄文時代の包含層除去作業を概ね終え、遺構群の調査を継続する。併行して平板測量に よる遺構記録作業、水準測量を実施。2月24日、調査区南北及び西面の土層図作成。4号住居跡の貼床を 除去。縄文時代に位置づけられるピット群を完掘。これらの遺構の平面図を作成し、水準を計測する。2 月25日、図面等の点検・補足を行い、遺構に関する記録作業を完了する。引き続き現場管理に不要な養生 等の撤去作業及び機材撤収を実施。2月26日、防塵・土留め用の土嚢・シートの解体・撤去、機材の搬出 を行う。重機を用いて調査区内の埋め戻しを行う。トイレ・プレハブを撤去する。現地作業を完了する。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

府内三丁目南遺跡は、さいたま市の東部、岩槻区府内三丁目地内の岩槻支台の中位に所在する。遺跡付 近は、東武野田線岩槻駅より南東へ約2.3km程の市街化区域内である。国道16号より約400m南に位置し、遺 跡内は住宅地と大型商業施設が存在する。周辺の遺跡としては北側に府内三丁目遺跡が、西側では木曽良 貝塚といった遺跡が存在している。

本遺跡ではこの調査が初めてであり、近隣の府内三丁目遺跡では3回、木曽良貝塚では3回の調査が実 施されており、前者においては縄文時代、古墳時代、古代、中世といった遺物が確認されているが、後者 においては縄文時代の遺跡が確認されている。

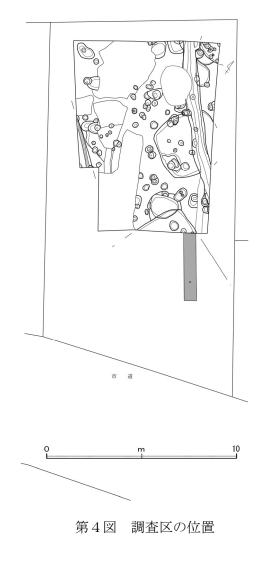
埼玉県岩槻市遺跡調査会 2002年『府内三丁目遺跡 I』

府内三丁目 スーパービバホーム 岩槻店 府内之子自 府内三才自南遺跡 **木曽良貝塚 □6** Q 第1地点 しらこばと

第3図 発掘調査の位置図

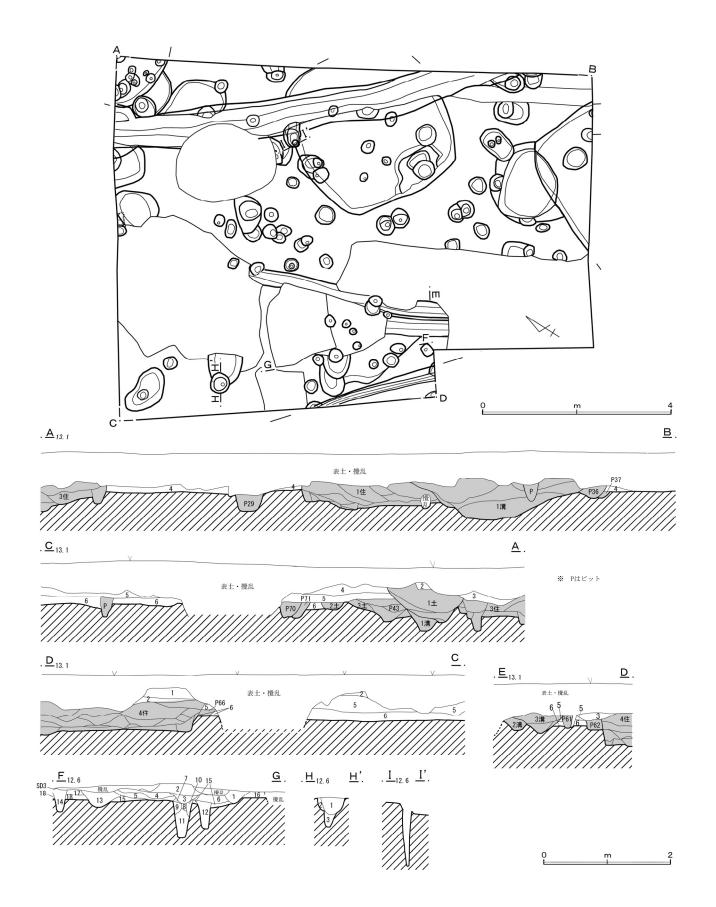
第2節 調査区の概要

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設 範囲で確認調査により遺構が検出された部分を中心とし て調査範囲を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、 縄文時代の住居跡1軒、土坑17基、ピット73基、弥生時 代から古墳時代の住居跡4軒、溝3条、柱穴列及び遺物 包含層が検出された。遺物は、縄文時代前期、中期、後 期の土器・石器、弥生時代から古墳時代の土師器製の壺 及び甕、碗型滓、土製品(漆玉)、鉄製品が、18リット ル入り遺物収納容器2箱分出土した。



第Ⅲ章 遺構と遺物

今回の調査区の基本土層は、地表面下30~40cmまでが表土(第5図1)、さらにその下で4層の包含層が堆積していた。包含層は10cmの遺物包含層(第5図2)、5~10cmの遺物包含層(第5図3)、20cmの包含層(第5図4)、20cmの包含層(第5図5)である。さらに10cmの漸移層、最下層でローム面が確認された。縄文時代の住居跡1軒、土坑16基、ピット73基、弥生時代から古墳時代の住居跡3軒、土坑1基、溝3条、柱穴列3基が出土したが、包含層上面及びローム面から検出された。



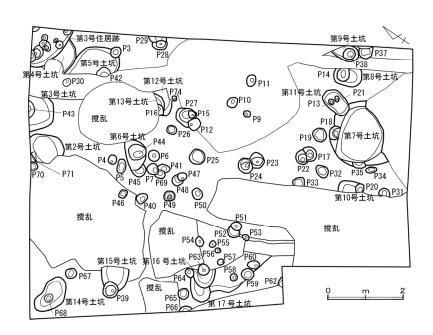
第5図 全測図及び全土層図

府内三丁目南遺跡

A-B C-A D-C E-D A-B 密。ローム粒子含む。締まり強い。 粗い。ローム・黒色土ブロック多く含む。締まりややあり。 密。ローム粒子含む。締まり強い。 細かい。ローム粒子が小塊状に少し入る。締まりややあり。ブラン未確認のビット P29:茶褐色土 1: 暗灰色土 粒状。焼土粒少し含む。耕作土。 P36:暗褐色土 2:暗灰色土 1層に似る。 焦茶色土粒含む。締まりあり。 P37: 茶褐色十 : 黒色土 細かい。焼土粒、カーボン小片やや多く含む。造成前の表土。耕作土。 3:暗褐色土 4: 茶褐色土 細かい。 1溝 : 黒褐色土 P43-1: 焦茶色土 -2: 茶褐色土 -3: 茶褐色土 細かい。黒色土、焦茶色土粒多く含む。締まりあり。 11層より色調暗い。径 2㎜程のローム粒まばらに入る。締まり強い。 色調以外は12層に近い。 5: 黒褐色土 密。黒色土粒多く、焼土粒少し含む。締まり強い。 6: 黒褐色土 密。ローム粒子、焼土粒、黄白色粘土粒含む。締まりあり。 ビ回以がは12億に近い。 ローム粒の混入は13層より少ない。ローム小ブロック点在。締まり強い。 やや粗い。ローム小ブロック含む。西側攪乱の影響で覆土が動いている。ビット やや粗い。ローム小ブロック含む。西側攪乱の影響で覆土が動いている。締まりあり。 7: 焦茶色土 密。ローム粒、径1~3mm焼土粒含む。締まり強い。包含層。 P70:茶褐色土 8:暗茶褐色土 密。くすんだローム粒少し含む。締まり強い。 P71: 茶褐色土 : 焦茶色土 密。径1~3mm焼土粒含む。ローム粒少し含む。締まり強い。ピット F-6

1: 無茶色土
2: 無茶色土
3: 無茶色土
3: 熊茶色土
4: 暗茶褐色土
4: 暗茶褐色土
5: 茶褐色土
5: 茶褐色土
6: 茶褐色土
8: 黒褐色土
8: 黒褐色土
10: 暗黄褐色土
11: 黒褐色土
11: 黒褐色土
11: 黒褐色土 F-G 1: 焦茶色土 F-G(続き) 12:茶褐色土 13:暗茶褐色土 やや粗い。ローム粒子やや多い。締まり強い。P64 やや粗い。径2㎝前後のロームブロック含み、径3㎜焼土粒少し含む。締まりあり。 P 60 P60 はかい。焼土粒少し含む。締まりあり。P61 くすんだローム粒子主体。ハブロック少量含む。締まり強い。 細かい。ローム粒・径 1 皿焼土粒少し含む。締まり強い。 細がい。ローム粒・径 4 皿焼土粒少し含む。17層より色調暗い。締まり強い。 ローム粒子多く含む。締まり強い。 14: 焦茶色土 15:暗黄褐色土 16: 茶褐色土 17: 茶褐色土 SD3: 黒色土 H-H (P39) 密。ローム粒・焼土粒少し含む。締まり強い。密。ローム粒・焼土粒少し含む。締まり強い。 粗い。くすんだローム粒主体。締まりややあり。 1: 焦茶色土 締主りややあり 2:茶褐色土 8~11: P63 3:茶褐色土

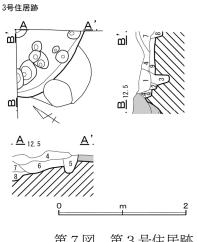
第1節 縄文時代の遺構と遺物



第6図 縄文時代の遺構

1 第3号住居跡(第7図)

調査区北東側隅で検出した。一部調査区域外に伸びる。 円形のプランを示すものと考えられる。長軸1.05m、短軸 1.41m、確認面からの深さは25~30cmである。底面は平坦 である。西側の一部を弥生時代から古墳時代の遺構である 第1号溝により切断されている。住居内ピットは全部で 9基存在する。炉は検出されていない。層位は1層(茶褐 色土)、2層(焦茶色土)、3層(焦茶色土)、4層(茶



第7図 第3号住居跡

褐色土)、であり、5層(茶褐色土)、6層(茶褐色土)、7層(暗黄褐色土)に分かれる。5層が床面、6層及び7層は住居内ピットである。縄文時代前期の繊維を含む黒浜式土器が出土したことにより、縄文時代前期の遺構であると考えられる。

2 土坑 (第8図)

第2号土坑

調査区北側壁面で検出したもので、第3号土坑と隣接しており、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを示している。長軸94cm、短軸83cm、確認面からの深さは約10cm未満である。層位は茶褐色土の1層のみである。遺物は出土していない。

第3号土坑

調査区北側東壁面で検出したもので、西側に第2号土坑が存在する。一部調査区域外に伸びる。東側一部を第1号溝により削平されている。隅丸方形のプランを呈し、長軸96cm、東西82cm、確認面からの深さは30cmである。層位は1層(焦茶色土)、2層(茶褐色土)、3層(茶褐色土)に分かれる。3層は土坑内ピット(P43)である。遺物は出土していない。

第4号土坑

調査区北東側で検出したもので、第3号住居跡及び第1号溝により削平されている。一部調査区域外に伸びる。隅丸方形のプランを呈し、長軸61cm、短軸1.11m確認面からの深さは5cmである。遺物は出土していない。

第5号土坑

調査区北東側で検出した。第1号溝により面積半分ほどを第1号溝により削平されている。円形のプランであるものと推定される。長軸1.13m、短軸62cm、確認面からの深さは25cmである。層位は不明であり、遺物は出土していない。

第6号土坑

調査区北側中央で検出した。一部攪乱により削平されている。不整楕円形を呈し、長軸74cm、短軸57cm、確認面からの深さは14cmである。層位は不明であるが、ピットを伴っている。 (P44) この遺構から縄文時代中期、加曽利E式士器が出土している。

第7号土坑

調査区南側で検出した。一部第2号住居跡、第11号土坑、ピット2基(P18、P35)により削平されている。不整円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.71m、確認面からの深さは53cmである。層位は不明であるが、ピットを伴っている。(P44)この遺構から土器を転用した土器片錘及び縄文時代中期加曽利E式土器の胴部破片が出土している。

第8号土坑

調査区南東側で検出した。攪乱により東側を一部削平されている。楕円形を呈し、長軸76cm、短軸53cm、確認面からの深さは12cmである。層位は不明であるが、ピットを伴っている。 (P14) 遺物は出土していない。

第9号土坑

調査区南東側壁面付近で検出した。一部調査区域外に伸びる。一部をピットにより削平されている。 (P36) 楕円形を呈し、長軸74cm、短軸43cm、確認面からの深さは7cmである。層位は1層(暗褐色土)の1層のみである。ピットを伴っている。 (P38) 遺物は出土していない。

第10号土坑

調査区南側中央で検出した。攪乱により西側を一部削平されている。隅丸方形のプランを呈し、長軸36 cm、短軸66cm、確認面からの深さは10cmである。層位は不明であるが、ピットを伴っている。遺物は出土していない。

第11号土坑

調査区南東側で検出した。楕円形のプランを呈し、長軸81cm、短軸51cm、確認面からの深さは6cmである。 層位は不明であるが、ピットを2基件っている。遺物は出土していない。

第12号土坑

調査区中央よりやや北東側で検出した。第1号住居跡、第13号土坑及び第1号溝により削平されている。 プランは不明、長軸71cm、短軸44cm、確認面からの深さは9cmである。層位は不明である。遺物は出土していない。

第13号土坑

調査区中央よりやや北東側で検出した。第1号住居跡及び第1号溝により削平されている。第12号土坑を切っており、第12号土坑よりは新しい遺構である。プランは不明、長軸44cm、短軸41cm、確認面からの深さは26cmである。層位は不明である。遺物は出土していない。

第14号土坑

調査区北西側隅で検出した。不整形のプランを呈しており、長軸1.08m、短軸64cm、確認面からの深さは36cmである。層位は不明であるが、ピット(P68)を伴う。遺物は出土していない。

第15号土坑

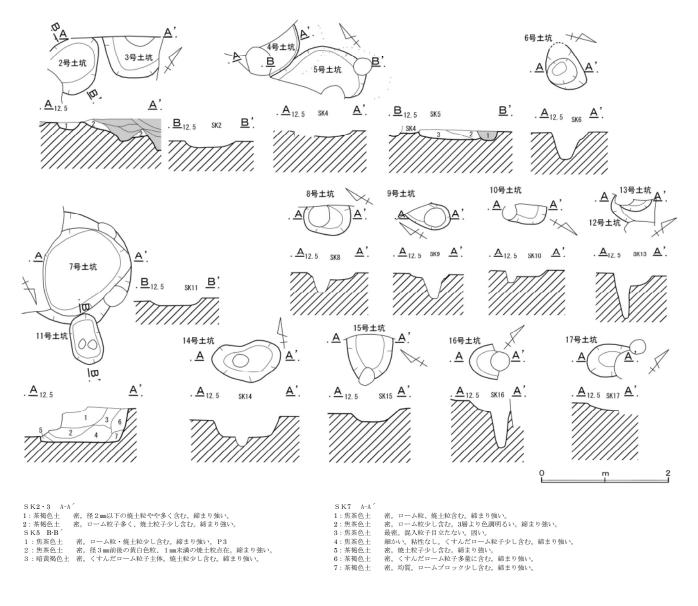
調査区北西側で検出した。攪乱により東側、ピット (P39) により西側を一部削平されている。楕円形のプランを呈し、長軸76cm、短軸74cm、確認面からの深さは16cmである。層位は不明である。遺物は出土していない。

第16号土坑

調査区西側中央で検出した。攪乱により東側を一部削平されている。また、第17号土坑の一部を削平している。よって第17号土坑より新しい遺構である。楕円形のプランを呈し、長軸1.51m、短軸68cm、確認面からの深さは22cmである。層位は1層(焦茶色層)のみである。第16号の下層にピットが存在する。(P63)遺物は出土していない。

第17号土坑

調査区西側中央で検出した。第16号土坑、ピット (P64) 及び攪乱により東側を一部削平されている。楕円形のプランを呈し、長軸69cm、短軸55cm、確認面からの深さは14cmである。層位は不明。遺物は出土していない。



第8図 土坑

3 第3号住居跡·土坑出土遺物(第9図)

1は第3号住居跡から出土した。1は深鉢の胴部の破片であり、縄文が施されており繊維を含んでいる。 縄文時代前期黒浜式と考えられる。2及び3は第2号土坑から出土した。2は深鉢の胴部の破片であり、 浅い縄文が施されている。加曽利E式土器と考えられる。3は深鉢の胴部の破片と考えられ、無文である。 時期は不明である。4は第6号土坑から出土した。4は深鉢の胴部の破片であり、縄文及び沈線文が施されている。加曽利E式土器と考えられる。5及び6は第7号土坑から出土した。両方とも縄文が施されている。加曽利E式土器と考えられる。



第9図 第3号住居跡・土坑出土遺物

4 ピット

74基、検出面は包含層上面及びローム層上面で確認された。

第1表 ピット計測表

単位 cm 深さは確認面よりの深さ

No.	長径	短径	深さ												
1	50	44	27	20	24	23	18	39	30	23	49	58	18	18	59
2	55	45	35	21	17	11	10	40	32	26	18	59	33	32	30
3	30	27	11	22	36	28	37	41	33	23	15	60	35	20	23
4	25	22	14	23	42	40	31	42	37	25	13	61	30	30	18
5	30	24	16	24	44	40	83	43	48	18	29	62	27	15	15
6	30	29	27	25	45	40	10	44	32	20	44	63	30	30	59
7	30	26	21	26	26	23	8	45	40	22	11	64	25	20	74
8	48	47	45	27	56	50	52	46	27	23	13	65	30	30	10
9	19	17	15	28	40	25	58	47	25	22	35	66	35	13	6
10	32	26	7	29	47	14	23	48	30	30	9	67	30	30	25
11	30	26	9	30	24	20	62	49	32	27	31	68	24	23	17
12	33	30	45	31	30	22	12	50	34	28	39	69	30	25	不明
13	15	15	91	32	38	28	5	51	26	23	45	70	22	15	25
14	35	35	21	33	32	24	5	52	35	30	6	71	32	14	27
15	22	18	74	34	30	17	10	53	20	16	11	72	60	30	18
16	30	14	77	35	35	14	16	54	27	22	46	73	欠番		
17	50	40	44	36	33	6	19	55	19	18	12	74	12	10	95
18	38	30	38	37	42	35	11	56	17	14	15				
19	39	35	13	38	35	30	35	57	20	19	35				

5 ピット出土遺物 (第10図)

7及び8は第13号ピットより出土した。深鉢の胴部破片で竹菅文が施されている。縄文時代前期諸磯式と考えられる。8はやや細い縄文が施されている。縄文時代中期加曽利E式と考えられる。

9は第40号ピットより出土した。深鉢の胴部破片で隆帯及び沈線文が施されている。縄文時代中期加曽利E式と考えられる。10は第41号ピットより出土した。チャート製の石匙である。下部を欠損している。



第10図 ピット出土遺物

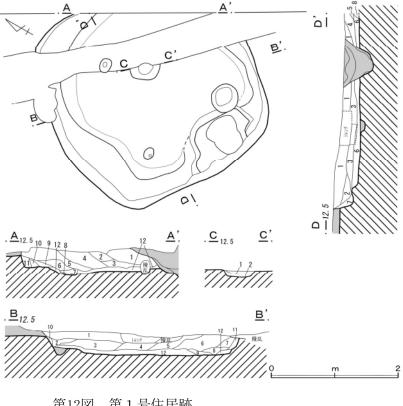
1 号柱穴列 搅乱 2号住居跡 2号溝 搅乱 撹乱 撹乱 4号住居跡

第2節 弥生時代~古墳時代の遺構と遺物

第11図 弥生時代~古墳時代の遺構

1 第1号住居跡(第12図)

調査区東側で検出した。一部調査区域 外に伸びる方形のプランを示すものと考え られる。長軸3.30m、短軸2.29m、確認面 からの深さは約15~20cmである。底面は平 坦である。西側の一部を弥生時代から古墳 時代の遺構である第1号溝により切断され ている。住居内ピットは全部で2基存在す る。炉を伴う。層位は1層(黒褐色土)、 2層(黒褐色土)、3層(黒褐色土)、4 層(黒色土)、であり、5層(茶褐色土)、 6層(茶褐色土)、7層(暗褐色土)、8 層(茶褐色土)、9層(茶褐色土)に分か れる。6層は貼床で、9層は住居内ピット である。弥生時代から古墳時代の赤彩があ る土師器が出土したことにより、弥生時代 から古墳時代前期にかけての遺構であると 考えられる。



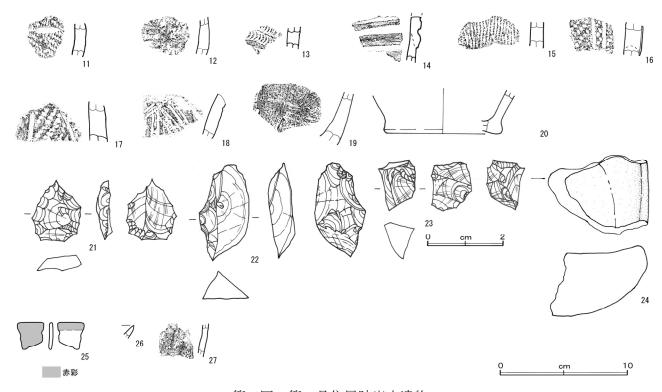
第12図 第1号住居跡

府内三丁目南遺跡

```
A-A´
1: 黒色土
2: 黒褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          C-C´
1:灰層
                                                       密、ローム粒子、径 1 mmの焼土粒子少し含む、締まりあり。
密。ローム粒、黒色土粒、径 1 mmの焼土粒やや多く含む。締まりあり。
緩密。ローム粒子、径 1 mmの焼土粒やや子多く含む、締まり強い。
細かい、くナルだローム粒、焼土粒、黒色土粒含む、締まり強い。
12層より均質。ローム粒目立たない。径 2 mmの焼土粒含む。締まり強い。
13層より色調晴い。焼土粒目立たない。経 2 mmの焼土粒含む。締まり強い。
窓、ローム粒、黒色土粒やや多く含む。締まり強い。
報と、2 mmの乗車が乗り強い。
複数を 2 mmの乗当の焼土物やす。 後まり mmの 2 
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       黒灰色の微粒子。径 1\sim6 mm焼土粒やや多く含む。締まりあり。
粒状の焼土、焼土粒子主体。黄褐色の被熱ローム粒もやや多く含む。締まりあり。
床は焼成甘い。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            2:焼土
3: 里色十
4: 無茶色土
5: 無茶色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  やや粗い。ローム粒子・径1mm焼土粒子少し含む。締まりあり。
やや粗い。1層より鬼味強い、締まりあり。
やや粗い。ローム粒の混入多い、締まり強い。
やや粗い。ローム粒・径1mm焼土粒少し含む。締まりややあり。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          1: 黒褐色土
2: 黒褐色土
3: 黒褐色土
6: 焦茶色土
7:暗褐色土
8:暗褐色土
                                                         緻密。径1mm未満の焼土粒含む。締まり強い
9: 焦茶色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           4: 黑色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  やや粗い。 ローム和・Hz IIIII リーロン しっし。 かんやれい。 粒状。 締まりあり。
やや粗い。 ローム粒・ブロック含む。 固い。 貼床。
やや粗い。 くすんだローム粒主体。 締まりあり。
やや粗い。 くすんだローム粒主体。 締まりあり。
                                                    やや粗い。ローム粒やや多く含む。締まり強い。
くすんだローム粒・小ブロック含む。固く締まる。
ロームブロック主体。黒色土粒含む。固い。貼床。
 10: 焦茶色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           5:茶褐色土
12: 黄褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           7:暗褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           8:茶褐色十
В-В
1:DD '-1層
2:黒褐色土
3:DD '-3層
4:黒褐色土
                                                           DD'-2層に似る
                                                           細かい。黒色土粒子の混入多い。締まり強い。
細かい。ローム粒、焼土粒少し含む。締まり強い。
DD ・4層に似る。
             茶褐色土
 6: 黒色土
10:暗黄褐色土
11:茶褐色土
12:暗褐色土
                                                          ブロック状。固く締まる。貼床。DD'-6層。
細かい。ローム粒含む。締まり強い。
```

2 第1号住居跡出土遺物 (第13図)

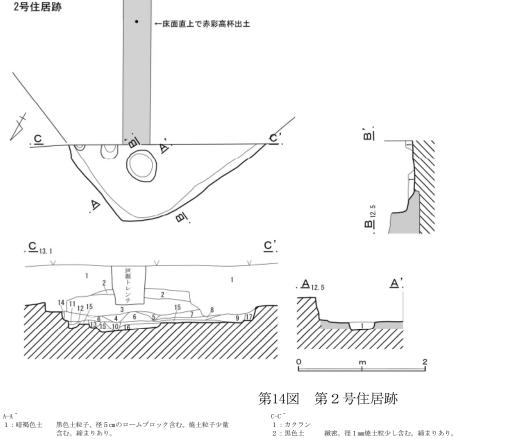
11から18は深鉢の胴部破片である。12は繊維を多く含んでいる。縄文時代前期黒浜式土器である。13は細い縄文に竹管文が施されている。縄文時代前期諸磯式と考えられる。14から17は縄文及び沈線文が施されている。18は沈線文が施されている。19及び20は深鉢底部破片である。14から20は縄文時代中期加曽利臣式と考えられる。21は黒曜石製の石鏃である。22はチャート製のリタッチドフレイクである。23は黒曜石の剥片を作る際の石核であると考えられる。24は石皿である。25から27は土師器の破片である。25及び26は口縁部の破片で、25の表裏には赤彩が施されている。27は胴部破片である。



第13図 第1号住居跡出土遺物

3 第2号住居跡 (第14図)

調査区南側で検出した。一部調査区域外に伸びる方形のプランを示すものと考えられる。長軸2.75m、短軸1.80m、確認面からの深さは約20cmである。底面は平坦である。住居内ピットは全部で2基存在する。調査区内では炉は確認されなかった。層位は1層(黒褐色土)、2層(黒色土)、3層(黒色土)、4層(黒色土)、5層(茶褐色土)、6層(焦茶色土)、7層(焦茶色土)、8層(黒褐色土)、9層(黒褐色土)、10層(黒褐色土)、11層(暗黄褐色土)、12層(暗黄褐色土)、13層(黒褐色土)、14層(黒色土)に分かれる。8層及び9層は住居内ピットである。第2号住居跡は第7号土坑を切土しており、第7号住居跡よりも時期が古い。第2号住居跡からは土師器の高坏が出土していることから、弥生時代から古墳時代の遺構であると考えられる。

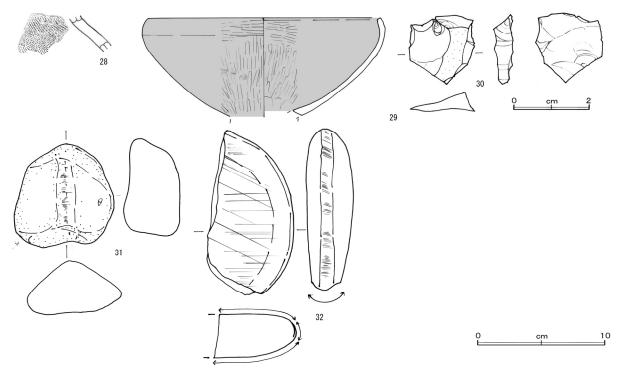


```
緻密。径 1 mm焼土粒少し合む。締まりあり。
密、ローム粒、径 2 mm焼土粒合む。締まりあり。
密、ローム粒、白色粘土粒合む。締まりあり。
密、ローム粒・白色粘土粒合む。締まりあり。
密、各径 2 mmの焼土粒、白色粘土粒合む。締まりあり。
ら層にほぼ同じだが、焦米色土粒子混入、締まりあり。
・ 2 かや相、ローム粒少し、焼土粒径 1 mm少し合む。締まり強い。
・ やや相、ローム粒少し、焼土粒径 1 mm少し合む。締まり強い。
・ 2 mmのよれが、焼土粒少し合む。締まり強い。
・ 2 mmのよれが、焼土粒少し合む。締まり強い。
・ 3 mmのよれが、焼土粒の上含む。締まりあり。 11・12・2住 P 3 相い。ロームかプロック、無色土粒やや多く、径 3 mm焼土粒合む。締まりあり。 2 住 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 生 P 2 
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             無茶色土
無茶色土
黒褐色土
  <sub>D-D</sub>
1:黄褐色土
                                                                                                          ブロック状のローム。黒色土ブロック含む。固い。
ブロック状のローム。1層より黒色土少ない。固い。
2: 苗褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               里褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               黒色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               黒色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               茶褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    9: 焦茶色土
10: 焦茶色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    11: 黒褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    12: 黒褐色土
13: 黒褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 2住P2
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    14:暗黄褐色土
15:暗黄褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 ローム粒子多量。締まりあり。
ロームブロック主体。黒色土粒含む。固い。貼床。
黒色土粒子多く、ロームブロック少し含む。締まり強い。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    16: 黒褐色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      17: 里色土
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     密。締まり強い。
```

4 第2号住居跡出土遺物 (第15図)

28は土師器の高坏の頸部である。羽状縄文に、円形赤彩文が施されている。29は試掘調査により出土し

た。調査区外の住居跡床面直上で確認された土師器の高坏であり、口縁部ではヨコミガキ、下部及び裏面ではタテミガキがなされ、全体に赤彩が施されている。30は黒曜石製の剥片である。31及び32は磨石である。



第15図 第2号住居跡出土遺物

5 第4号住居跡(第16図)

調査区西側で検出した。一部調査区域外に伸びる方形 4号住居のプランを示すものと考えられる。長軸63cm、短軸2.41 m、確認面からの深さは約15~25cmである。底面は平坦である。住居内ピットは全部で1基存在する。調査区内では炉は確認されなかった。層位は1層(焦茶色土)、

2層(焦茶色土)、3層(焦茶色土)、4層(黒褐色土);<u>△</u>12.6

5層(黒褐色土)、6層(黒色土)、7層(黒褐色土)

8層(黒色土)、9層(黒褐色土)、10層(黒褐色土)

11層(黒色土)、12層(黒褐色土)、13層(茶褐色土)

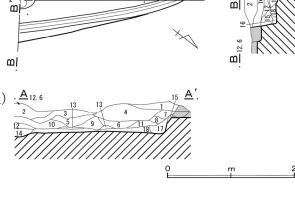
14層(黒色土)、15層(茶褐色土)、16層(茶褐色土)

17層(茶褐色土)、18層(暗黄褐色土)、19層(暗黄褐

色土) に分かれる。14層が住居内ピット、19層は貼床であ

る。土製品(漆玉)が出土したことにより、弥生時代から

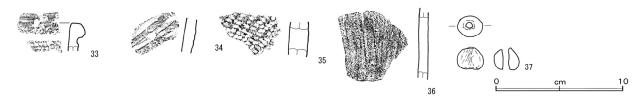
古墳時代の遺構であると考えられる。



第16図 第4号住居跡

6 第4号住居跡出土遺物 (第17図)

33から36は縄文時代中期加曽利E式土器の破片である。33は深鉢の口縁部の破片であり、隆帯文を呈する。34から36は深鉢の胴部片である。34は沈線文が施されている。白色微粒子を多量に含む。35は深鉢の胴部片であり、全体に縄文が施されている。36は浅い沈線文が施されている。37は土製品(漆玉)であり、中心に穿孔がある。重さ0.22gである。

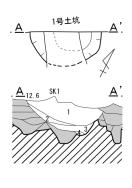


第17図 第4号住居跡出土遺物

7 土坑 (第18図)

第1号土坑

調査区北側壁面で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。 円形のプランを示している。第3号住居跡と第3号土坑及び第1 号溝を切断している。よって、第3号住居跡、第3号土坑及び第 1号溝より新しい遺構であることが分かる。プランは遺構の大部 分が調査区外に伸びていることからはっきりしない。長軸1.13m、 短軸62cm、確認面からの深さは25cmである。層位は1層(黒色土) 、2層(黒褐色土)、3層(暗黄褐色土)、4層(暗黄褐色土)に 分かれる。遺物は出土していない。



ATA 1: 黒色土 密。ローム粒、焼土粒微量に含む。締まりあり。 2: 黒褐色土 やや粗い、黒色土粒多く、焦茶色土粒も含む。締まりややあり。 3: 暗黄褐色土 色調明るいローム粒・小ブロック主体。締まり強い。 4: 暗黄褐色土 ローム細層 固い

第18図 土坑

8 溝 (第19図)

第1号溝

調査区南西から北東側で検出した。一部調査区域外に伸びる。上端幅が約80cm、下端幅が約20cm、深さ約55から60cmで底面は平坦で、断面は深いU字形である。第1号住居跡、第3号土坑、第5号土坑を削平しており、第1号土坑により削平されている。北側の一部が攪乱を受けている。遺構覆土は東側では異なる黒褐色土の4層に分かれているが、北側では同一の黒褐色土の1層のみとなっている。南側の遺構外との境目では覆土が赤く覆土の下半が硬化している状態が確認された。この遺構からは縄文時代の前期諸磯式土器、加曽利E式土器や弥生時代から古墳時代の土師器の高坏、壺、甕、碗型滓や炉の壁が出土した。この溝は弥生時代から古墳時代の遺構と考えらえる。

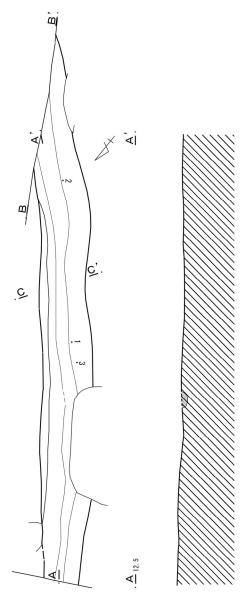
第2号溝

調査区南西側で検出した。この遺構の西側で検出された第3号溝と平行して検出された。溝の北側及び南側は攪乱を受けており、一部のみの検出となっている。そのため、全体の形状は不明である。検出長は4.0m。検出している状態より、上端幅が約20から35cm、下端幅が約15cm、深さ約10から15cmで底面は平坦で、断面は浅いU字形である。この遺構からは遺物は出土していないため、時期は不明である。

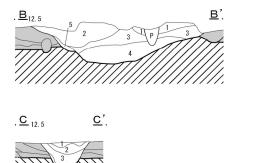
第3号溝

調査区南西側で検出した。この遺構の東側に第2号溝が平行して検出された。溝の北側及び南側は攪乱を受けており、一部のみの検出となっている。そのため、全体の形状は不明である。検出長は1.02m。検出している状態より、端幅約20から35cm、深さ約10から15cmで底面は平坦で、断面は浅いU字形である。この遺構からは遺物は出土していないため、時期は不明である。

1号溝

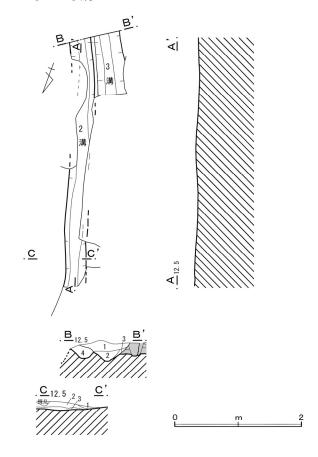


※ 上記の1~3については、鉄滓出土箇所である。



m

2号 • 3号溝



1 号構 B-B・1: 黒色土 密。ローム粒、焼土粒微量に含む、締まりあり。 セ: 黒色土 2: 黒褐色土 やや粗い。黒色土粒多く、焦茶色土粒も含む。締まりややあり。 3: 暗黄褐色土 色調明るいローム粒・小ブロック主体。締まり強い。 4: 暗黄褐色土 ローム純層。 固い

1号溝 C-C だ ! 無褐色土 粒子細かい。ローム粒少し含む。締まりやや弱い。
2: 黒褐色土 1層より細かい。西側で1住覆土に似る焦米色粒子混入多い。締まりややあり。
3: 黒褐色土 2層よりも焦米色土粒子の混入多く、かつ満遍ない。締まりややあり。
4: 黒褐色土 粗い。ローム粒混入多い。締まりあり。

 2・3号溝 C-C^{*}

 1: 黒色土
 緩密。均質。締まりあり。2号溝

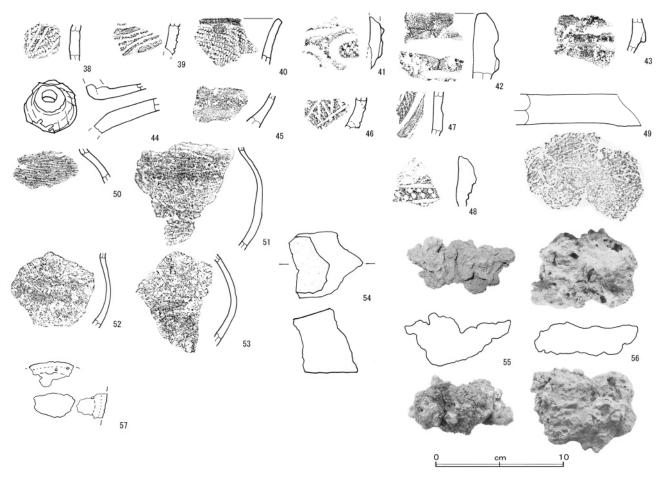
 2: 焦茶色土
 密。焼土粒少し含む。締まり強い。

 3: 茶褐色土
 密。焼土粒少し含む。締まり強い。

第19図 溝

9 溝出土遺物 (第20図)

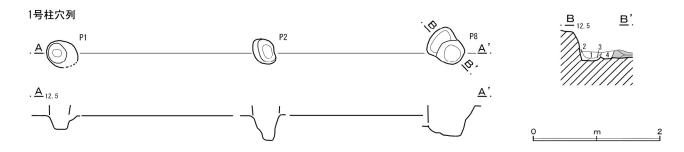
全て第1号溝より出土した。38及び39は縄文時代前期諸磯式の深鉢胴部破片であり、38は細い縄文と竹管文が施されている。39は竹管文による沈線が施されている。40から42は縄文時代中期加曽利E式土器の破片である。40は深鉢の口縁部の破片であり、やや細めの縄文が施されている。41及び42は深鉢口縁部の破片で円弧のような沈線文が施されている。43は深鉢口縁部下部の破片であり、隆帯文が施されている。44は縄文時代後期堀之内式の注口土器の注口部の破片である。45から48は加曽利E式の深鉢胴部の破片である。46は沈線文、47は縄文及び沈線文、48は刺突文及び沈線文が施されている。49は埋甕底部の破片である。50から53は土師器の甕の破片である。51はヨコナデが施されており、50及び52と同一個体と考えられる。53は甕の胴部の肩部近くの破片であり、ヨコハケメが施されている。54は石皿、55及び56は碗型滓、57は炉の壁の破片である。



第20図 溝出土遺物

10 柱穴列 (第21図)

調査区北側から南北で3基検出した。これらはすべて同時期の遺構と考えられ、南北に一定の間隔を維持し確認された。長径45~50cm、短径35~45cmで、深さは30~70cmである。北側の1基は3号住居跡及び第4号土坑と重複している。第1号溝及び第1号住居跡に重複している柱穴もあり、これらは第1号住居跡及び第1号住居跡よりも新しい遺構である。しかし、遺物の出土はないため、時期は不明である。



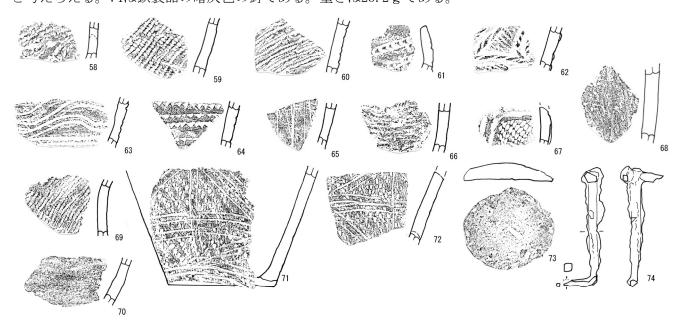
- 緻密。ローム粒多量に含む。締まりあり。

- : 熊茶色土 緻密。 締まりあり。
 : 暗黄褐色土 緻密。 くすんだ色調。黒色土粒子含む。締まりあり。
 : 黒褐色土 密。 ローム粒、径 1 mm焼土粒少し含む。締まりあり

第21図 柱穴列

11 包含層出土遺物 (第22図)

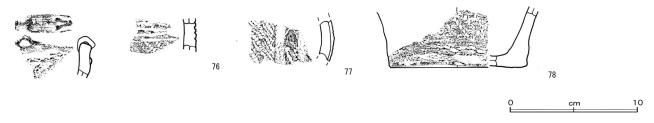
58は深鉢胴部破片で繊維を含む。黒浜式土器である。59は深鉢胴部破片であり、縄文が施されている。 黒浜式である。60は深鉢胴部破片であり、黒浜式土器である。61は深鉢口縁部破片で、竹管文が施されて いる。諸磯式である。62は深鉢胴部破片で、縄文が施されている。諸磯式である。63は深鉢胴部破片で、 竹管文が施されている。諸磯式である。64は深鉢形胴部破片で、刺突文が施されている。浮島式である。6 5は深鉢胴部破片で、沈線文が施されている。66は深鉢形胴部破片で、縄文が施されている。阿玉台式と思 われる。67は深鉢形口縁部の破片であり、縄文と沈線文が施されている。加曽利E式である。68は深鉢形胴 部破片であり、沈線文が施されている。加曽利E式である。69は深鉢形胴部破片であり、縄文が施されて いる。70は深鉢胴部破片である。無文である。71は深鉢形胴部の下部の破片であり、半裁竹管文が施され ている。72は深鉢形胴部破片で、71と同一個体と考えられる。73は深鉢底部破片で、71及び72と同一個体 と考えらえる。74は鉄製品の暗灰色の釘である。重さは23.2gである。



包含層出土遺物 第22図

12 遺構外出土遺物 (第23図)

75は深鉢口縁部の破片であり、縄文時代前期諸磯式である。76は深鉢胴部破片であり、縄文及び竹管文が施されている。縄文時代前期諸磯式である。77は深鉢胴部の破片であり、縄文が施されている。縄文時代中期後葉加曽利E式である。78は深鉢底部の破片であり、縄文が施されている。



第23図 遺構外出土遺物

第2部

白鍬宮腰遺跡(第8・10次調査)

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

(第8次調査)

自鍬宮腰遺跡の範囲内のさいたま市桜区大字白鍬字宮腰における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを承け、平成22年4月15日にさいたま市教育委員会が確認調査を実施したところ、古墳時代の住居跡などの遺構・遺物の所在が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日は、例言5 (p.(1)) のとおりである。

(第10次調査)

白鍬宮腰遺跡の範囲内のさいたま市桜区大字白鍬字宮腰における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを承け、平成22年11月2日にさいたま市教育委員会が確認調査を実施したところ、古墳時代の溝跡などの遺構・遺物の所在が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日は、例言5(p.(1))のとおりである。

第2節 調査の方法と経過

(第8次調查)

発掘調査は、平成22年5月10日から同年5月25日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。排土処理の都合上、全体を南北の2区に分割して調査を行うこととし、南半分を1区、北半分を2区とした。調査は1区より着手し、1区の調査完了後に2区の調査を実施した。

5月10日に調査機材を現地に搬入し、重機を用いて1区の表土層の除去を行った。その後人力で遺

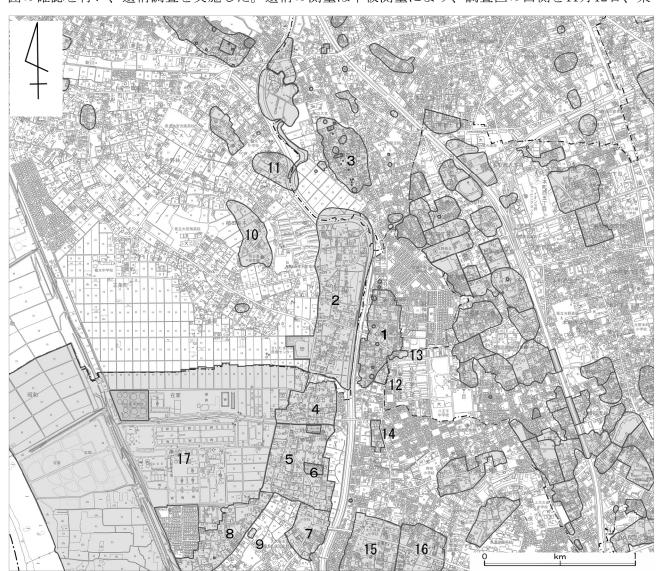
白鍬宮腰遺跡

構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、5月18日に実施した。 1区の調査完了後、5月19日に重機を用いて1区の埋戻し及び2区の表土除去を行った。その後人力 で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、5月21日に実施し た。2区の調査完了後、5月25日に重機を用いて2区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における 発掘調査の作業を終了した。

(第10次調査)

発掘調査は、平成22年11月9日から11月24日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。

11月9日に調査機材を現地に搬入し、重機を用いて表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、調査区の西側を11月12日、東



1:白鍬宮腰遺跡 2:根切遺跡 3:側ヶ谷戸貝塚 4:在家稲荷遺跡 5:宿宮前遺跡 6:宿宮前寺院跡 7 古貝戸遺跡 8:塚本西耕地遺跡 9:塚山古墳 10:金谷遺跡 11:林光寺遺跡 12:白鍬遺跡 13:殿の前遺跡 14:宮田遺跡 15:大久保領家遺跡 16:大久保領家片町遺跡 17:大久保条里遺跡

第24図 遺跡の位置

側を11月19日に実施した。調査完了後、11月23日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、11月24日に機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

白鍬宮腰遺跡は、さいたま市の西部、桜区大字白鍬に所在する。JR与野本町駅から西に約2kmの位置にあり、遺跡の範囲は南北約660m、東西約280mである。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世にわたる遺跡として、埋蔵文化財包蔵地として周知している。また、遺跡内及び隣接地に、別個の埋蔵文化財包蔵地として周知している古墳が7基所在する。これらのうち、遺跡南寄りの白鍬塚山古墳、御嶽山古墳、中央付近の権現塚古墳、北寄りのかね山古墳は、墳丘の一部が現存している。地形上は、さいたま市西部の荒川低地を南北に流れる鴨川の東岸、大宮台地からは約300m幅の低地を隔てて分離した残丘状の台地と、その南側に形成された自然堤防の上に立地しており、遺跡内の標高は台地側で約9~10m、自然堤防側で約8mである。現在の鴨川の流路は、白鍬宮腰遺跡付近ではかつての利根川・荒川・入間川を合わせていたと考えられる川の流路跡を辿っており、両岸に発達した自然堤防はこの川の氾濫により形成されたものと考えられている。

遺跡内ではこれまでに、開発に伴う発掘調査が、旧浦和市、さいたま市および旧浦和市遺跡調査会、さいたま市遺跡調査会により16地点で行われている(第2表)。発掘調査によって、それまで確認されていなかった古墳(一部は円形周溝として報告)の周溝が合計17基分確認されており、既知の古墳7基と合わせ、これまでに確認された古墳は延べ24基を数える。形状は、白鍬塚山古墳が前方後円形あるいは帆立貝形である可能性が指摘されている他は円墳と考えられている。築造の時期は、白鍬塚山古墳のみ周溝から横方向のハケ目を持つ埴輪の破片が出土していることから5世紀頃、その他の古墳のうち埴輪等で時期が推定されているものについては5世紀末~6世紀頃の築造とみられている。第2次調査では円形周溝からも銅鏡などが出土し、出土遺物は「白鍬宮腰遺跡出土品」として平成4年(1992年)に市指定文化財となっている。

白鍬宮腰遺跡の東側には、旧市境を隔てて殿の前遺跡が所在する。地形は自然堤防が連続しており、遺跡の西端、白鍬通りの南側で、昭和39年(1964年)9月、土取り工事中に遺物が出土し、応急処置が行われた。出土した遺物は、須恵器の樽形聴1点、把手付無蓋高坏1点、壺型土器2点、坏形土器2点で、出土状況等は、大塚初重・坂本明美「埼玉県白鍬遺跡の須恵器」『駿台史学』第9号 駿台史学会(1959)に報告されている。樽形聴と高坏は黒褐色の胎土、器面には波状紋を持つもので、5世紀代の産、朝鮮半島からの渡来品とみられている(与野市総務部市史編さん室編『与野市史 自然・原始古代資料編』与野市(1984) pp. 664-666)。現在は埼玉県立博物館に所蔵されている。

白鍬宮腰遺跡の南東側の自然堤防上には白鍬遺跡が隣接している。白鍬遺跡では、昭和40年(1965年)、土木工事中に須恵器の壺型土器及び坏が出土し、平成4年に埼玉県指定文化財(「白鍬遺跡出土須恵器壺」)に指定された。この壺は5世紀後半、陶邑窯跡群の産になるものと考えられている。

第2表 白鍬宮腰遺跡発掘調査一覧

遺跡・	調査次数	調査年月	古墳跡	調査報告書
	第1次	1984年 1~2月	円形周溝1基	『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第51集(1985)
	第2次	1988年 4~6月	白鍬塚山古墳 円形周溝2基	『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書(第2次)』 浦和市遺跡調査会報告書第123集(1989)
	第3次	1991年 6~7月	円形周溝1基	『大古里遺跡(第13地点) 白鍬宮腰遺跡(第3地点) 本杢遺跡(第5地点) 白鍬遺跡(第3地点)』 浦和市内遺跡発掘調査報告書第17集(1992)
	第4次	1996年 4~9月	円墳7基	『白鍬宮腰遺跡 県営浦和白鍬団地建設関係埋蔵文化財 発掘調査報告』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第227集(1998)
	第5次	2004年 11~12月	なし	『白鍬宮腰遺跡(第5次)』 さいたま市遺跡調査会報告書第44集(2005)
	第6次	2005年 11月	円墳1基	『道場寺院跡(第3次)・別所西野台遺跡(第2次)・ 上木崎三丁目北遺跡(第1次)・白鍬宮腰遺跡(第6 次)・覚蓮寺遺跡(第1次)』 さいたま市内遺跡発掘調査報告書第6集(2007)
白鍬宮腰遺跡	白 鍬 第7次 2008年 3~4月 なし	『宿宮前遺跡(第8次調査)・白鍬宮腰遺跡(第7次調査)・根岸遺跡(第10次調査)・桜山貝塚(第3次調査)・ 村谷遺跡(第18次調査)』 さいたま市内遺跡発掘調査報告書第13集(2014)		
遺跡	第8次	2010年 5月	1 基	本報告
	第9次	2010年 10~11月	1 基	『白鍬宮腰遺跡(第9次)』 さいたま市遺跡調査会報告書第130集(2012)
	第10次	2010年 11月	1 基	本報告
	第11次	2011年 9~11月	かね山古墳	『白鍬宮腰遺跡(第11次)』 さいたま市遺跡調査会報告書第129集(2012)
	第12次	2012年 5月	1 基	『白鍬宮腰遺跡(第12次)』 さいたま市遺跡調査会報告書第145集(2014)
	第13次	2012年 11~12月	1基(第8次 調査と同一)	未報告
	第14次	2016年 1~3月	白鍬塚山古墳 円墳2基	未報告
	第15次	2016年 8~9月	なし	未報告
	第16次	2017年 8~9月	なし	未報告
,	第1次	1989年 5~6月	円墳1基	『白鍬遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第126集(1990)
白鳅遺跡	第2次	1991年 9~10月	1基(第1次 調査と同一)	『白鍬遺跡発掘調査報告書(第2地点)』 浦和市遺跡調査会報告書第198集(1995)
	第3次	1991年 9月	なし	『大古里遺跡(第13地点) 白鍬宮腰遺跡(第3地点) 本杢遺跡(第5地点) 白鍬遺跡(第3地点)』 浦和市内遺跡発掘調査報告書第17集(1992)
かね	山古墳	1985年 4月	かね山古墳	浦和市文化財調査報告書第30集(1986)

白鍬宮腰遺跡



第25図 調査区の位置

白鍬宮腰遺跡

また、その後3地点で発掘調査が行われており(第2表)、5世紀後半と推定されている円墳1基が確認されている。

遺跡の北側では大宮台地の縁が鴨川東岸までせり出しており、台地上から裾にかけては、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である御屋敷山遺跡、西浦1号遺跡、側ヶ谷戸貝塚などの遺跡や、台耕地稲荷塚古墳、茶臼塚古墳、稲荷塚古墳などの古墳が所在する。古墳は側ヶ谷戸古墳群と総称されており、各古墳の築造の時期は6世紀後半~7世紀頃と推定されている。白鍬宮腰遺跡付近の古墳よりやや新しい時期であり、第4次調査報告書(埼玉県埋蔵文化財調査事業団(1998))では、古墳の築造地域が徐々に北方に移動したように見受けられることが指摘されている。

鴨川の対岸にも自然堤防が発達しており、弥生時代後期から平安時代にかけての遺跡である根切遺跡などが所在する。根切遺跡の調査では「川津」の墨書のある須恵器や馬の骨、南西方の宿宮前遺跡や宿宮前寺院跡の調査では、古代の布目瓦や仏像の螺髪などの出土もみられる。

いずれの遺跡でも、古墳時代から平安時代にかけての遺構・遺物が多く確認されており、白鍬宮腰遺跡を含む、さいたま市南西部の鴨川沿岸の一帯には、鴨川の水運の便や後背湿地の水田を基盤として、古墳時代から古墳群の築造を行える規模の集落が存在し、奈良時代には寺院あるいは官衙が置かれ、平安時代に至るまで存続していたと推定されている。

これらの地域は、古代以降、自然堤防上は集落や畑として、周辺の低地は水田として利用されてきたと思われ、同様の土地利用は近代に至るまで継続している。白鍬宮腰遺跡の範囲では、遺跡の中央付近を東西に抜ける「白鍬通り」が、東方に位置する与野町と、西方の自然堤防上の集落(C-2号遺跡付近)とを結ぶ交通路として近世以前から拓かれており、また白鍬宮腰遺跡の東側でこの道から南西方に分岐し、自然堤防上を南下して宿宮前寺院跡へと達する古道もあり、これらの交通路に沿って近世から集落が存在していた。高度経済成長期以降は都市計画においても市街化区域とされたため、住宅や店舗、小規模な工場などが建ち並び、市街地化が進んでいる。

第2節 調査区の概要

(第8次調査)

第8次調査の調査面積は約32㎡である。遺構確認面は、自然堤防の基盤層である黄褐色土層の上面で、調査時の地表面からの深さは約50cmであった。

検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡1基、溝1条、時期不明のピットである。住居跡は調査区の南東側で検出された。遺構の西側は後述の溝に切られ、南側と東側は調査区外に続いているため、今回の調査では規模を確定することはできなかった。溝は調査区の西側で検出された。南北方向に延びており、やや東側にふくらむ円弧状のプランを持つ。埴輪が出土したことから円墳の周溝と思われる。なお、今回調査地点の西側の箇所で平成24年度に実施された第13次調査において、逆向きに弧を描く溝が確認されており、同一の古墳の周溝であるとみられている。

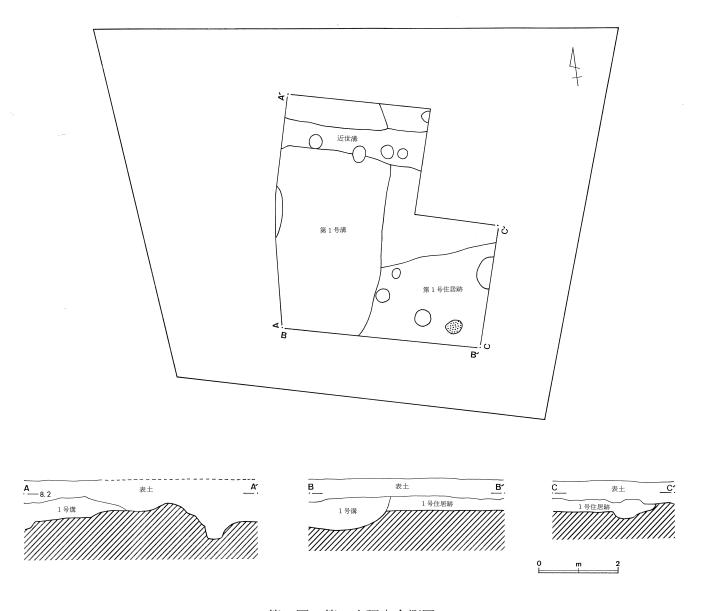
遺物は、住居跡から古墳時代の壺や高坏など、溝跡から埴輪破片などが、18リットル入り遺物収納容器3箱分出土した。

(第10次調査)

第10次調査の調査面積は約90㎡である。遺構確認面は、自然堤防の基盤層である黄褐色土層の上面で、調査時の地表面からの深さは約60cmであった。

検出された遺構は古墳時代の溝1条、時期不明の土坑3基、ピットである。溝は調査区の南東側で 検出された。調査区南東側を中心として、溝の外側で半径約7~8mとなる程度に弧を描いており、 円墳の周溝と思われる。調査区の東側には白鍬5号古墳が立地しており、この培塚である可能性も考 えられる。土坑は古代以降のものと思われるが、時期は確定できなかった。第3号土坑は溝の覆土を 切り込んでおり、古墳より新しい時期のものである。

遺物は、古墳時代の土器、鉱滓、古代の土器、布目瓦破片、石製の紡錘車などが、18リットル入り遺物収納容器 1 箱分出土した。



第26図 第8次調査全測図

第Ⅲ章 第8次調査の遺構と遺物

第3表 第1号住居跡内ピット計測表

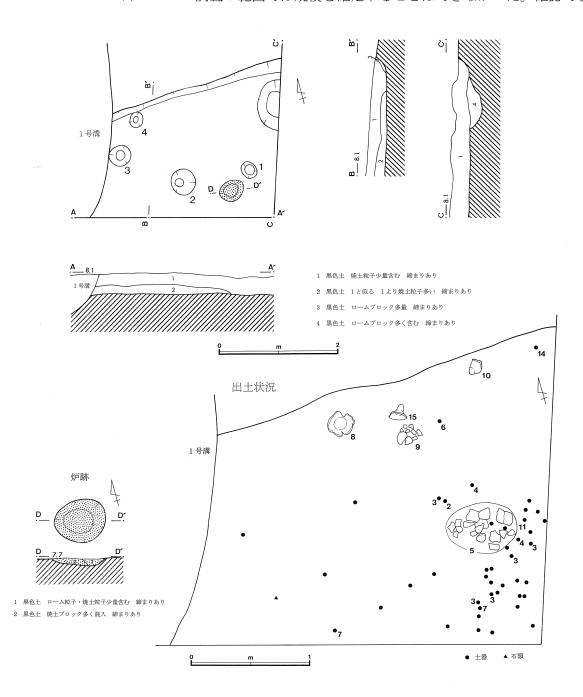
番号	長径	短径	深さ
1	30	24	6
2	44	40	45.5
3	36	34	8. 7
4	26	22	8

単位: cm

第1節 住居跡

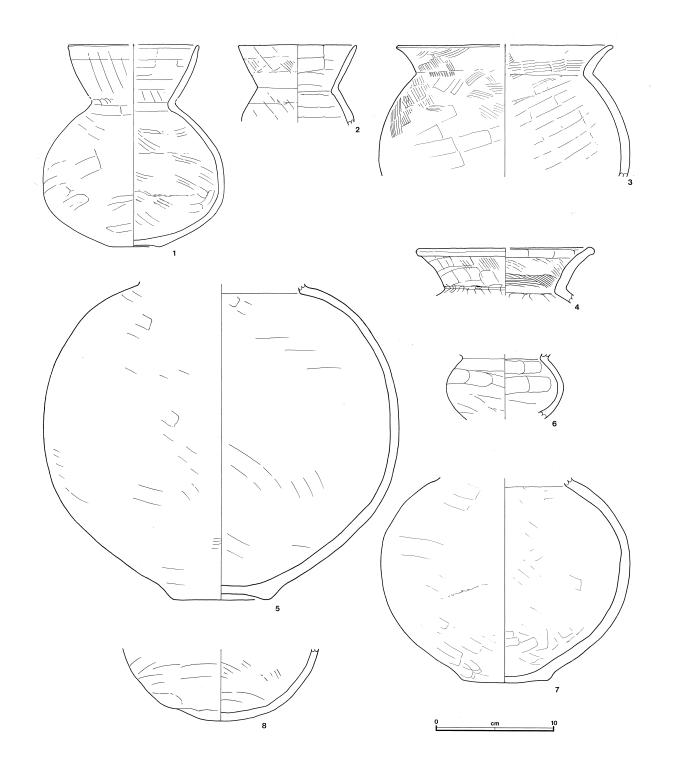
第1号住居跡(第27図・第3表)

調査区の南東側で検出された。平面形状は方形ないし長方形と思われるが、西側は溝に切られ、南側と東側は調査区外に続いており、調査の範囲では規模を確定することはできなかった。確認できた北



第27図 第8次調査第1号住居跡

側の壁の延長は約3 m、主軸はほぼ南北方向、確認面から床面までの深さは約35cmを測る。北側の壁から約1.8mの床面に炉跡が確認された。炉跡は長径45cm、短径35cm、床面からの掘り込みの深さ5 cmを測り、底面は良く焼けている。この炉跡の周囲の床面上では、甕型土器が複数出土した。また北側の壁沿いの床面からは、高坏型土器の脚部、椀型土器なども出土している。床面上の覆土には焼土粒子が多く含まれており、焼失住居である可能性も考えられる。6世紀頃の古墳の周溝と思われる第1号溝に切られること、及び出土した遺物から、古墳時代中期(和泉式期)、5世紀頃の遺構である。

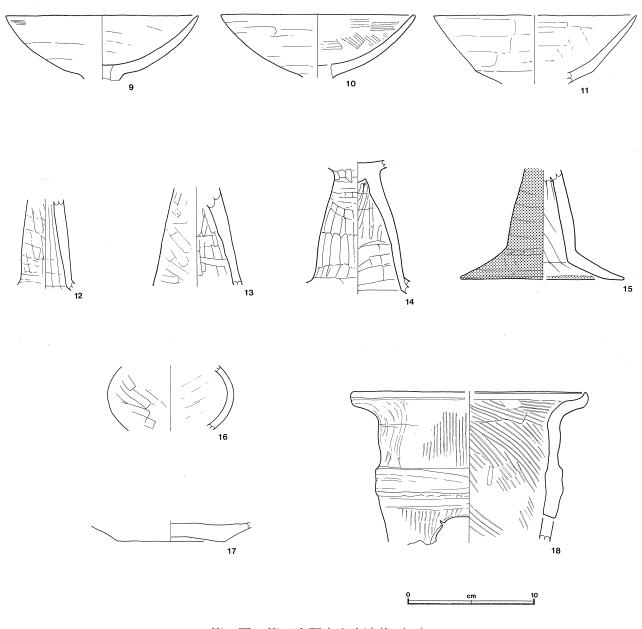


第28図 第8次調査出土遺物(1)

白鍬宮腰遺跡

第1号住居跡出土遺物 (第28図・第29図・第4表)

第28図1~7は土師器の壺型土器である。1は全体の形状が復元された。明褐色の胎土で、外面はヘラナデ調整、内面にはヘラ状工具による整形痕と輪積み痕が残る。器高は16.9cm、口径は約11cm、底径は4.4cmを測る。口縁部での残存率は約20%である。口縁部はやや内湾する。覆土上層から出土した。2~4は口縁部から頸部の破片である。2は茶褐色の胎土で、直径0.5mm程度の白色粒子を含む。残存高は6.8cm、口径は約10cm、口縁部の残存率は約87%である。口縁部は反らず、直線状である。炉跡北東側から出土した破片が接合した。3は褐色の胎土で、胴部の表面は風化し黒色を呈す。外面の上半部及び口縁部の内面にはハケ状工具による横・斜め方向の調整痕がみられる。残存高は約11cm、口径は約18cm、口縁部の残存率は10%である。口縁部はやや外反する。炉跡北東側から東側にかけて出土した破片が接合した。4は褐色の胎土で、直径0.5mm程度の白色粒子を含む。表面は風化し、内面は黒色を呈する。頸部の内面にはハケ状工具による整形痕が残る。残存高は4.6cm、口径は約15cm、口



第29図 第8次調査出土遺物(2)

第4表 住居跡内遺物・ 標高対照表

遺物 番号	出土位置 (調査時)	標高	
2	10	7. 995	
2	13	8.016	
	7	8. 033	
	36	7. 977	
3	37	7. 977	
	44	7. 904	
	45	7. 913	
4	8	7. 851	
4	32	7. 962	
	13	8. 016	
5	33	7. 892	
Э	35	7. 960	
	36	7. 977	
6	4	7. 938	
7	13	8. 016	
1	27	8. 028	
8	1	7. 940	
9	3	7. 934	
10	5	8. 044	
10	19	7. 987	
11	34	7. 912	
14	9	7. 974	
15	2	7. 938	
		 単位: m	

縁部の残存率は約45%である。口縁部はやや外反する。炉跡北側と東側で出土した破片が接合した。5~7は胴部である。5は褐色の胎土で、直径1mm程度の白色粒子を含む。残存高は24.4cm、頸部の外径は約14cm、胴部の最大径は約30cm、底径は約8cmを測る。胴部の残存率は約50%である。炉跡北東側で一括出土した破片が接合した。6は褐色の胎土で、直径0.5mm程度の白色粒子を含む。残存高は5.4cm、胴部の最大径は約10cmを測る。北側壁沿いで出土した。7は褐色の胎土で、外面の一部は黒く変色している。残存高は17.5cm、頸部の外径は約11cm、胴部の最大径は約21cm、底径は7.2cmを測る。炉跡南西側で出土した。底部と胴部の間で接合する箇所がなかったものの、出土状態から同一個体の破片と想定して図上で復元を行ったが、別個体である可能性もある。8は丸底の碗型土器の底部と思われる。胎土は褐色で、直径1mm程度の白色粒子を含む。外面は一部が黒く変色している。残存高は約6cmである。

第29図 9~15は高坏型土器の破片で、9~11は器部、12~15は脚部である。9・10は均一に内湾する椀型の器形を持つ。9は褐色の胎土で、表面は赤彩されていたものとみられるが、風化し細かく剥離している。残存高は約5 cm、口径は15.3 cm、口縁部の残存率は約52%である。北側壁沿いで破片が一括出土した。10は褐色の胎土で、表面は暗褐色を呈するが風化して細かく剥離している。内面にはハケ状工具による調整痕が残る。残存高は約5 cm、口径は15.4 cm、口縁部での残存率は約50%である。北側壁沿いで出土した破片と炉跡東側で出土した破片が接合した。11は褐色の胎土で、表面は風化している。外面に1段の稜を持ち、口縁部はゆるく内湾する器形を持つ。残存高は5.3 cm、口径は約16 cmで、口縁部の残存率は約15%である。第28図5の壺型土器と一括で、炉跡北東側で出土した。12は白褐色

単位:m の胎土で、直径約2mmの白色石片を多く含む。脚部の最大径は4.1cm、残存高は7.1cmを測る。住居跡内第1号ピット内から出土した。13は褐色の胎土で、直径1mm程度の黒色の粒子を含む。残存部分の最大径は7.2cm、残存高は8.8cmを測る。覆土中から出土した。14は褐色の胎土で、白色の粒子を含む。表面は風化している。脚部の最大径は7.3cm、残存高は約10cmを測る。北側壁沿いで出土した。15は褐色の胎土で、表面は赤彩される。胎土中には直径1mm程度の白色粒子を

第5表 第1号溝内ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	
1	34	30	67	
2	42	30	54	
3	33	32	65	
4	25	23	50	

単位:cm

第2節 溝跡

第1号溝(第30図・第5表)

含む。残存高は8.7cm、底部直径は12.7cm、底部の残存率は46%である。北側壁沿いで出土した。

調査区西側で確認された、南北方向に延びる溝跡である。第 1号住居跡の覆土を切っている。断面は浅い逆台形で、残存部 分の上幅は約2.5m、底幅は約1~2m、確認面から底面までの

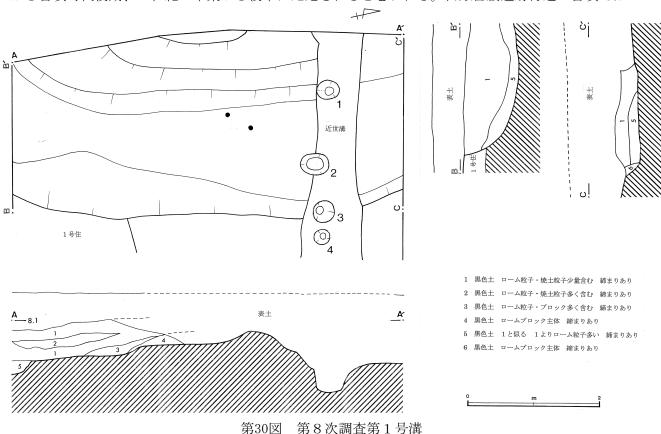
白鍬宮腰遺跡

深さは約0.7mである。側面の傾斜は東側できつく、西側で緩い。調査区内は北側ほど現地表面からの 攪乱が激しく、第1号溝と直交する溝状の攪乱となって溝の底面まで及んでいる。なお、この攪乱部 分に沿ってピット列が確認された。時期・性格は不明であるが第5表に示す。深さは溝上面(遺構確 認面)からの値を示す。

第1号溝の平面形状は、西側を中心とする円弧状と思われ、覆土中から埴輪が出土したことから、 古墳の周溝であるとみられる。なお、本調査の後、平成24年度に、本調査西側の道路の向かいで実施 された第13次調査においても同規模の円弧状の溝が確認されており、これが同一の古墳の周溝である とした場合、周溝外周の直径は約20mと復元される。

第1号溝出土遺物 (第29図)

16は土師器の壺型土器または坩型土器の胴部である。胎土は明褐色を呈し、外面は黒く変色している。残存高は5.0cm、胴部の最大径は約10cmである。溝の覆土中から出土した。17は須恵器の甕型土器の底部である。半還元焼成状態で、胎土は暗褐色を呈し、直径1~2mm程度の白色の粒子、石片を多く含む。残存高は1.5cm、底径は8.4cm、底部の残存率は54%である。溝の覆土中から出土した。18は円筒埴輪の口縁部から胴部にかけての破片である。溝の覆土の下層、第30図に黒丸で示した箇所及び第3号ピット内から出土した破片が接合した。胎土は橙褐色を呈し、直径1.5mm程度の白色及び黒色の粒子を含む。内面全体と表面の一部は茶褐色に変色し、風化して細かくひび割れている。口縁部は水平近くまで外反し、口唇部は内側に反る。胴部は下に向けてややすぼまる形態で、外面には縦方向のハケメが施される。凸帯は低い。内面には斜め方向のハケ状工具による整形痕が残る。形状の特徴から古墳時代後期、6世紀の中葉から後半に比定されると思われる。白鍬宮腰遺跡付近の古墳ではこ



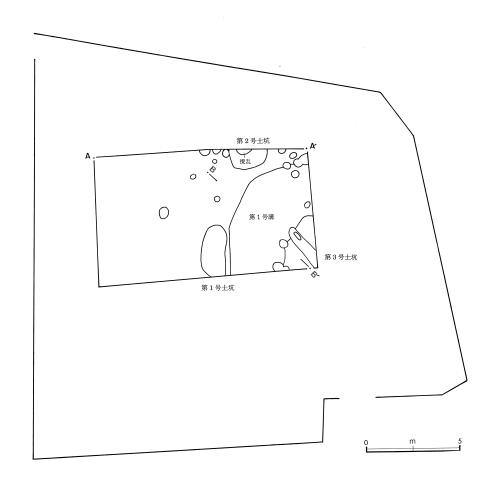
れまでにも多くの埴輪破片が出土しているが、円筒埴輪の口縁部は特に内外とも反らず直線状の形状であることが多く、このように大きく外反するものは初の出土である。

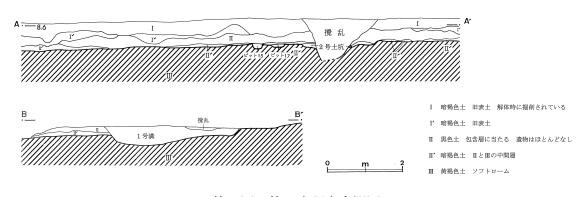
第Ⅳ章 第10次調査の遺構と遺物

第1節 溝跡

第1号溝(第32図)

調査区南東側で確認された円弧状の溝である。円周の北西側約4分の1が調査区内に位置しており、





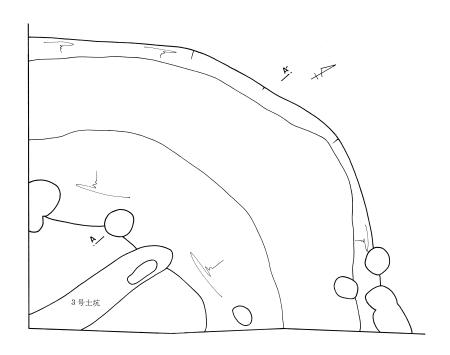
第31図 第10次調査全測図

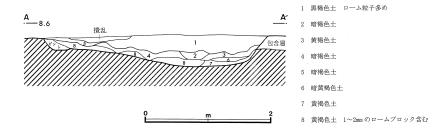
白鍬宮腰遺跡

南側・東側は調査区外へと続いている。上幅は約2.8~3.0m、底幅は1.2~1.6m、残存部分の深さは約50cmを測る。断面形状は逆台形であるが、底面の位置は円の外側に寄っており、側面は円弧の内側でなだらかに落ち、外側は約45°の傾斜を持つ。平面形状は、全体が正円形に近い形状であると仮定した場合、溝の外縁・内縁の直径はそれぞれ約12.0m、約4.8mである。覆土は、下半部が黄褐色土、暗黄褐色土、暗褐色土で徐々に埋没したのち、上半部が黒褐色土で埋め戻された様相が伺える。遺物は上層で多く、土器破片のほか鉄滓と思われるガラス質の物質の破片も出土した。下層では密度は少なかったが、古墳時代中期の壺型土器の胴部破片が一括出土した。また、縄文時代と思われる土坑・ピットを切っている箇所があり、覆土中からも縄文土器の破片の出土がみられた。出土遺物から古墳時代中期かそれ以前の遺構であると思われる。

第1号溝出土遺物(第33図)

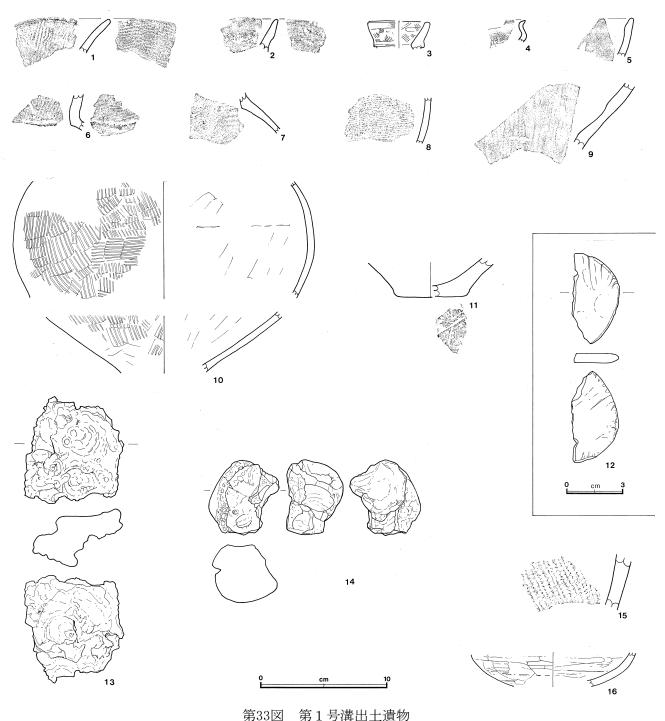
第1号溝跡の覆土からは、主に古墳時代前期~中期の遺物が出土した。第34図1~5は口縁部の破片である。1~3は壺型土器と思われる。1は褐色の胎土で、内面に帯状の黒変がみられる。口縁はゆるく外反する。外面には縦方向、内面には横方向のハケ状工具調整痕が残る。覆土上層の精査で出土した。2は褐色の胎土で、口縁はやや内湾する。外面には縦方向、内面には横方向のハケ状工具調整痕が残る。覆土上層で出土した。3は褐色の胎土で、口縁はやや内湾する。外面には縦方向、内面





第32図 第10次調査第1号溝

には横方向のハケ状工具調整痕が残る。口径は5.0cm、残存高は2.0cmを測る。口縁部分での残存率は10%である。覆土上層から出土した。4・5は坏型または境型の土器と思われる。4は褐色の胎土で、直径5mmほどの白色の石片を含んでいる。口縁はS字状で、器面は内外面ともよく磨かれ、赤彩されている。覆土上層から出土した。5は明褐色の胎土で、器面は内外面ともよく磨かれ、赤彩されている。覆土上層から出土した。6~8は壺型土器の頸部から胴部にかけての破片である。6は頸部の破片で、胎土は褐色、外面には縦方向、内面には横方向のハケ状工具調整痕が残る。覆土上層から出土した。7は頸部直下の破片で、胎土は明褐色を呈し、黒色の粒子を含む。外面に斜め方向のハケ状工具調整痕、内面に横方向のヘラナデ調整痕が残る。覆土上層から出土した。8は胴部中央付近の

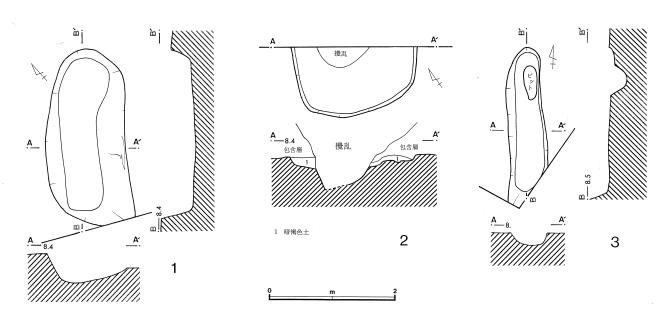


第33四 第1万件四上退彻

白鍬宮腰遺跡

破片である。胎土は褐色を呈し、外面に帯状の黒変部分がみられる。外面に横方向のハケ状工具調整 痕、内面に横方向のヘラナデ調整痕が残る。覆土上層から出土した。9は高坏型土器の器部の破片と 思われる。胎土は褐色を呈し、白色及び黒色の粒子を含む。外面には縦方向のヘラナデ調整痕が残 る。覆土上層から出土した。10は覆土下層から一括出土した甕型土器の胴部である。胎土は暗褐色を 呈し、直径1~2mmの褐色の石片を含んでいる。外面に縦横の櫛状工具調整痕、内面に斜め方向のへ ラナデ調整痕が残る。胴部の最大径は約24cmを測る。11は壺型土器の底部の破片である。胎土は褐色 を呈する。底部直径は5.8cmを測る。底面には成型時の葉脈痕が残る。覆土上層から出土した。12は円 盤状の土製品である。胎土は褐色を呈し、白色の粒子を少量含んでいる。割れ口の端から約1cmの箇 所に穿孔があったとみられ、錘などの用途が想定されるが性格は不明である。覆土下層から出土し た。13は気泡を含むガラス質の物質の破片である。鉄滓と思われる。ガラス質部分は黒褐色、表面は 暗褐色を呈し、部分的に酸化鉄と思われる橙褐色の物質が付着している。覆土上層から出土した。14 は被熱により気泡が生じ、一部がガラス質化した土製品の破片である。元の形状は円筒形と思われ、 ガラス質化がみられるのは外面となる側である。胎土は褐色、ガラス質化した部分は暗褐色を呈し、 内面は白褐色、外面は茶色に変化している。覆土上層から出土した。13は金属の熱加工の際に生じた 鉄滓、14はふいごの羽口ではないかと思われる。近隣では、南方に位置する宮田遺跡の第1次調査に おいて、溝及び竪穴状遺構の覆土中から鉄滓が多く出土している。15は縄文土器の破片である。胎土 は暗茶褐色で、繊維質を含む。器面は明褐色を呈する。縄文時代前期、関山式または黒浜式の深鉢型 土器の胴部の破片と思われる。覆土上層から出土した。16は坏型土器の底部の破片である。胎土は褐 色で直径0.5~1mm程度の白色粒子を含む。内面はヘラナデ成型で赤彩されている。外面は横方向のへ ラ削り整形である。残存部の最大径は約13cm、残存高は2.6cmを測る。古墳時代後期のものと思われ る。覆土上層から出土した。

第2節 その他の遺構と遺物



第34図 第1号~第3号土坑

土坑 (第34図)

3基の土坑が検出された。

第1号土坑は調査区の中央南側、第1号溝の西側で検出された。南北に長く、南端の一部は調査区外へと続いている。検出部分での長径は約2.8m、短径は1.2m、確認面から底面までの深さは約50cmを測る。遺物は土器の細片のほか、縄文時代の土器の破片が出土した。遺物については後述する。

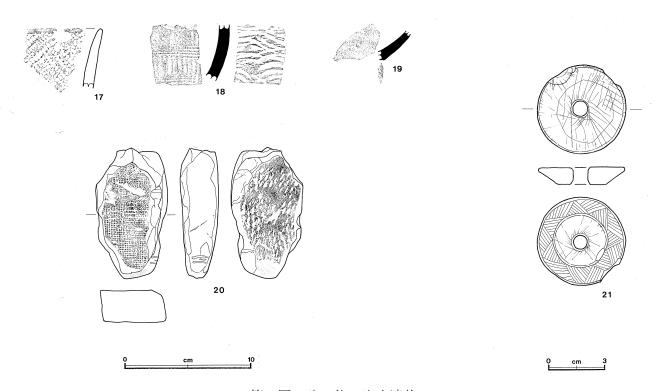
第2号土坑は調査区北側壁沿いで検出された。確認部分での平面形状は半円形で、直径は約2m、確認面から底面までの深さは約50cmを測る。北側が調査区外へと続くため、全体の形状は確認できなかった。遺構中央付近に、確認面上からの掘削による攪乱がみられ、この部分は土坑底面以下まで攪乱が及んでいるが、他の部分は遺構覆土が残存していた。遺物は土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

第3号土坑は調査区の南東端、円弧上の溝の内側で確認された。溝の覆土を切って掘られており、 溝より新しい時期の遺構である。南端が調査区外に続くため全体の形状や規模は不明であるが、確認 された部分では南北に長い溝状の平面形状で、確認範囲の総延長は約2.5m、最大幅は約60cm、確認面 から底面までの深さは約30cmを測る。遺物は土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

土坑出土遺物 (第35図)

第35図17は、第1号土坑覆土中から出土した、深鉢型土器の口縁部の破片である。口縁は平坦で、 外面には口縁直下から縄文が施文される。胎土は褐色で繊維質を含み、外面は明褐色を呈する。縄文 時代前期、黒浜式期のものと思われる。

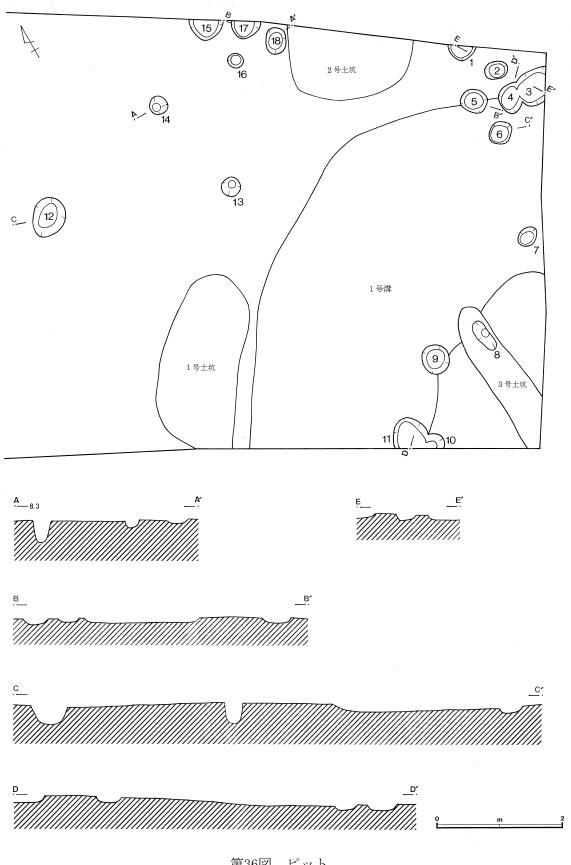
ピット (第36図・第6表)



第35図 その他の出土遺物

白鍬宮腰遺跡

ピットは18基を確認した。寸法は第6表のとおりである。調査区北東端、第1号溝の外縁付近にま とまって確認されたが、いずれも遺物は出土せず、時期・用途の特定には至らなかった。No.8、No.9



第36図 ピット

の2基は覆土の状況から近世の遺構である可能性がある。

第6表 第10次調査ピット計測表

番号	長径	短径	深さ
1	30	16	3.5
2	24	20	6
3	残 40	35	8.6
4	30	26	9.4
5	28	26	7
6	28	23	12
7	残 24	18	19
8	残 36	14	46
9	35	30	19.6
10	24	22	13
11	40	40	17
12	64	52	30
13	20	18	33. 5
14	30	28	35
15	55	残 33	11
16	16	15	12
17	30	残 20	10
18	28	20	6

「残」は残存部分の寸法を示す

単位:cm

その他の遺物 (第35図)

第35図18~21は遺構外で出土した遺物である。18は須恵器の甕の 胴部の破片である。胎土は灰褐色で白色粒子を少量含んでおり、外 面は明青灰色を呈する。内面には青海波状の叩き板の跡が残る。外 面は縦方向の調整ののち、横方向に櫛歯状のヘラ調整痕がみられる 。精査の際に出土した。19は須恵器の坏型土器の底部から立ち上が り部分にかけての破片である。胎土は暗灰褐色を呈し、白色粒子を 少量含んでいる。ロクロ整形、底部外縁は回転糸切り後未調整であ る。平安時代の遺物である。精査の際に出土した。20は布目瓦(平 瓦)の破片である。胎土は灰色で、直径0.3~1mm程度の白色粒子 を多く含んでいる。凹面には布目跡、凸面には叩き板の跡が残る。 凸面及び破片の一端は摩耗しており、砥石等に転用されていた可能 性が考えられる。奈良~平安時代初期の遺物である。第1号溝と重 複する攪乱部分の覆土中から出土した。21は滑石製の紡錘車である 。断面は台形で、上部直径は約7.0cm、底部直径は約4.0cm、厚さは 約1.4cm、中央の軸穴の直径は約1.0cmを測る。側面には平行する沈 線で充填された鋸歯状の文様が施されている。発掘調査に先立つ確 認調査の際に出土した。時期は不明であるが、石製の紡錘車は古墳 時代後期から平安時代にかけての出土例が多いことから、この時期 の遺物であると推定される。

第V章 まとめ

第8次調査、第10次調査のそれぞれで、古墳の周溝と考えられる溝跡が確認された。双方とも、築造の時期は古墳時代後期と考えられる。これまで白鍬宮腰遺跡において確認されている古墳との時期差はなく、古墳群の形成時期をさらに裏付ける成果となった。

また、第8次調査では古墳時代前期の住居跡が確認された。白鍬宮腰遺跡では、古墳群の築造に先立って、古墳時代前期に集落が所在していたことが第4次調査で確認されており、今回の調査で古墳周溝に住居跡が切られていることが確認されたことは、これを裏付け、また集落跡が広い範囲に及んでいたことを示すものである。なお、古墳時代前期の住居跡はこの後の第11次調査・第16次調査でも確認され、集落の広がりが明らかになりつつある。

出土遺物のうち、第8次調査第1号溝の下層から出土した埴輪の破片は、1点のみの出土であり、 必ずしも本古墳に伴うものであるとは言えないが、形状が類例を持たないものであることが特筆され る。この埴輪破片は、円筒埴輪の上端部と考えられるが、口縁部は朝顔形埴輪のように外反して水平 近くまで開き、口唇部は折り返される形態を持つ。これまで白鍬宮腰遺跡で出土した円筒埴輪の上端

白鍬宮腰遺跡

は、湾曲せず直線状に切られるもののほか、45°程度まで外反するものはみられるが、水平近くまで開くものはみられない。市内の他の遺跡でも類例の出土はなく、産地や系譜が注目される。

第10次調査では、遺構覆土から縄文時代前期の土器破片が出土している。白鍬宮腰遺跡の地形は、 北半分が台地残丘、南半分が自然堤防と、成り立ちの異なるものであり、縄文時代の遺跡は北半分の 残丘部分で確認されていた。第10次調査地点は両者の境界付近にあたり、縄文時代の遺跡の分布範囲 の南限を示すものと言える。

また、第10次調査第1号溝の覆土からは鉄滓及び被熱した土製品が出土した。第10次調査地点の南 方約700mに位置する宮田遺跡の第1次調査地点において、前述のとおり竪穴状遺構から鉄滓が18リッ トル入り平ケース半箱分ほど出土し、小鍛冶等の存在が示唆されている。今回の出土も、近隣で鍛冶 等の作業が行われていたことを示すものであろう。

第3部

大在家遺跡(第2・3次調査) 第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

ここに報告する2件の発掘調査は、平成22年6月から同年7月にかけて実施したものである。2ヶ所の調査地点は隣接しており、検出した遺構・遺物も関連するものとみられる。記録保存に要した原因は個別のものであったが、こうした事情から、ここでは2ヶ所の調査を一括して報告する。

(第2次調查)

平成22年5月、大在家遺跡の範囲内のさいたま市緑区太田窪1丁目における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当地は同年3月に実施した範囲確認調査によって、古墳時代の住居跡や遺物包含層、縄文土器などの遺構・遺物が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

(第3次調査)

平成22年5月、大在家遺跡の範囲内のさいたま市緑区太田窪1丁目における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受け、平成22年6月18日に確認調査を行ったところ、縄文時代の土坑や縄文土器などの遺構・遺物を発見した。現状での保存について協議を行ったが、当工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日は、例言5 (p.(1)) のとおりである。

第2節 調査の方法と経過

(第2次調査)

発掘調査は、平成22年6月18日から同年7月22日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。6月17日に調査機材を現地に搬入し、18日に重機を使用して表土除去作業を行った。その後、人力で遺構の範囲の確認を行った。調査区の南側では遺物包含層が確認されたため、その上面を確認面として遺構の検出作業を行った。22日には古墳時代前期とみられる竪穴住居跡が発見されたことから、東西・南北方向に土層観察用のベルトを設定して覆土の掘削を行った。24日には、住居跡の床面付近から比較的まとまった土器の破片や炭化材が確認された。この竪穴住居跡

の調査と併行して、住居跡を壊して構築されたとみられる溝跡の調査も行った。住居跡の北東部からは 近世の陶磁器類が検出されたことから、土坑により一部が壊されていることも判明した。25日には、住 居跡床面付近の南東部より楕円形の小石が30個ほど集積した箇所が認められ、その下位には貯蔵穴とみ られる掘り込みも確認された。7月2日、住居跡覆土の掘削と同時に調査区南側の遺物包含層を掘り下 げた。6日には遺物包含層下より多数の土坑やピットが検出された。6日~14日にかけては、住居跡の 記録作業と土坑の掘削、写真撮影を実施した。6日には、第2次調査区の掘削・記録作業と並行し、同 日より第3次調査区の発掘も開始した。遺構の平面図は平板測量によって行い、7月21日に完了した。 調査完了後、7月22日に重機を用いて埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終 了した。

(第3次調査)

発掘調査は、平成22年7月6日から同年7月15日にかけて行った。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。6日に、第2次調査区の調査と併行して調査区を設定し、重機を使用して表土除去作業を行った。その後、人力で遺構の範囲の確認を実施した。後世の掘削によるカクランが著しく、遺物包含層がわずかに確認された。7日~14日にかけて、遺構の検出作業と確認された土坑の掘削や記録作業を実施した。15日午前まで調査区全体の土層断面図を作成し、完了後、重機で調査区の埋め戻し作業を行い、機材を撤収、現地における発掘調査の作業を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

大在家遺跡は、さいたま市の南東部、緑区太田窪1丁目に所在する。谷田川(藤右衛門川)の谷を見下ろす舌状台地上に立地する。谷田川の谷は、荒川の谷から北へ入り込む溺れ谷(沖積低地)であり、大宮台地浦和支台ではもっとも大きい。台地の標高は中心部辺りで14.9mほどの高さであり、谷下は、6.4mである。

谷田川周辺は早くから宅地化されているが、当地域でも多数の遺跡が周知されており、近年も発掘調査が行われている。縄文時代中期後半の竪穴住居跡が複数確認されている諏訪入遺跡(浦和市遺跡調査会1987・1988)や縄文時代後期前半の竪穴住居跡や土坑が発見されている大谷場下町遺跡(浦和市遺跡調査会1988)、縄文時代中期後半の竪穴住居跡や平安時代の竪穴住居跡のほか、縄文時代早期の茅山下層式や前期末葉の十三菩提式土器なども出土している原山東原遺跡(浦和市遺跡調査会1990・1997)、弥生時代後期の環濠や竪穴住居跡が確認された本太五丁目遺跡(浦和市遺跡調査会1990)、中世の城館跡として知られる太田窪堀の内館跡など、各時期の遺構・遺物が発見されており、当地域において長期にわたり人々の生活が営まれていたことがわかる。なお、大在家(おおざいけ)という名称は旧字名であり、元和9年(1623)の大田窪村検地帳に「大在家まへ」という地名が見られることから、近世以前より既に用いられていたと考えられる(浦和市遺跡調査会1995)。

本遺跡の最初の調査は平成5年に行われており(浦和市遺跡調査会1995)、今回は第2次及び第3次 調査となる。



- 1. 大在家遺跡、2. 大在家東遺跡、3. 原山西原遺跡、4. 諏訪入遺跡、5. 坊ノ在家北遺跡、6. 原山遺跡、
- 7. 原山東原遺跡、8. 駒場後耕地遺跡、9. 駒場前耕地遺跡、10. 本太五丁目遺跡、11. 本太堀の内遺跡、
- 12. 本太四丁目遺跡、13. 本太三丁目遺跡、14. 太田窪本村遺跡、15. 太田窪四丁目遺跡、16. 太田窪本村東遺跡、
- 17. 太田窪堀之内館跡、18. 善前北遺跡、19. 大谷場下町遺跡、20. 大谷場上町遺跡

第37図 遺跡の位置

【参考文献】

・浦和市遺跡調査会 1987『諏訪入遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第85集

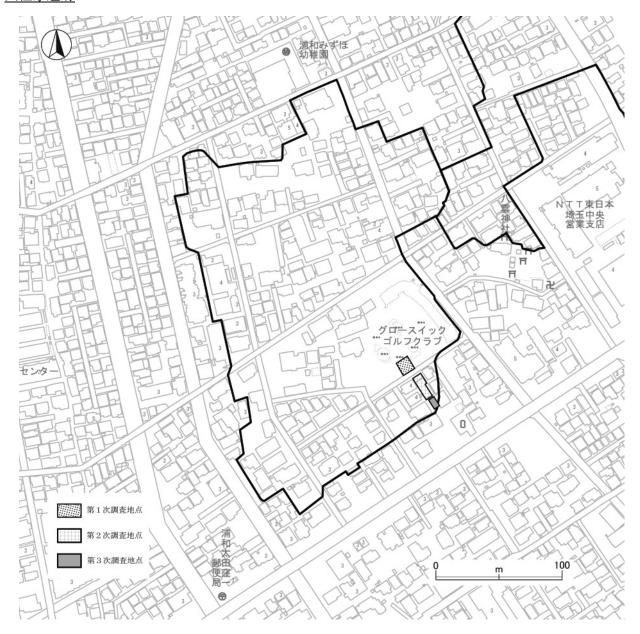
·浦和市遺跡調査会 1988『大谷場下町遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第101集

·浦和市遺跡調査会 1988『諏訪入遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第102集

・浦和市遺跡調査会 1990『本太三丁目・本太四丁目(第2次)・本太五丁目・原山東原(第2次) 原山北原遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第129集

•浦和市遺跡調査会 1995『大在家遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第196集

•浦和市遺跡調査会 1997『原山東原遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第233集



第38図 発掘調査の位置

第2節 調査区の概要

第2次調査と第3次調査の調査区は隣接しており、第2次調査区が北側、第3次調査区が南側に当たる(第38図・第39図)。平成5年に実施された第1次調査区は、第2次調査区の北側に位置している。 (第2次調査)

第2次調査の調査範囲は住宅建設工事等により十分な保護層が確保できない範囲の127㎡を対象とし、 ローム層上面及び遺物包含層を遺構確認面とした。

遺構は、中世に位置づけられるとみられる溝跡1基、古墳時代前期の竪穴住居跡1基のほか、縄文時代以降の土坑・ピット77基を検出した。

遺物は、古墳時代の竪穴住居跡より出土した土師器のほか、縄文時代中期から後期の土器や石器など、

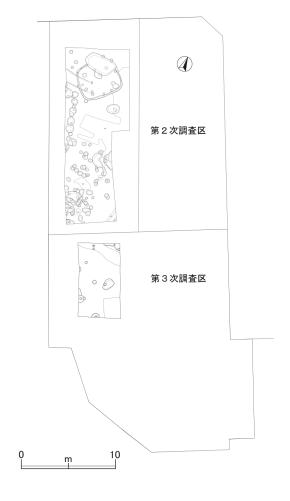
18リットル入り遺物収納容器 3 箱分が出土した。 (第 3 次調査)

第3次調査の調査範囲は住宅建設工事等により十分な保護層が確保できない範囲の41㎡を対象とし、遺構は、縄文時代中期の可能性がある土坑・ピット12基を検出した。遺物は、縄文時代中期の土器や弥生時代後期の土器、近世の泥面子など18リットル入り遺物収納容器1箱分が出土した。

第Ⅲ章 第2次調査の遺構と遺物

第1節 第2次調査区の概要

調査区の東側は後世の掘削によって土層が失われているが、南側には遺物包含層も確認され、遺存状況は全体に良好であった(第40図)。表土下の土層を精査すると、縄文土器片などが出土する遺物包含層(第40図調査区西壁土層13層、北壁土層6層)が検出され、その上面より土坑やピットが確認された。遺物包含層を掘り下げたローム層上面でも土坑やピットが確認されたことから、遺物包含層上面を1面、遺物包含層より下位のローム層上面を2面とし、各確認面で検出された遺構を



第39図 調査区の位置

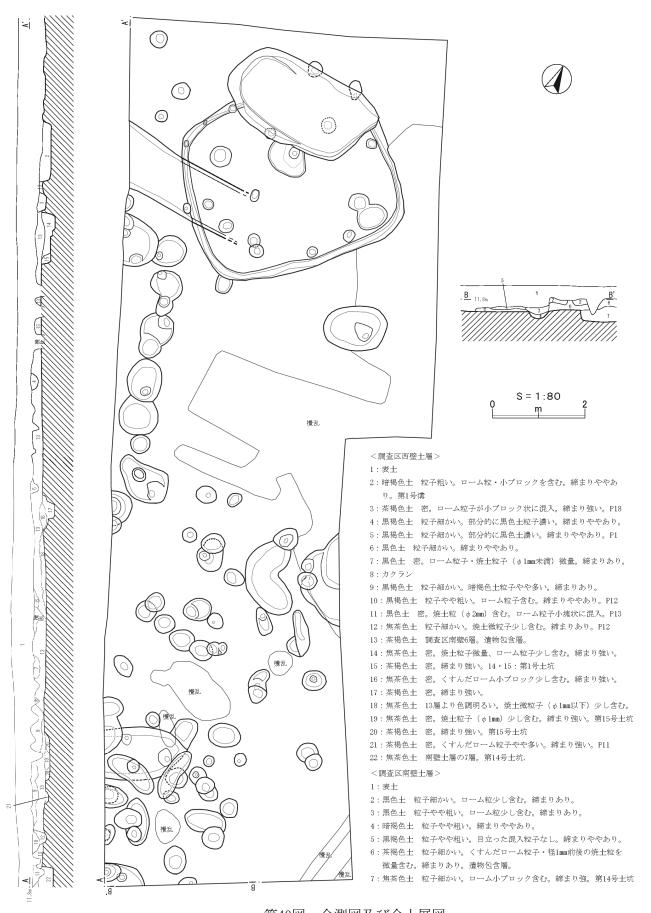
「1面検出遺構」、「2面検出遺構」として各遺構の全体図を示した(第41図)。第2次調査で検出された遺構の詳細は遺構一覧表でも示している(第7表)。

出土した遺物から、1 面で検出された遺構は縄文時代以降、2 面で検出された遺構は縄文時代を中心とした時期のものと推測されるが、遺物が出土していない遺構も多く、詳細な時期が不明な遺構は便宜的に、1、2 面ともに「縄文時代以降」とした(第7 表)。

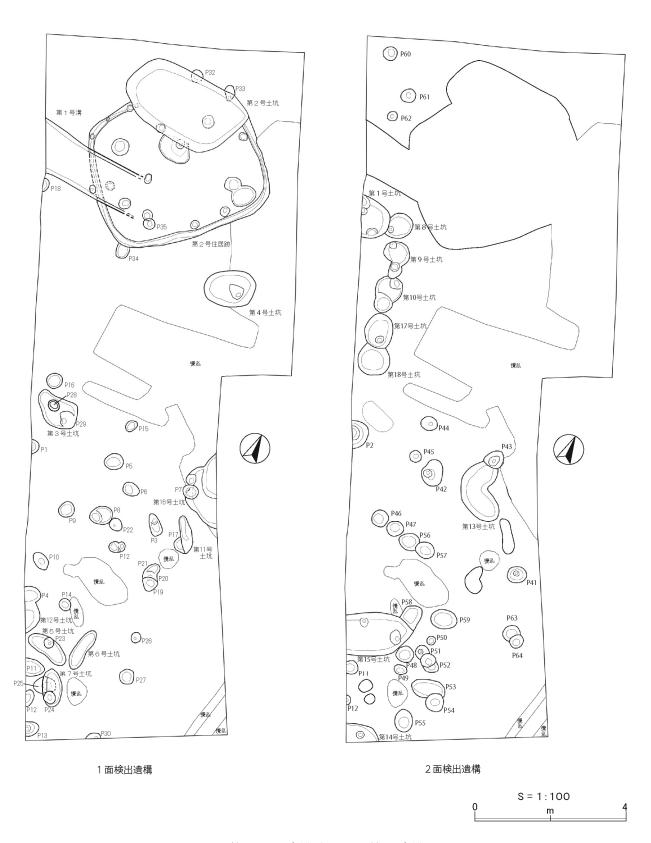
1面で検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡1基のほか、江戸時代の墓とみられる第2号土坑、中世の構跡とみられる第1号溝のほか、縄文時代以降の土坑及びピット等、合わせて40基を検出した。第1号溝は、調査区外である西側へ延び、東西方向に構築されたとみられるが、竪穴住居跡が確認された箇所で途切れている。

2面では、土坑やピットを中心として37基の遺構が検出された。調査区北側の土坑群は列をなしてL 字状に構築されていることから、住居等に準ずる遺構の可能性もある。

遺物は、古墳時代の竪穴住居跡の床面よりまとまりのある土師器が複数出土したほか、第2号土坑からは江戸時代の陶磁器類や古銭が出土している。このほか、縄文時代中期から後期の土器や石器など、18リットル入り遺物収納容器3箱分が出土した。



第40図 全測図及び全土層図



第41図 遺構確認面と検出遺構

第7表 遺構一覧表

遺構名	検出面	平面形	軸方向	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	時期	出土遺物
32号住居跡	1面	隅円方形	N-47° -W	(東西)444	(南北)396	30	古墳前期	土師器、炭化材等
第1号溝	1面	_	N-86° -W	203	138	23	中世	かわらけ
第1号土坑	2面	不明	N-8° -W	-	103	23	縄文中期後半	縄文土器
第2号土坑	1面	不整長方形	N-85° -W	308	170	44	江戸時代後期	陶磁器、煙管等
第3号土坑	1面	不整形	N-68° -W	125	87	17	縄文時代以降	縄文土器
第4号土坑	1面	楕円形	N-77° -E	130	99	102	中世	はさみ皿
第5号土坑	1面	楕円形	N-77° -W	117	46	29	古墳前期	土師器
第6号土坑	1面	楕円形	N-6°-E	117	39	7	縄文時代以降	縄文土器
第7号土坑	1面	楕円形	N-30° -W	101	49	7	縄文時代以降	_
第8号土坑	2面	楕円形	N-37° -E	79	67	15	縄文時代以降	=
第9号土坑	2面	楕円形	N-35° -E	69	60	14	縄文時代以降	_
第10号土坑	2面	不整円形	N-54° -E	75	73	7	縄文時代以降	_
第11号土坑	1面	楕円形	N-16° -W	101	30	13	縄文時代以降	_
第12号土坑	1面	不明	-	115	-	12	縄文時代以降	_
第13号土坑	2面	L字形	N-63° -W	143	75	16	縄文時代以降	_
813号工列 第14号土坑	2面	不明	-	-	-	27	縄文時代以降	縄文土器
81772エルー 第15号土坑	2面	不整長方形	N-62° E	_	110	17	縄文時代以降	縄文土器
第16号土坑 第16号土坑	1面	不服	N 02 L	204	110	15	古墳時代?	土器
			N 14° W		74			工
第17号土坑 ***0日土坑	2面	精円形 不禁用形	N-14° -W	90	74	23	縄文時代以降	
第18号土坑	2面	不整円形	N-77° -E	85	80	19	縄文時代以降	_
P1	1面	円形	-	_	-	17	縄文時代以降	
P2	2面	円形	-	-	-	8	縄文時代以降	加曽利E3式
P3	1面	円形	-	-	-	15	縄文時代以降	加曽利E3式
P4	1面	円形	-	-	-	10	縄文時代以降	加曽利E3式
P5	1面	円形	-	-	-	15	縄文時代以降	時期不明土器
P6	1面	円形	-	-	-	10	縄文時代以降	
P7	1面	円形	-	-	-	13	縄文時代以降	
P8	1面	楕円形	_			20	縄文時代以降	
P9	1面	円形	-	-	-	8	縄文時代以降	-
P10	1面	円形	-	-	-	-	縄文時代以降	_
P11	2面	円形	-	-	-	4	縄文時代以降	_
P12	2面	円形	_	_	_	5	縄文時代以降	_
P13	1面	円形	_	_	-	20	縄文時代以降	_
P14	1面	円形	-	_	-	17	縄文時代以降	_
P15	1面	円形	_		_	13	縄文時代以降	
			_		_			
P16	1面	円形	_	_		6	縄文時代以降	
P17	1面	円形	-	-	-	6	縄文時代以降	_
P18	1面	円形	-	-	-	11	縄文時代以降	
P19	1面	円形	-	-	-	21	縄文時代以降	加曽利E3式
P20	1面	円形	-	-	-	26	縄文時代以降	
P21	1面	円形	-	-	-	13	縄文時代以降	縄文土器
P22	1面	円形	-	-	-	30	縄文時代以降	加曽利E3式、弥生土
P23	1面	円形	-	-	-	27	縄文時代以降	_
P24	1面	円形	-	-	-	27	縄文時代以降	縄文土器
P25	1面	円形	-	-	-	25	縄文時代以降	_
P26	1面	円形	-	-	-	17	縄文時代以降	_
P27	1面	円形	-	_	-	12	縄文時代以降	_
P28	1面	円形	-	-	-	21	縄文時代以降	_
P29	1面	円形	-	-	-	30	縄文時代以降	_
P30	1面	円形	_	_	_	25	縄文時代以降	_
P31	ТЩ	1 1/12			欠番	20	神と人内(八人)	
P32	1面	円形	_			57	縄文時代以降	
			_	_	_		Am I at the care	
P33	1面	円形	_			35	縄文時代以降	
P34	1面	円形	_	-	-	14	縄文時代以降	
P35	2号住P6に変更	円形	-	-	-	-	縄文時代以降	_
P36	2号住P3に変更	円形	-	-	-	_	縄文時代以降	_
P37	2号住P1に変更	円形	-	-	-	-	縄文時代以降	_
P38	2号住P4に変更	円形	-	-	-	-	縄文時代以降	_
P39	2号住P2に変更	円形	-	-	-	_	縄文時代以降	
P40	2号住P5に変更	円形	-	-	-	-	縄文時代以降	_
P41	2面	円形	-	-	-	20	縄文時代以降	
P42	2面	円形	-	-	-	59	縄文時代以降	_
P43	2面	円形	=	-	=	32	縄文時代以降	_
P44	2面	円形				24	縄文時代以降	
P45	2面	円形	-	_	-	15	縄文時代以降	_
P46	2面	円形	-	-	-	11	縄文時代以降	_
P47	2面	円形	-	-	-	18	縄文時代以降	_
P48	2面	円形	_	_	_	9	縄文時代以降	_
P49	2面	円形	-	_	-	12	縄文時代以降	
P49 P50	2面	円形	_		_	10		
			_	_	_		縄文時代以降	畑 十 上 叩
P51	2面	円形	-	_		33	縄文時代以降	縄文土器
P52	2面	円形			-	27	縄文時代以降	
P53	2面	楕円形	-	-	-	11	縄文時代以降	_
P54	2面	円形	-	-	-	21	縄文時代以降	
P55	2面	円形	-	-	-	35	縄文時代以降	縄文土器
P56	2面	円形	-		-	12	縄文時代以降	縄文土器
P57	2面	円形	-	_	-	20	縄文時代以降	縄文土器
P58	2面	楕円形	-	-	-	16	縄文時代以降	縄文土器
P59	2面	楕円形	-	-	-	15	縄文時代以降	縄文土器
P60	2面	円形	_	_	_	54	縄文時代以降	
	2面	円形	_	_	_	25	縄文時代以降	
					l .	20	でもつきこうを	
P61			_	_	_	21	縄文時件い咚	_
	2面 2面	円形	-	-	-	21 16	縄文時代以降 縄文時代以降	

※ピットは深さのみ記載

第2節 住居跡

1 第2号住居跡

(第42図・第43図)

調査区の北側に位置する。第 1 次調査で住居跡が 1 軒検出されているため (浦和市遺跡調査会1995) 、調査時より第 2 号住居跡と呼称した。住居の形態は隅丸方形で、一片の長さは南北が約3.9 m、東西が約4.4 mである。奥壁とみられる北側はやや狭くなっている。主軸の向きは、N47°W、確認面から床面までの深さは約30 cmである。主柱穴は、床面から50 cm前後かそれ以上の深さをもつ $P1 \sim P4$ 、P6の4本と考えられるが、40 cm以上の深さをもつ P5、P7、P8も柱と関連している可能性がある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際には幅20 cm前後、深さ10 cm程の周溝が巡る。床面は土間状によく踏みしめられて硬化していた。

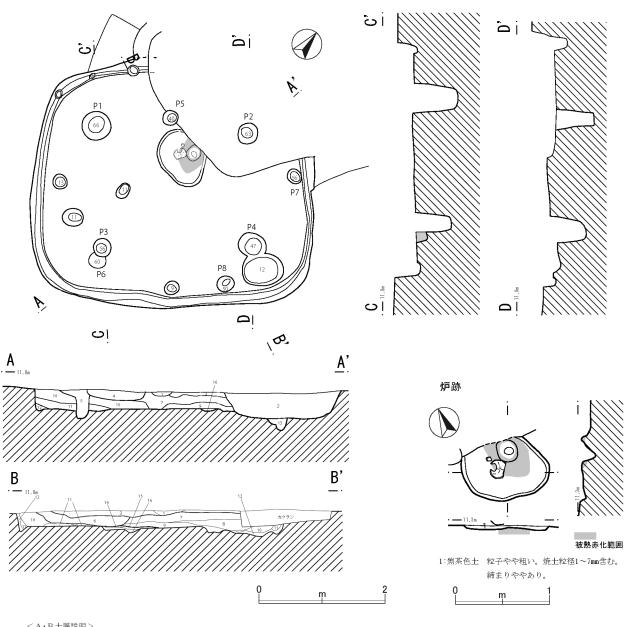
炉跡は、住居中央北寄りに確認された。不整な円形で長径は約1.4m、短径は約1mである。北東側はピット状に掘りくぼめられ、これを中心に赤化した被熱部分が広がる。炉上面からは鉢形土器が比較的にまとまって出土した。

堆積土の一部は第1号溝や第2号土坑によって掘り込まれているが、床面に近い範囲は比較的に良く遺されていた。堆積土には上層から焼土粒がよく認められ、下層を掘り進めていくにつれて炭化材が検出されたため、これを残して図化を行った(第43図)。床面直上には住居の構成材とみられる炭化材が多数検出され、これとともに比較的にまとまりのある土器も3点確認された(第43図)。また南東壁際からは、楕円形の小石が集積して検出された(第43図)。この脇からは、P4に接して長径66cm、短径50cm、深さ12cmの浅い土坑が認められ、その位置から貯蔵穴の可能性も考えられる。

床面直上より検出された炭化材の出土状況等から、当住居跡は焼失した後、廃絶されたとみられる。 時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領 I 式)に比定される。

2 第2号住居跡出土遺物 (第44図)

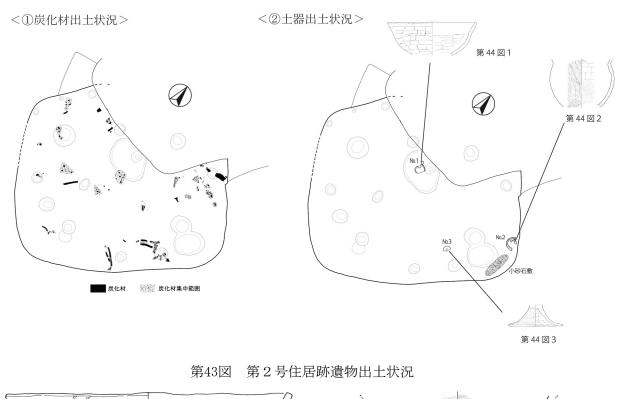
1~3は、住居跡の床面直上より比較的にまとまりのある状態で発見された(第43図)。1は、炉跡の直上より検出された鉢形土器である。口径は23.4cm、残存高は9.7cmである。器厚は約1cmである。底部を欠失しているが、内湾気味に立ち上がり口辺部が開く器形であり、甑の可能性がある。口唇部は角頭状であり、器面調整は外面が横方向のヘラケズリ、内面口辺部はヨコナデ、内面胴部はヘラナデである。色調は茶褐色で黒ずんでいる箇所がある。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻である。残存率は50%。2は、住居跡の南東壁際で検出された台付甕の胴部である。口縁部は欠失している。器形は、最大径が胴部上半にあり、頸部がゆるやかに外反する。残存高は13cm、最大径は17.1cmである。器面は、外面全体に細かなハケメ調整がなされ、内面上半にはヘラナデ、下半にはミガキ調整が施されている。色調は茶褐色で一部に黒斑が認められる。胎土は砂粒を含んでいる。残存率は30%である。3は、住居跡の南よりに検出された高坏の脚部である。脚部下端を一部欠失しているが全周している。裾が広がる器形であり、裾部分の直径は14.1cm、頸部分は3.6cmと細い。残存高は5.4cmである。外面は一部剥落しているが、縦方向の細かいミガキ調整で平滑になり、光沢も認められる。内面はヘラナデ調整、下端部はミガキ調整が粗く施されている。色調は茶褐色で、外面には赤彩が施されている。胎土は砂粒を少量含んで

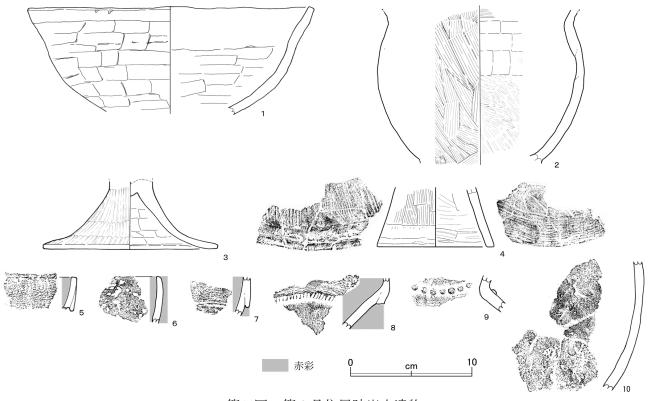


<A・B 土層説明>

- 1:カクラン
- 2:第2号土坑
- 3:黒色土。締まりあり。
- 4:暗褐色土 粒子やや細かい。ローム粒少し含む。締まりややあり。
- 5:暗褐色土 やや粗い。締まりややあり。ピット。
- 6:暗褐色土 やや粗い。締まりややあり。
- 7: 茶褐色土 密。焼土粒を含む (径1mm)。締まりあり。
- 9: 茶褐色土 密。焼土粒(径1.5 mm)、炭化材粒(径5 mm)含む。締まり強い。
- 10: 茶褐色土 密。7層に似るが、7層よりローム粒子やや多い。締まりあり。
- 11: 茶褐色土 密。7層に似るが、10層よりローム粒子多い。締まりあり。
- 12:暗褐色土 密。ローム粒多い。締まりあり。
- 13:暗黄褐色土 粒子粗い。くすんだローム粒主体。締まりあり。
- 14:暗褐色土 密。ローム粒多い。締まりあり。
- 15: 茶褐色土 密。焼土粒(径1.5mm)、炭化材粒(径5mm)含む。締まり強い。
- 16:炉跡

第42図 第2号住居跡





第44図 第2号住居跡出土遺物

いる。4は、南北ベルト中より検出された台付甕の脚部である。脚部の裾部分は直径が14cm、頸部分は3.6cmと細い。器面は、外面では縦方向のハケメ調整がなされ、下端は横方向にナデ調整、内面は横方向のハケメ調整が認められる。色調は茶褐色であり、胎土には砂粒を含んでいる。5は、南北ベルト中より発見された壺形土器の口辺部である。貼り付けによって複合口縁をなし、外面と口唇部上にZSの網目状撚糸文が施文されている。色調は茶褐色で内面には赤彩が施されている。胎土は砂粒が少なくき

めが細かい。6は、堆積土中より検出された高坏の口辺部である。わずかに内湾する器形で、外面は剥落が著しいが細かなミガキ調整が施されている。色調は茶褐色で内外面に赤彩が認められる。胎土には砂粒を少量含む。3の口辺部である可能性もある。7は、床面直上より出土した壺形土器の口辺部である。貼り付けによって複合口縁をなし、口辺部外面にはZSの網目状撚糸文が施文されている。色調は茶褐色で内面と頸部外面に赤彩が施されている。胎土は砂粒が少量できめが細かい。8は、堆積土中より出土した壺形土器の口辺部である。貼り付けによって複合口縁をなす。口辺部外面にはハケメ調整が施され、その上にSZの網目状撚糸文と円形赤彩文が施されている。施文順序は網目状撚糸文→円形赤彩文である。複合部下端にはハケ状工具によって刻み目が巡る。色調は薄茶色で内面と頸部外面には赤彩が施されている。焼成はやわらかく、胎土はきめが細かい。9は、堆積土中より出土した壺形土器の頸部である。頸部の強く屈曲する部分で円形貼付文が巡っている。肩部には網目状撚糸文が施文されている。色調は茶褐色で焼成は堅緻である。胎土は砂粒を少量含む。10は、甕形土器の胴部である。外面にはナデ調整が施され、外面には煤が付着している。色調は茶褐色で砂粒を含む。

1~10は、いずれも古墳時代前期の五領 I 式に比定される。

第3節 その他の遺構と遺物

1 溝

第1号溝(第45図)

調査区の北西部に東西方向に伸びる直線状の溝である。調査区西壁の土層断面(第40図)から、調査 区外まで伸びていることが確認できるが、東側は第2号住居跡で途切れている。確認面での上幅は約14 0cm、断面形状は逆台形で、底面の幅は約80cm、確認面から底面までの深さは23cmである。第2号住居 跡を壊して構築されており、覆土中からは少量であるが、かわらけが検出された(第46図1・2)。小 片であるために詳細な時期は不明であるが、出土土器から中世に比定されると考えられる。

2 土坑

以下では特徴的な土坑のみを記述し、その他の土坑の詳細は第7表と第45図を参照されたい。

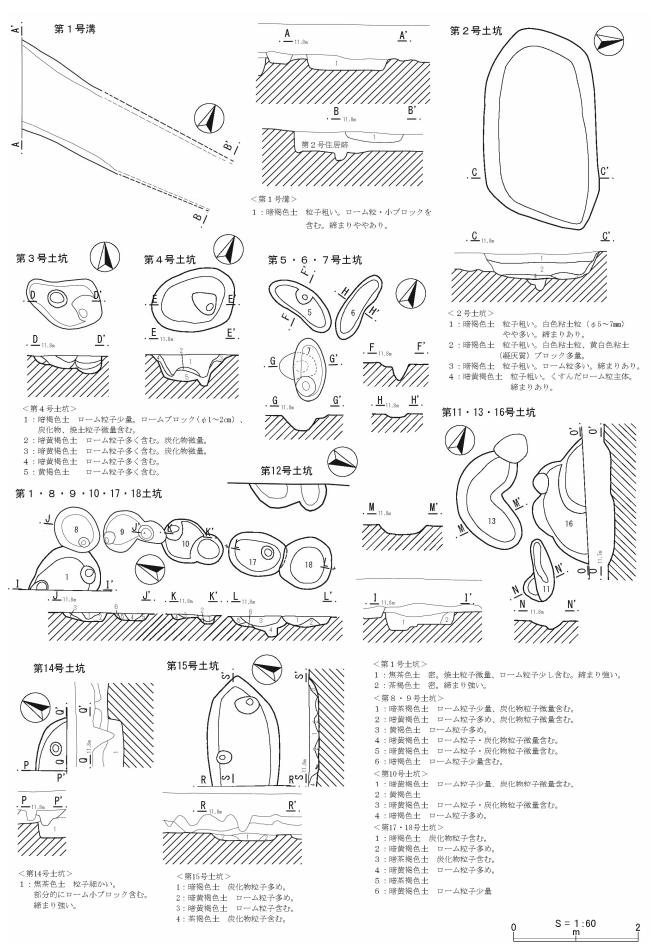
第1号土坑(第7表、第45図)

調査区の北西側、第8号土坑の西側に隣接して位置する。2面で検出された楕円形の土坑で長径は103cm、短径は89cm、深さは23cmである。方向はN8°Wである。縄文中期後半の土器が出土した。

第2号土坑 (第7表、第45図)

調査区の北側、第2号住居跡の北東側に位置する。1面で検出された長径308cm、短径170cm、深さ44 cmの大型の土坑である。形状は不整の長方形で第2号住居跡を一部壊して造られている。方向はN85° Wである。堆積土は4層に分層され、2層からは凝灰質の黄白色粘土がブロック状に認められ特徴的である。人為堆積とみられ、堆積土中からは多数の近世の陶磁器類や古銭、煙管の一部が出土した(第46 図1~25)。出土遺物の時期が比較的まとまることから江戸時代後期とみられ、遺物の構成から当該期の墓壙とみられる。

第3号土坑(第7表、第45図)



第45図 溝・土坑

調査区の中央西壁際に位置する。形状は不整形で長径125cm、短径87cm、深さ17cmである。方向はN8°W。1面で検出されたが出土遺物は縄文土器のみであった。

第4号土坑(第7表、第45図)

調査区の中央よりやや北側、東壁よりに位置する。1面で検出された長径130cm、短径99cm、深さ102 cmの比較的に大型の土坑である。形状は楕円形で土坑底面にはピット状の掘り込みが認められる。方向はN77°Eである。堆積土中からはさみ皿が検出され、室町時代後期と推測される。

第5号土坑(第7表、第45図)

調査区の南西西壁際に位置する。1面で検出された細長い楕円形の土坑であり、第6号土坑、第7号 土坑と類似の形状が隣接して確認されている。P23と重複しており、新旧関係は第5号土坑→P23である。 長径は117cm、短径46cm、深さは29cmである。方向はN77°Wである。堆積土中からは土師器片が検出 されたことから、時期は古墳時代以降と推測される。

第6号土坑(第7表、第45図)

調査区の南西側、第5号土坑の東側に隣接して位置する。1面で検出された細長い楕円形の土坑で長径は117cm、短径は39cm、深さは7cmである。方向はN6°Eである。時期は不明であるが、形態が第5号土坑と類似し、近接した位置関係にあることから古墳時代以降の可能性がある。

第7号土坑 (第7表、第45図)

調査区の南西側、第5号土坑の南側に隣接して位置する。1面で検出された細長い楕円形の土坑で長径は101cm、短径は49cm、深さは7cmである。方向はN30°Wである。時期は不明であるが、形態が第5号土坑、第6号土坑と類似し、近接した位置関係にあることから古墳時代以降の可能性がある。

第8号土坑 (第7表、第45図)

調査区の北西側、第2号住居跡の西側、第1号土坑の東側に隣接して位置する。第1号土坑とは一部が重複しており、新旧関係は第1号土坑より古い。2面で検出された楕円形の土坑で長径は79cm、短径は67cm、深さは15cmである。方向はN37°Eである。詳細な時期は不明であるが、近接する第1・9・10・17・18号土坑と共に住居等の一部を構成する可能性もある。

第9号土坑(第7表、第45図)

調査区の北西側、第8号土坑の南側に隣接して位置する。2面で検出された楕円形の土坑で長径は69 cm、短径は60cm、深さは15cmである。方向はN35°Eである。

第10号土坑(第7表、第45図)

調査区の北西側、第9号土坑の南側に隣接して位置する。2面で検出された不整円形の土坑で長径は75cm、短径は73cm、深さは14cmである。方向はN35°Eである。。

第17号土坑 (第7表、第45図)

調査区の北西側、第10号土坑の南側に隣接して位置する。2面で検出された不整円形の土坑で長径は90cm、短径は74cm、深さは23cmである。方向はN35°Eである。

3 溝・土坑・ピット出土遺物 (第46図)

1・2は第1号溝より出土したかわらけの一部である。1は口縁部、2は底部で底面に糸切痕が認められる。時期は室町時代と推測される。

3~17は、第2号土坑より出土した遺物である。3は、かわらけの口縁部である。4は、常滑産の甕



第46図 溝・土坑・ピット出土遺物

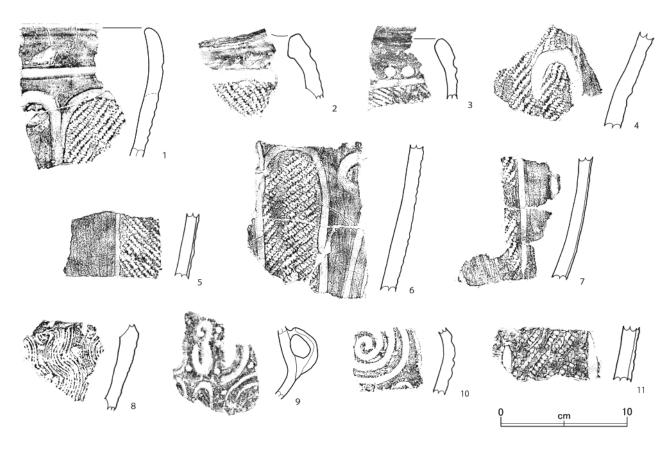
の肩部で外面にはタタキ調整がなされている。5は肩部片である。小壺の一部とみられ、肩部の推定径 は約7cmである。灰色の胎土ににぶい淡黄色の灰釉が施されている。瀬戸・美濃窯産で、時期は大窯編 年の第1段階(1480~1530) (愛知県史編さん委員会2007) であり、室町時代後期の所産とみられる。 6は口縁部片である。直立する形状から筒形香炉とみられる。推定口径は10.7cmである。口唇部は内削 ぎで内面にやや張り出している。胎土は浅黄橙(10YR8/3)であり、外面全体、及び内面上半に明黄褐 色(2.5Y7/6)の灰釉が施されている。瀬戸・美濃窯産であり、時期は登窯編年の第2段階7~8小期 (1730~1800) (愛知県史編さん委員会2007) と推測される。7は灰釉陶器である。推定口径は14cm、 底径は7cm、高さは3.5cmの菊皿である。体部は型打で菊花形に成形されている。体部内面には布目痕が 明瞭に残る。高台は付高台である。胎土はにぶい淡黄色で、粗く重い。内面から体部外面上半にかけて、 灰白色の灰釉が施されている。瀬戸・美濃窯産であり、時期は登窯編年の第1段階(1650~1670年)(愛 知県史編さん委員会2007)とみられる。8は口縁部片である。ロクロ成形で推定口径は11.8cmである。 胎土は灰色で内外面に釉が施されている。美濃焼の一つである志野とみられ、17世紀頃の所産とみられ る。9は染付である。碗形を呈し、胴部から口唇部にかけて器厚が薄くなる。口唇部はやや内湾し、内 面にわずかな段を有する。胎土は灰白色で呉須による草花文が描かれている。推定口径は7.8cmであり、 その形状から仏飯器の可能性も考えられる。肥前産で17世末~18世紀初頭、江戸時代後期の所産とみら れる。10は染付である。碗形の口縁部とみられる。胴部から口唇部にかけて器厚が若干薄くなる。胎土 は白色で外面に呉須による草花文が描かれている。肥前産で17世紀末~18世紀初頭、江戸時代後期の所 産とみられる。11は染付である。碗形の底部であり、推定高台径は4.6cmである。胎土は灰白色であり、 外面には呉須による草花文が描かれている。肥前産で江戸時代後期の所産とみられる。12は瓦質焙烙の 口縁部片である。ロクロ成形で口唇部は面取りされ、外面は口辺部を除き、ケズリ調整が施されている。 色調は灰褐色で胎芯が認められる。外面全体には煤が付着している。時期は17世紀、江戸時代後期のも のと推測される。13は銭貨である。小型の寛永通宝であり、銭文の書体から新寛永とみられる。直径は 2.1cm。14は幅3cm、高さ1.5cmの小形の蓋である。ロクロ成形で、胎土は砂質で灰色である。上面、底 面ともに斑点状の褐色釉が認められる。瀬戸・美濃窯産であり、時期は江戸時代後期とみられる。15は 煙管の火皿である。直径は1.6cm、高さは0.9cm、接合部は0.7cmである。銅製で、皿の上端から外面に かけて緑青が浮き出ている。いわゆるラウ煙管であり、火皿上部に稜が認められないことから、江戸時 代後期のものと推測される。16は上臼の上縁部である。砂岩製で上面と外面には細かな筋状の加工痕が 認められる。破断面の一部と端部に擦痕が確認されることから、砥石に転用されていたとみられる。上 臼そのものの時期は不明であるが、第2号土坑から出土した他の遺物から江戸時代後期のものと推測さ れる。17は、堆積土中より出土した条線が施された縄文土器である。

18は第4号土坑から出土した口縁部片である。器形からはさみ皿とみられる。胎土は灰色で口縁部外面から内面にかけて灰釉が施されている。瀬戸・美濃窯産であり、時期は大窯編年の第1段階(1480~1530)(愛知県史編さん委員会2007)であり、室町時代後期の所産とみられる。19は第1号土坑から出土した深鉢形土器の口縁部である。風化が著しく外面は磨滅しているが、単節LR縄文が横位に施文されているとみられる。20・21は5号土坑から出土した縄文土器である。磨消縄文が施され、いずれも加曽利E3式に位置づけられる。22は6号土坑から出土した縄文土器である。2本1組の凹線による懸垂文が施されている。23は14号土坑、25は15号土坑、26は16号土坑から出土した深鉢形土器の口縁部である。いずれも磨消手法が認められ、縄文中期後半の加曽利E3式期に比定される。

26はP1から出土した分銅形の打製石斧である。素材には安山岩が用いられ、長さは9 cm、幅は4 cm、厚さは2.4 cmである。27・28はそれぞれP3、P53から出土した縄文土器である。

4 遺構外出土遺物 (第47図)

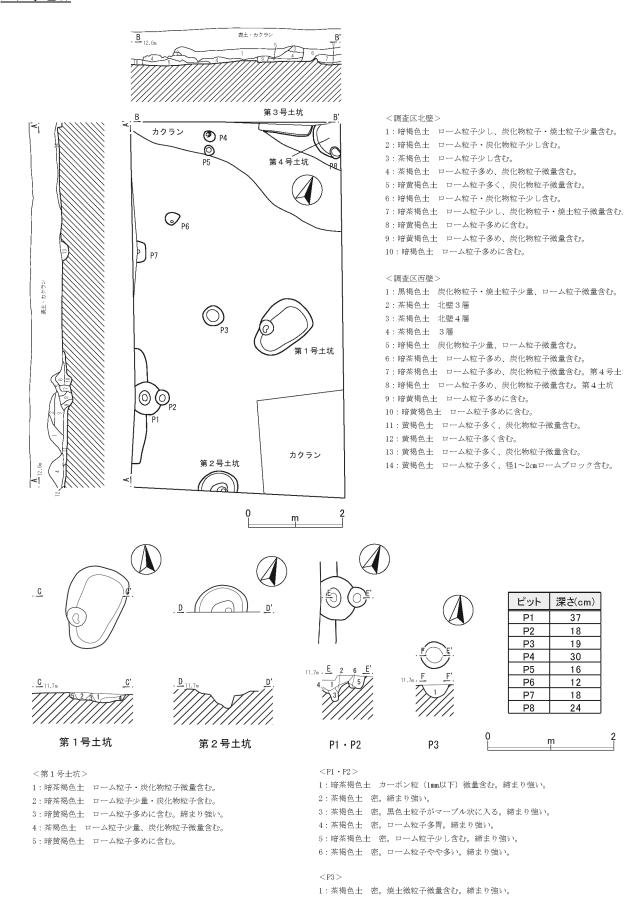
 $1 \sim 3$ は深鉢形土器の口縁部である。1 は単節RL縄文縦位→幅10mmの逆U次状凹線→磨消の順で施されている。2 は波状口縁とみられ、0 段多条のRL縄文横位→幅10mmの凹線の順で施文されている。3 は無節R横位→幅5mmの沈線→円形刺突文の順で施されている。いずれも加曽利E3式に位置づけられるが、 $1 \cdot 3$ は口縁部文様帯が消失しているとみられ、2 よりも新しい。 $4 \sim 7$ 、11 も加曽利E3 式の胴部とみられ、 $4 \cdot 6$ には当該期の特徴である端部がわらび手状になる沈線が施されている。 $5 \sim 7$ も施文順序が共通しており、単節縄文縦位→沈線による懸垂文→磨消の順で施されている。8 は、地文に櫛歯状工具による波状条線が施され、口縁部とみられる箇所に凹線が施されている。加曽利E3 式期のいわゆる「条線粗製土器」の一部と考えられる。 $9 \cdot 10$ は両耳鉢の一部であり、9 には円形刺突文、単節縄文、9 重の沈線、10 には沈線による渦巻文が施されている。いずれも加曽利E3 式に比定される。



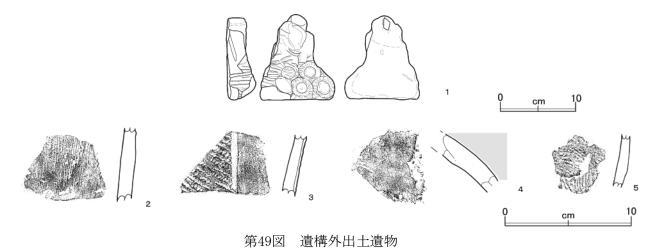
第47図 遺構外出土遺物

第Ⅳ章 第3次調査の遺構と遺物

第1節 第3次調査区の概要



第48図 全測図及び全土層図



調査区全体が後世の影響を受けており、遺物包含層はほとんど失われていた(第48図)。ローム層上面で検出された遺構は、いずれも縄文時代とみられる土坑及びピット12基を検出した。遺物は、縄文中期の土器や古墳時代前期の土器、近世の泥面子など18リットル入り遺物収納容器1箱分が出土した。

第2節 遺構と遺物

1 土坑 (第48図)

以下では特徴的な土坑のみを記述し、その他の土坑については第48図を参照されたい。

1号土坑 (第48図)

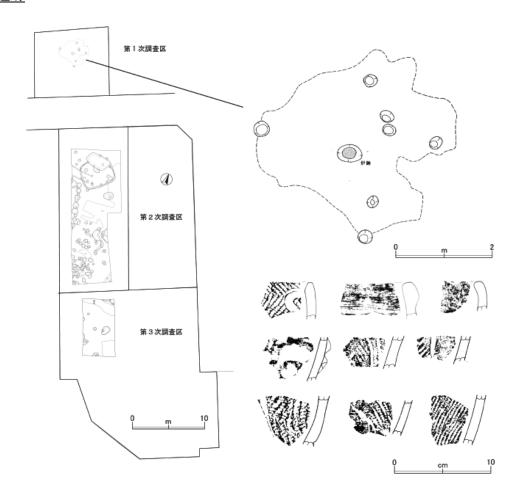
調査区の中央やや東寄りに位置する。形状は不整楕円形で長径は101cm、短径は64cm、深さは12cmである。出土遺物はないが、ローム層上面で検出されていることから時期は縄文時代以降と推測される。

2 遺物 (第49図)

1は、調査区を精査した際に出土した泥面子である。素焼きの人形であり、大きさは長さ2.1cm、幅1.9cmである。背面と左側面に芯棒痕が確認できる。表面には白化粧がわずかに認められることから、本来は胡粉で地塗りされ、彩色されていたとみられる。面貌や姿勢は明瞭でないが、積み上げられた5俵の米俵に左脚を立てて座したその様子から、七福神の一人である大黒天を表現したものと考えられる。時期は江戸時代後期と推測される。2・3は加曽利E3式の胴部であり、3には磨消縄文が認められる。4は古墳時代前期の壺形土器の肩部であり、外面には赤彩が認められる。5は、古墳時代前期の甕の胴部である。外面にはハケメ調整が施されている。

第V章 まとめ

第2次調査、第3次調査を通じて特筆されるのは、これまで十分に周知されていなかった古墳時代のほか、室町時代や江戸時代の遺構及び遺物が確認されたことである。第2次調査の北側で実施されていた第1次調査でも土師器が検出されていたが、第2号住居跡の存在から古墳時代前期の集落が当地に展開していた可能性が高まったといえる。このほか、中世とみられる溝跡や江戸時代後期の墓壙が検出さ



第50図 第1次調査区の位置及び出土遺物

れ、当該期においても居住活動が活発であったことがうかがわれる。第Ⅱ章でも触れたように、遺跡名の由来である「大在家」は近世以前には既に用いられていたと考えられており、土地利用の歴史の一端を考古学的にも明らかにできた点は重要であろう。

また、明確に遺構が特定されたわけではないが、第2次調査、第3次調査で数多く確認されたのは縄文時代中期後半の加曽利E式土器である。型式学的には、加曽利E式の中でも3式に位置づけられるものが大半であり、第2次調査の2面や第3次調査で検出された土坑やピットの多くは、加曽利E式土器の出土量からみても当該期に比定される可能性がある。加曽利E3式期の遺構は第1次調査でも確認されていることから(第50図)、この時期の集落が展開していたことはほぼ確実である。同時期の遺構・遺物は近隣の諏訪入遺跡や原山東原遺跡でも報告されるなど(浦和市遺跡調査会1987・1988・1990・1997)、各地で当該期の遺構が認められる点は加曽利E式期の居住形態を考える上でも注目される。個人住宅の建設に伴う発掘調査のため、その範囲は限定されていたが、今回の成果は大在家遺跡の理解の進展に一歩、寄与したといえるであろう。

【参考文献】

愛知県史編さん委員会:2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系

古泉 弘:1987『江戸の考古学』ニューサイエンス社

第4部

茶臼塚古墳(第1次調査)

第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

平成23年3月、さいたま市大宮区三橋四丁目における個人専用住宅の建設にあたり埋蔵文化財発掘の届出が工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に提出された。これを受け、平成23年4月14日に確認調査を実施したところ、古墳時代の茶臼塚古墳の周溝及び埴輪を検出した。これらの遺構・遺物の現状保存が可能か否かの協議を実施したところ、予定される工事では発見された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため、さいたま市教育委員会が工事に先立って、記録保存のための発掘調査を平成23年5月19日から同年6月24日まで実施した。



1:茶臼塚古墳 2:側ヶ谷戸貝塚 3:井刈古墳 4:林光寺遺跡 5:備前堤 6:水判土堀の内遺跡

7:根切遺跡 8:金谷遺跡 9:中野林袋遺跡 10:原遺跡

第51図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 調査の方法と経過

1 方法

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設部分のうち確認調査により遺構が確認された範囲を中心に調査区を設定し調査を実施した。排土の処理の関係で、南側をA区、北側をB区として調査を実施することになった。重機により表土を除去した後、人力により遺構確認を行い、引き続き遺構確認調査を実施した。

2 経過

発掘調査は平成23年5月19日から同年6月24日まで実施した。

- 5月19日休 調査区の設定を実施。調査区南側をA区とし、北側をB区とする。最初にA区を調査し、反 転後にB区を調査を実施。重機により調査区の約半部にあたる南東部の表土除去を開始。
- 5月20日俭 トイレ・プレハブの搬入・設置。機材の搬入。重機による表土除去作業を終える。
- 5月23日(火) 遺構確認を行う。調査区内に古墳の周溝及び時期不明の溝を1条確認する。調査区内の殆ど は周溝であり、南西部と北東部にかろうじて基盤層が確認できる状態である。周溝の幅・落 ち込みが確認できるよう、調査区にベルトを設定してA区の発掘調査を開始する。 遺構の覆土は粘土質でとても硬い。
- 5月25日(水) 周溝の遺構の覆土除去作業を継続する。深さ約80cmまで掘り下げる。縄文時代の土器片や古墳時代の埴輪片が少量出土するが、いずれも小さく、磨耗しているものが多い。
- 5月26日休 周溝の遺構の覆土除去作業を継続。深さ約90cmまで掘り下げる。縄文時代の土器片や古墳時代の埴輪片が少量出土するが、いずれも小さく、磨耗しているものが多い。
- 5月27日俭 周溝の遺構の覆土除去作業を継続する。深さ約110cmまで掘り下げる。縄文時代の土器片や古墳時代の埴輪片が出土する。
- 5月31日(火) 周溝の遺構の覆土除去作業を継続する。深さ約130cmまで掘り下げる。埴輪片が出土する。深さ110cmまでに出土したものと比べると埴輪片が大きなものが多いが、いずれも破片のみの出土である。
- 6月1日(水) 周溝の遺構の覆土除去作業を継続する。深さ約150cmまで掘り下げる。埴輪片がこれまでより も多く出土する。深さ130cmまでに出土したものと比べると埴輪片が更に大きなものが多いが、 いずれも破片のみの出土であり、一個体になりそうな埴輪は確認できない。
- 6月3日金 周溝の遺構の覆土除去作業を継続する。周溝の土層図を作成する。土層図作成後はベルト部 分の遺構調査 (覆土除去作業)を開始する。また、調査区東側で確認された溝の覆土除去作 業を開始する。
- 6月6日 月 周溝の遺構の覆土除去作業を継続。調査区東側にある溝の遺構調査(覆土除去作業)を継続。
- 6月7日(火) 周溝の遺構調査 (覆土除去作業) を継続する。調査区東側にある溝の遺構調査 (覆土除去作業) を継続する。
- 6月8日(水) 周溝の遺構調査 (覆土除去作業) を継続する。これまでと同様に約110cmよりも深いところからは、やや大きな埴輪片が出土するが、いずれも破片のみの出土である。調査区東側にある

溝の遺構調査(覆土除去作業)を継続する。溝の覆土から陶器片が出土した。

6月9日(A区)の遺構調査(覆土除去作業)を終了する。写真清掃、写真撮影ののち 調査区南側(A区)の平面図の作成を実施。

6月10日俭 調査区南側(A区)の東壁面の土層図の作成実施。重機による反転作業を行う。

6月13日(月) B区の周溝の遺構調査(覆土除去作業)を開始する。

6月14日(火) 周溝の遺構調査(覆土除去作業)を継続する。これまでと同様に深さ約100cmまでは、縄文時代の土器片や古墳時代の埴輪片が少量出土するが、いずれも小さく、磨耗しているものが多い。

6月15日(水) 周溝の遺構調査(覆土除去作業)を継続する。これまでと同様に約110cmよりも深いところからは、やや大きな埴輪片が出土するが、いずれも破片のみの出土である。

6月16日休 周溝の遺構調査(覆土除去作業)を継続する。調査区の全測図を平板にて作成する。

6月20日(月) 周溝の遺構調査 (覆土除去作業) を継続する。調査区北側 (B区) の北壁面の土層図を作成する。

6月21日(火) 周溝の遺構調査 (覆土除去作業) を終了する。写真清掃、写真撮影ののち調査区北側 (B 区) の平面図を平板にて作成する。

6月24日(水) 重機による埋め戻し作業を行う。機材、プレハブ及びトイレの撤去を行う。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

さいたま市大宮区三橋4丁目に所在する側ヶ谷戸古墳群は、6世紀から7世紀の古墳群として知られ、 埼玉県選定重要遺跡に選定されている。このあたり一帯には、近世以降の開墾により墳丘が無くなってし まったが、かなりの数があったものと推定され、実際に発掘調査により周溝や埴輪が発見されている。

茶臼塚古墳については、墳丘を含む敷地が昭和55年に大宮市(現さいたま市)の所有となり、墳丘の崩壊を止める工事の実施や案内説明板の設置など、今日まで保存に努めてきたところである。平成12年に古墳の周溝の範囲を確認する調査が実施された。調査内容は古墳の南側2本、東側1本のトレンチを入れたものであったが、周溝は確認されなかった。周囲は削り取られて黒色土で覆われており、周溝は失われていることが判明した。

茶臼塚古墳はさいたま市大宮区の西部に位置する。周辺は、東方500mに新大宮バイパスが南北に走り、500m北側では主要地方大宮上福岡所沢線が東西に走っている。古墳の北東には大宮西高校があり、付近一帯は宅地化が進んでいる。

地形としては、大宮台地の日進与野支台上の南西部に位置しており、南北に流れる鴨川の左岸の台地から一段段丘上に落ちた部分にあたる。近世以降の荒川の改修が行われる以前は、水判土の慈眼寺付近で鴨川と合流した入間川がこのあたりへ流れ込んでいた。三橋4丁目の台地に入間川の流れがぶつかり、氾濫・蛇行の繰り返しがなされたことによりつくられた自然堤防がこの流域に形成されており、下流まで続いている。

茶臼塚古墳

笹森紀己子 1987年『稲荷塚古墳周溝確認調査報告』大宮市文化財調査報告書 第23集

塩野 博·柳田敏深 1973『台耕地稲荷塚古墳発掘調査報告』大宮市文化財調査報告書第6集

山口康行・渡辺正人 1991 『B-66号・B-91号・B-92号遺跡』大宮市遺跡調査会報告書第32集

笹森紀己子 1997『側ヶ谷戸貝塚-第2次調査-』大宮市遺跡調査会報告書第58集

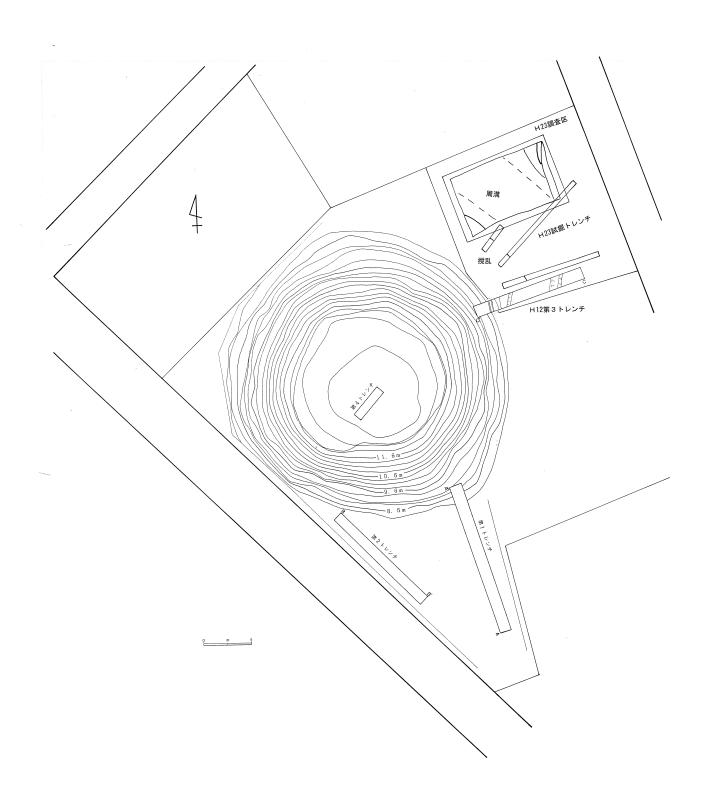
笹森紀己子 2000『側ヶ谷戸貝塚-第3次調査-』大宮市遺跡調査会報告書第67集

笹森紀己子・雨宮正人・石原祐介・澤栁葉子 2001『根切遺跡 (第6次調査)・茶臼塚古墳範囲確認調査』大宮市文化財調査報告書第50集

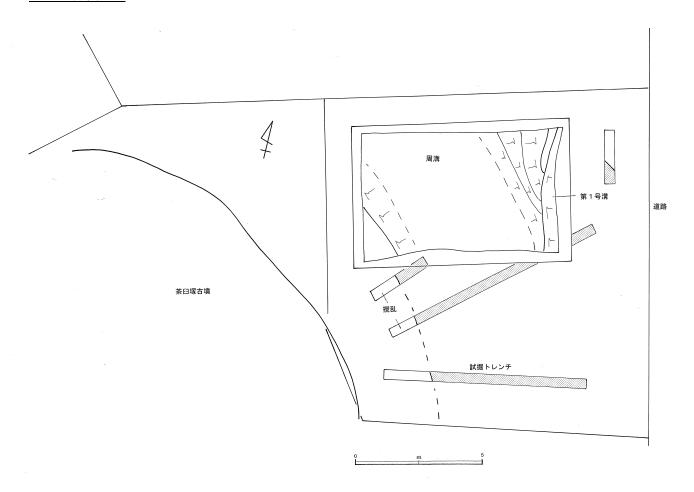


第2節 調査区の概要

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設範囲で確認調査により遺構が検出された部分を中心として調査範囲を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代の周溝1基が検出された。遺物は、縄文時代中期の土器・古墳時代の埴輪や土師器が、18リットル入り遺物収納容器3箱分出土した。



第53図 調査区の位置(1)

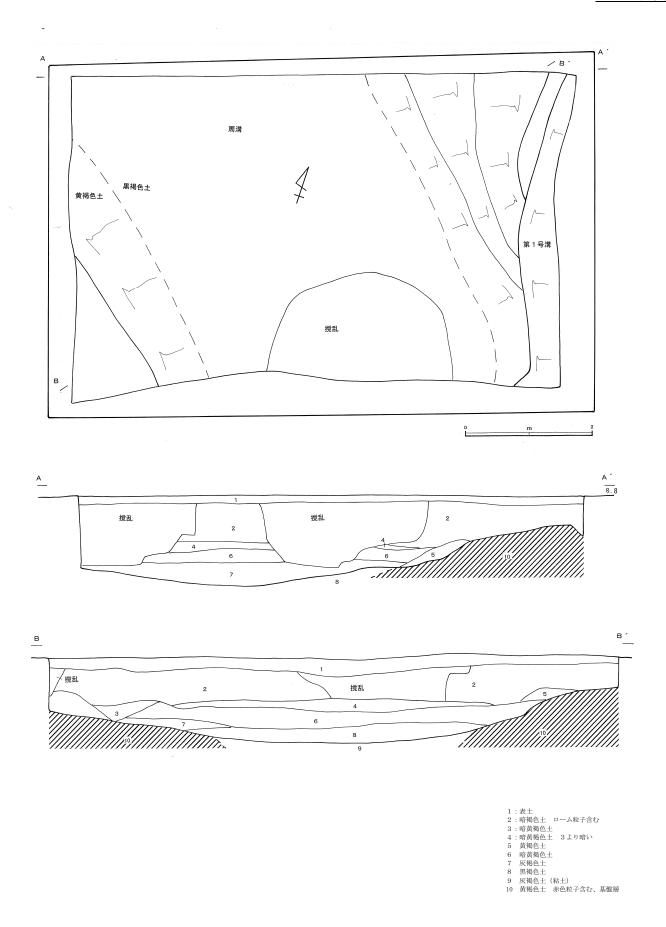


第54図 調査区の位置(2)

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物

今回の調査区は茶臼塚古墳の北東側にあたり、調査区内に古墳の周溝の一部が確認されている。調査区 東端を南北に走る中近世以降の溝によって古墳周溝は切られている。



第55図 全測図及び全土層図

1 周溝 (第55図)

古墳の周溝については、今回の調査で幅約10m、現地表からの深さは1.8m以上であることが確認された。 調査区内での土を移動しながらの調査であったが、断面図をつなぎ合わせて調査区北側のA-A`と南西コーナーから北東コーナーのB-B`の土層断面図を作成している。

周溝は自然堤防上に存在しており、その基盤層(赤色粒子を含む黄褐色土)を掘削して周溝が作られていた。B-B 断面は溝に直交して設定し、周溝内側の基盤層と外側の基盤層を確認している。周溝の中央最も深い部分は現地表下約1.8mの深さまで調査し、下に第9層の粘土層が続くことを確認している。調査区北側のA-A 断面では東側に周溝外側の基盤層を確認できたが周溝内側の立ち上がりは調査区外であった。現地表下約1.8mの深さまで調査し、下に第8層の黒褐色土が続くことを確認している。さらに下層には粘土層や基盤があるものと思われる。狭い調査区で垂直に掘削する限界から周溝の底の基盤層を確認はできていないが、断面の形状から周溝の最深部はさらに数十cm下がるものと思われる。

B-B 主層断面で周溝内側と外側の基盤層が確認できている。その形状は、茶臼塚古墳の中心からほぼ同心円状の位置に内側のラインも外側のラインもあり、茶臼塚古墳の周溝の一部であると考えられる。確認できた基盤層は周溝の両端への立ち上がり途中であると考えられ、さらに周溝の幅は調査区外へ広がるものと考えられるが、茶臼塚古墳測量図に重ね合わせると、周溝の外径は概ね62~65mの程であったと考えられる。また、現在残存している墳丘は径約33mであるが、墳丘の周囲が全体に崩壊しているものと思われ、径40m程であったものと推測される。

なお、平成12年の範囲確認調査では古墳の南側と東側にトレンチを設定して調査したが周溝は確認できていないので、南側に前方部が存在する前方後円墳であった可能性もある。

2 出土遺物 (第56・57図)

調査区および試掘調査時のトレンチから遺物が出土しているが、全て耕作による著しい摩耗が見られる。 調査区では埴輪のほかに縄文土器、古墳時代初頭の土師器、後期の須恵器、中世以降と思われる陶磁器な どが出土している。出土層位記録のあるものはすべて第6層から出土しているので遺物の原位置を保って いるとは考えられないので、出土地点・層位は関係なく時期ごとにまとめて掲載する。

1~28が埴輪である。1~6は口縁部破片で、摩耗が著しいが、外面はタテハケ、内面は横から斜め方向のハケメが見られ、口縁部はヨコナデされている。7~20は凸帯の部分で、凸帯は2種類見られる。7~16は、凸帯の上面は横方向のナデがされているが、下面はヨコナデがなく粘土紐の貼り付けられた状態である。17・19・20は凸帯の上下ともなでられており、色調も薄茶色であり、1~16と異なる。17・18は円窓が見られる。18は摩耗が著しく、表裏の区別もつかない状態であるが円窓があるので掲載した。22~27は埴輪底部破片で外面はタテハケ、内面は斜めのハケメが見られる。25は底部調整のヨコハケの上にタテハケが付けられている。色調は4・7が濃い茶褐色、17・19・20は薄茶色のほかは橙褐色である。28は、形象埴輪の一部で人物埴輪の「手」の部分と思われる。

29~38は、縄文土器で、29は繊維土器で、摩耗が著しく文様は不明であるが早期後半と思われる。30~3 3は中期、34・35は後期、36~38は晩期である。30は隆帯による渦巻き文が見られる。31は条線を地文に沈 線で文様が描かれている。32は縄文地文に垂下する沈線間を磨り消している。33は口縁破片で、無文部の 下に円形の刺突が巡る。34は波状口縁の突起部分である。35は併行する沈線間に斜めの刻み目が入る。36から38は、地文はなく沈線で文様が付けられている。

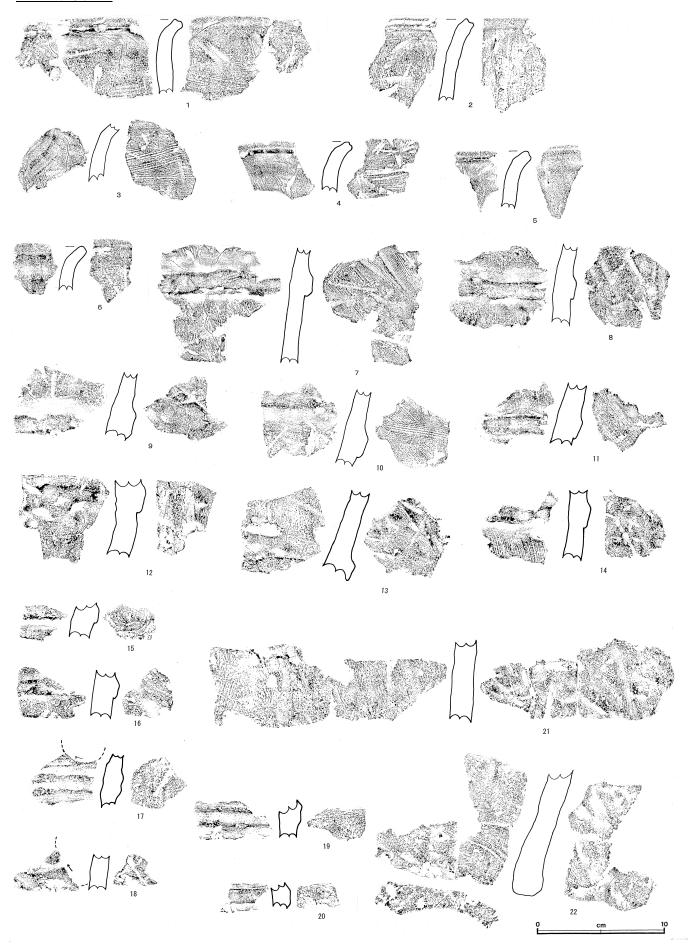
39・40は古墳時代初頭の土師器である。39は小型壷上半部で、薄茶色で3分の1周程の残存である。40は、 高坏形土器で10分の1ほどの残存である。内外面ミガキの上に赤彩されている。

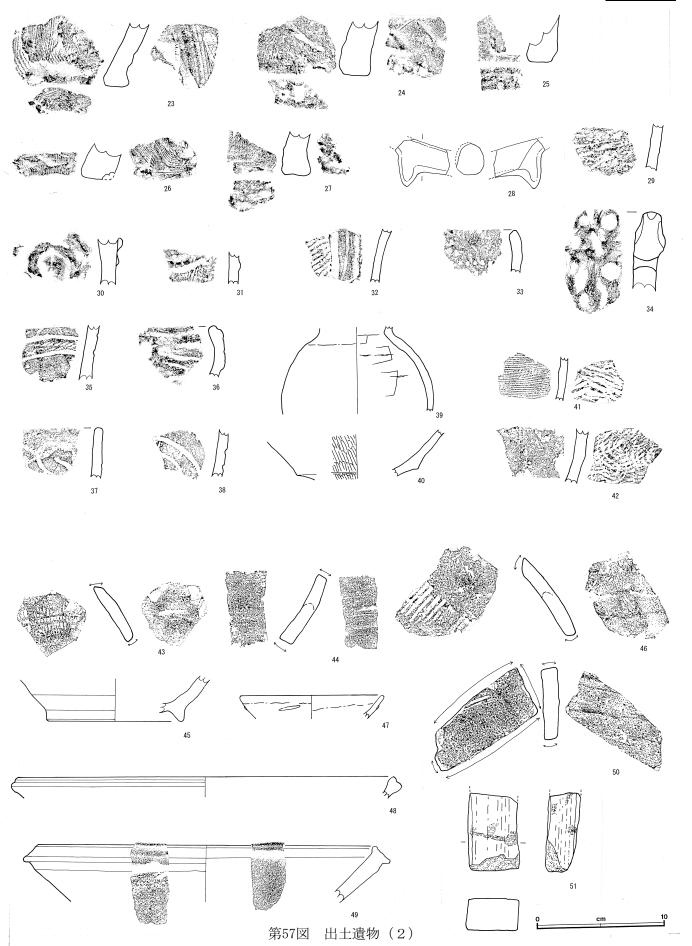
41・42は須恵器で内外面に叩き目が見られる。

43~49は中世陶器である。43は東海系甕の胴部片である。44・45は山茶碗系鉢である。44は体部下半片を研磨具に転用したもので、周囲が平滑になっている。45は鉢底部片である。46は渥美・常滑系の甕胴部片で、押印が施され自然釉がかかる。47は縁釉皿で、口縁部周辺のみ鉄釉がかかり、以下は露胎となっている。外面に重ね焼成痕が付着しており、15世紀後半のものと思われる。48は擂鉢口縁部で暗紫灰色の錆釉がかかっている。47・48は古瀬戸の後IV期新~大窯1段階前半のものであろう。49は16世紀前半の常滑の鉢である。50は常滑の甕の胴部片で研磨具に転用され周囲が平滑になっている。このほか図示できないほどの小片であるが、青白磁の口縁部破片が出土している。

51は、砥石で、上半を欠いているが、使用による凹みが見られる。時期は不明。116g。

これらの遺物は使われていた状態を保ってはいないが、この周辺でそれぞれの時代に人々の営みがあったことを示す痕跡である。特に、本調査区は茶臼塚古墳周溝の位置にあたり、出土した埴輪は、平成12年の範囲確認調査で出土した資料と凸帯の形状や色調などの特徴が同じもので6世紀後半のものと考えられ、古墳の時期を示す資料と言えよう。





第5部

側ヶ谷戸貝塚(第8次調査) 第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

平成24年5月、さいたま市大宮区三橋4丁目376番地2、3における個人専用住宅の建設にあたり、工事主体者よりさいたま市教育委員会宛に、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。建設予定地は側ヶ谷戸貝塚の範囲内にあたるため、平成24年8月24日及び9月11日に確認調査を実施したところ、縄文時代の住居跡、土坑、古墳時代の古墳周溝などの遺構・遺物を検出した。ただちに遺跡の保存について協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため工事主体者からの依頼により、工事に先立ち、さいたま市教育委員会が平成24年9月20日から同年24年10月12日まで記録保存のための発掘調査を行った。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

今回の調査は個人専用住宅建築に伴うもので、住宅建設部分を対象として発掘調査を実施した。調査は、 重機を用いて調査区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構確認・精査・記録作業等を行った。遺構 の記録は平板測量と簡易遣り方測量を併用した。排土処理の都合上、調査区を東西に2分し、西側から着 手し、西側調査終了後、重機により反転作業を行い、東側の調査を実施した。

2 調査の経過

平成28年9月20日に機材の搬入を行った。発掘調査は平成24年9月20日から同年24年10月12日まで実施した。9月21日に重機を用いて表土除去を実施し、遺構確認を行った。9月24日古墳周溝を確認、10月3日第1号住居の貝層を検出した。そして、10月12日に貝層掘削および記録後、完掘し、写真撮影、遺構の測量記録等を実施する。同日、重機による埋戻し作業を行い現地での作業を終了する。

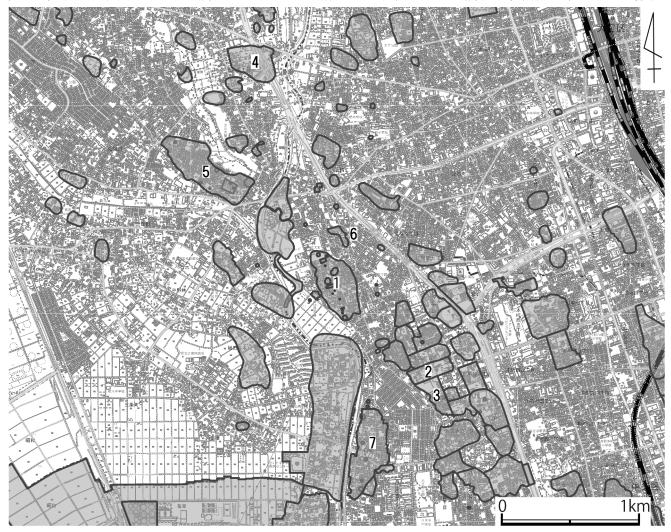
第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

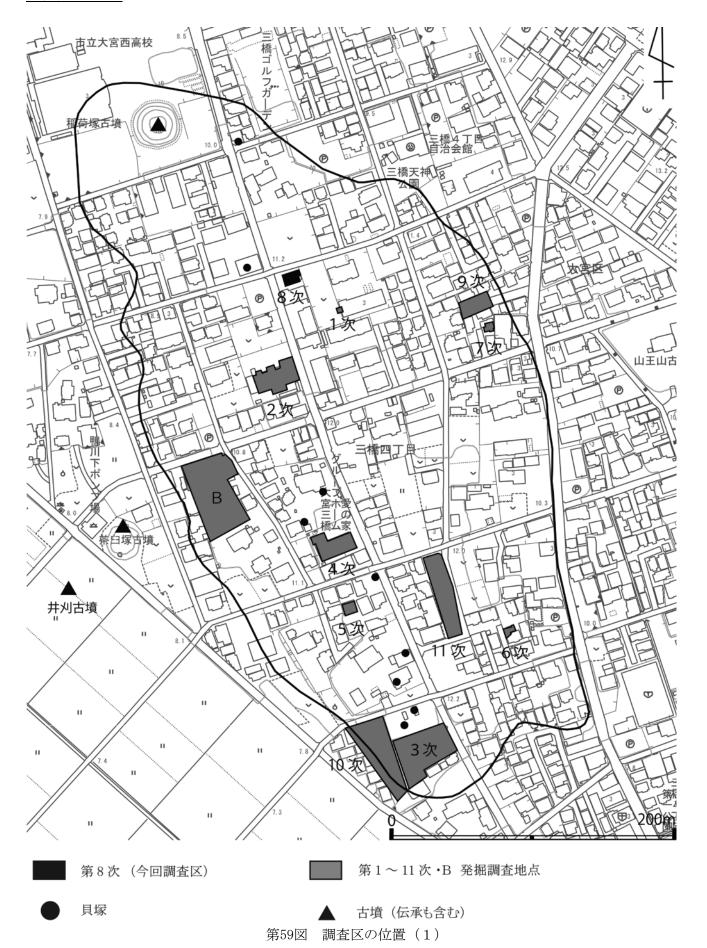
側ヶ谷戸貝塚はさいたま市の西部、大宮区三橋4丁目に所在し、JR大宮駅の西約3kmに位置する(第58図)。地形としては、大宮台地の西端部にあたり、鴨川左岸の南へ突き出した幅300m程の小舌状台地上に立地する。遺跡は標高約10~12mの台地上に東西約280m、南北約500mの範囲に広がり、西側の低地との比高差は約3.5~4.5mである。

これまでに未報告も含め第11次まで調査がおこなわれており、縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡として知られ、埼玉県選定重要遺跡に指定されている(註1)。特に縄文時代前期には地点貝塚が遺跡内に広範囲に点在し、古墳も遺跡内及び周囲に点在しており、側ヶ谷戸古墳群を形成する。今回の調査区は遺跡中央部の北よりに位置する(第59図)。

本遺跡の立地する鴨川流域には、各時代の遺跡が多く存在しており、縄文時代前期中葉、関山・黒浜式期には、下流南東約1kmに6ヵ所の地点貝塚から構成される円阿弥貝塚が所在し、関山式期の貝塚を伴う



1:側ヶ谷戸貝塚 2:円阿弥貝塚 3:御屋敷山遺跡 4:下手遺跡 5:原遺跡 (植水古墳群) 6:B-66W遺跡 7:白鍬宮腰遺跡 第58図 遺跡の位置



住居跡を1軒、南側に隣接した御屋敷山遺跡でも同時期の住居跡1軒をそれぞれ発掘している(註2)。また、縄文時代前期後葉諸磯式の時期には上流約2kmの下手遺跡、1.3kmには原遺跡が所在し、それぞれ住居跡が発見されている。(註3)。

古墳時代の遺跡は、北東約250mに古墳時代前期の住居跡が10軒検出されたB-66W遺跡が所在する(註4)。また、古墳群は遺跡西側の鴨川流域に連なり、上流1.3kmに植水古墳群(原遺跡)、下流には白鍬古墳群(白鍬宮腰遺跡)、大久保古墳群が存在する。側ヶ谷戸古墳群と植水古墳群は台地上に立地し、白鍬・大久保古墳群は自然堤防上に立地しており、いずれも6世紀から7世紀に営まれた古墳群である。

側ヶ谷戸古墳群では、墳丘が残っている稲荷塚古墳・茶臼塚古墳・台耕地稲荷塚古墳・上之稲荷古墳、石室のみが残っている山王山古墳、かつて墳丘があったと伝えられる中郷古墳・井刈古墳の7基の古墳が知られている。その他7次調査までに周溝のみが14基確認されている。これらの古墳は6世紀後半の埴輪を持つ古墳が主体であるが、4世紀の土器が出土する周溝や7世紀の古墳も調査されている。今回の調査より後に行われた第9次調査(第7次調査区の北側隣接地)では古墳の周溝が2基調査されており、そのうち1基は出土した円筒埴輪などから6世紀前半と推定されている。

(註1) 埼玉県 1980 『新編 埼玉県史 資料編1 原始旧石器・縄文』

埼玉県教育委員会 1981『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅲ (昭和46年度~昭和49年度)』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第10集

埼玉県教育委員会 1985 『埼玉県重要遺跡緊急発掘調査報告書 I 』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第14集

大宮市遺跡調査会 1997『側ヶ谷戸貝塚 - 第2次調査 - 』大宮市遺跡調査会報告 第58集

大宮市遺跡調査会 2000『側ヶ谷戸貝塚 - 第3次調査 - 』大宮市遺跡調査会報告 第67集

さいたま市遺跡調査会 2002『側ヶ谷戸貝塚 - 第4次調査 - 』さいたま市遺跡調査会報告書 第9集

さいたま市教育委員会 2004 『さいたま市文化財保護年報No.4 - 平成15年度』

さいたま市教育委員会 2005『側ヶ谷戸貝塚(第5次調査)・道場寺院跡(第2次調査)・高見北遺跡・東裏遺跡(第

7次調査)・宿宮前遺跡(第5次調査)』さいたま市内遺跡発掘調査報告書 第4集

さいたま市遺跡調査会 2008『側ヶ谷戸貝塚 - 第6次調査 - 』さいたま市遺跡調査会報告書 第81集

さいたま市教育委員会 2008『さいたま市文化財保護年報 - 平成19年度』

(註2) 安岡路洋・栗原文蔵1968「円阿弥貝塚の住居址」『埼玉考古』第6号

与野市 1968 『与野市史』自然・原始古代資料編

さいたま市遺跡調査会2006『御屋敷山遺跡(第3次)』さいたま市遺跡調査会報告書第50集

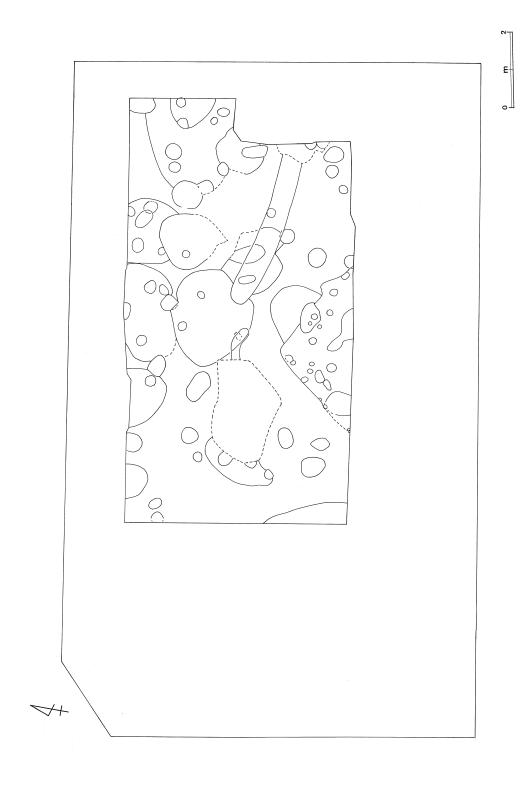
(註3) 大宮市 1968『大宮市史』第1巻

大宮市遺跡調査会 1985 『原遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 第12集

(註4) 大宮市遺跡調査会 1993『B-66W号遺跡・C-66号遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第43集

第2節 調査区の概要

本地点の調査対象面積は、住宅建設工事等により充分な保護層が確保できない範囲の66㎡である。調査の結果、縄文時代前期黒浜式期の貝塚を伴う住居1軒、縄文時代前~中期の竪穴状遺構6基、土坑24基、古墳時代の周溝1条、時期不明の土坑2基、ピット8基、溝2条を検出した。今回の調査で出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器と埴輪片が18リットル入り遺物収納容器2箱分出土した。



第61図 全測図及び全土層図

第Ⅲ章 遺構と遺物

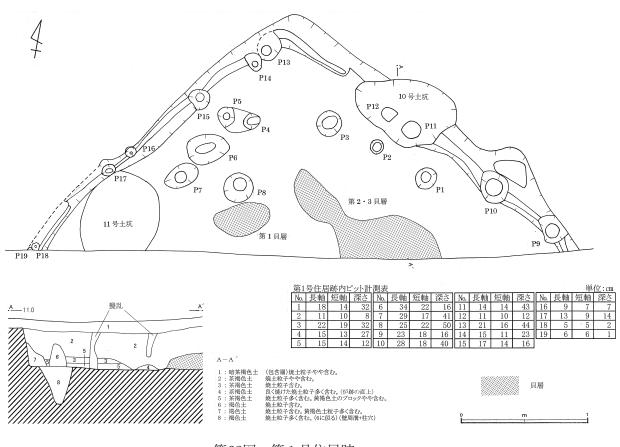
第1節 住居

第1号住居跡(第62図)

調査区南端中央で検出した。本住居は、北東側で第18号土坑、西側で第11号土坑を掘削して構築され、第10号土坑と重なる。調査では、北側のコーナーを中心に約1/2検出したが、その大半は調査区域外に存在する。形状は隅丸の長方形をなすと思われ、現存する規模は長軸280cm、短軸270cm、確認面からの深さは約20cmである。住居中央で一部調査区南壁にかかる住居内貝層を2か所検出した。貝層はヤマトシジミとマガキを主体とする。

なお、東側に堆積する貝層は、2層に分かれ、下層(第3貝層)にマガキ、上層(第2貝層)にヤマトシジミを主体として堆積していた。そして、この貝層の直下からは炉跡が検出された。なお、炉跡は調査終盤に検出したため、検出位置の記録は行っていない。ピットは床面に8基、壁溝内に11基件う。

遺物は縄文時代早~中期、古墳時代と幅広く出土している。本住居の時期を決定するにあたり、床面出 土の遺物はなく出土状況からの判断は難しいものの、住居形状や住居内に貝層を伴う点から判断して、本 住居の時期は、縄文前期黒浜式期に比定されよう。



第62図 第1号住居跡

第1号出土遺物(第63、64図)

第63図 1、18は、縄文早期後葉の条痕文土器で、18の底部は尖底をなす。 $2\sim17$ 、 $19\sim21$ は前期関山~ 黒浜式で 2、3 は口唇部に瘤を貼付する。 $2\sim7$ の口縁部にはループ文、 $8\sim11$ にはコンパス文を施文する。 5 は補修孔を伴い、片側の内面には穿孔途中のものを一つ伴う。 8 は無文部に半裁竹管、 $9\sim11$ は地文縄文に櫛歯状工具によるコンパス文を施文する。 $12\sim17$ は縄文を施文した胴部片で、12、13は附加条の縄文、 $14\sim16$ は羽状縄文、17は単節 R Lの縄文が施文される。 $19\sim21$ は胎土に繊維を伴う前期の深鉢底部で、いずれも底面は上げ底で、ミガキ調整が施される。

22~25、27は中期前半の土器で、22は胎土に金雲母を伴う阿玉台式で、隆帯の両脇に連続押捺を加える。 23~26は勝坂式で、23、24は沈線、25は沈線と竹管状工具による連続押捺でそれぞれ文様を描く。27は口 縁部が屈曲する鉢形土器で、肥厚する口縁部下端には一条の沈線が横走する。

26、28、29、第64図1~8は中期後葉加曾利E式の資料である。26は口縁部を肥厚させた波状縁で、口縁部以下、縦位の撚糸文を施文する。28、29は口縁部を無文とし、口縁部下端に胴部と区画する横方向の沈線を数条施文する。

第64図 $1 \sim 4$ は中期後葉加曾利E式のキャリパー形土器で、1、2 は頸部、3、4 は胴部片である。1 は 隆帯間に複節LRLの縄文を施文し、2 は隆帯上に沈線を施文する。 $3 \sim 8$ は深鉢胴部で、3、4 は複節LRLの縄文、 $5 \sim 8$ は撚糸文を施文し、さらに7、8 は頸部に連弧文を描く。9、10 は古墳時代の土師器で、 ともに内外面赤彩される。9 は高坏口縁部、10 は坩形土器であろう。

第1節 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構(第65図)

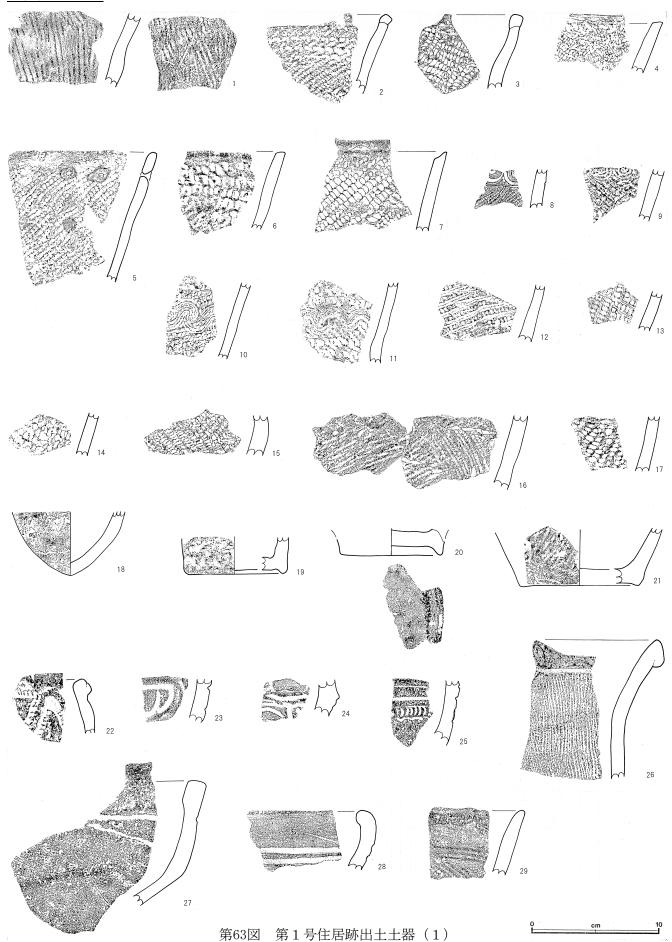
調査区北端中央で検出した。北側の一部は調査区外に延びる。本遺構は南西を、第4号土坑、南側を第3号竪穴状遺構によって切られる。南側のラインが不明のため正確な規模は不明であるが、長軸250cm、短軸150cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは約13cmで、底面にピットを4基伴う。本遺構は、縄文中期後葉に比定されよう。

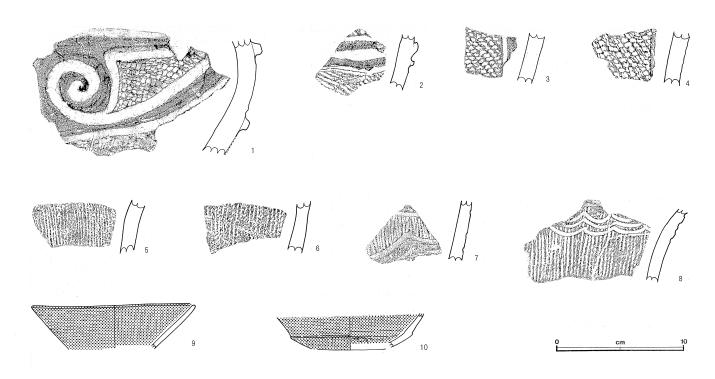
第1号竪穴状遺構出土遺物 (第66図 $1 \sim 7$)

第66図1~3、5は胎土に繊維を混入させた縄文前期関山~黒浜式である。1は羽状となる縄文原体間に隆帯状の隆起を伴う。3、5は羽状縄文とループ文を伴う深鉢胴部。4、6は縄文中期で、4は中期後葉キャリパー形土器の頸部、6は縦位の条線を伴う胴部、7は平底の底部である。

第2号竪穴状遺構(第65図)

調査区北端、第1号竪穴状遺構の東隣で検出した。北側は調査区外に延び、南側を第7号土坑によって切られる。現存する規模は、長軸170cm、短軸110cmの不整円形を呈する。確認面からの深さは約12cmで、底面にピットを5基件う。本遺構は、縄文中期後葉に比定されよう。





第64図 第1号住居跡出土土器(2)

第2号竪穴状遺構出土遺物 (第66図8~14)

第66図8、9は胎土に繊維を含まない縄文前期後葉の諸磯式。10~12は中期後葉加曾利E式キャリパー形土器の胴部である。10は地文縄文施文後、縦位の隆帯、11、12は縦位の沈線を施文し、沈線間を磨り消す。13、14は胎土に繊維を伴う縄文前期関山~黒浜式の底部で底面は上げ底となる。13は絡条体による羽状縄文施文後、底部にコンパス文を施文する。

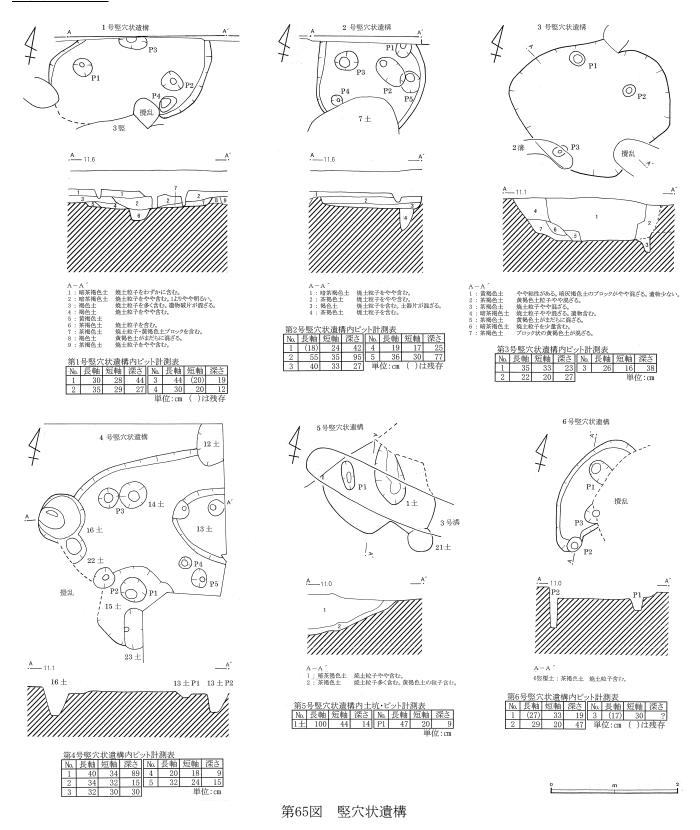
第3号竪穴状遺構 (第65図)

調査区中央、7号土坑の西側で検出した。南側を第2号・第3号溝により切られ、北側で第1号竪穴状遺構の南側を切る。現存する規模は、長軸225cm、短軸209cmの不整円形を呈する。確認面からの深さは約49cmで、底面にピットを3基件う。本遺構は、縄文中期後葉以降に比定されよう。

第3号竪穴状遺構出土遺物(第66図15~32)

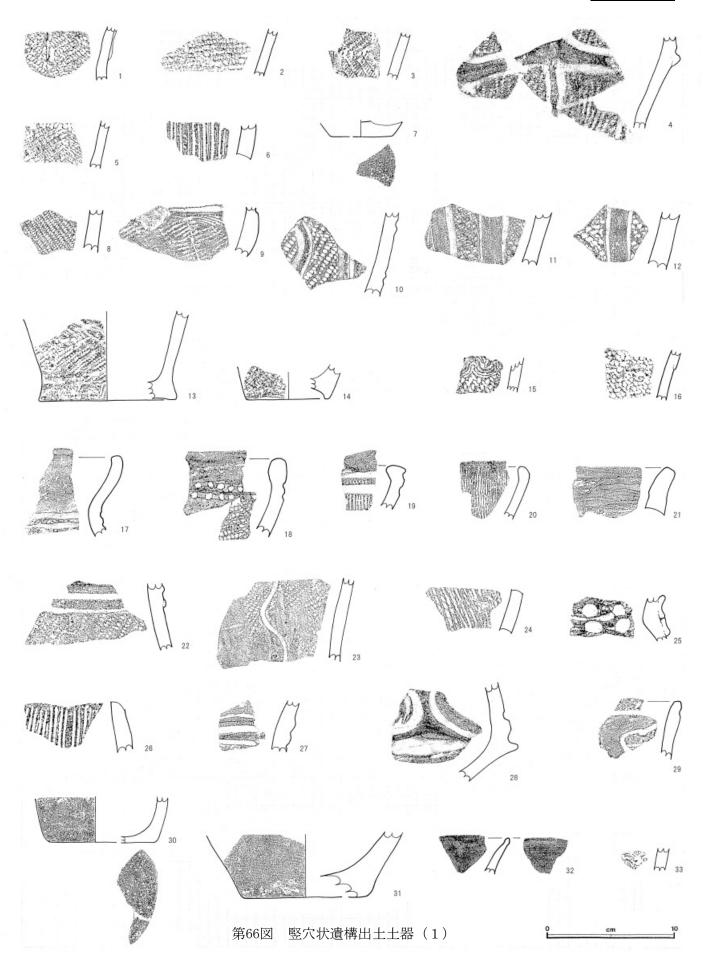
第66図15、16は縄文前期関山〜黒浜式で、15はコンパス文、16はループ文が施文される。17〜28、30、3 1は中期中葉の資料である。17は無文の口縁部が外反する器形で、屈曲した頸部に沈線が周回する。18は無文の口縁部直下に2条の沈線が周回し、沈線内に刺突が施される。19は縦位の撚糸文施文後、口縁部に2条の沈線が周回する。20は櫛歯状工具による縦位の条線を施文する。21は無文の口縁部で、内外面横方向のミガキを伴う。22は沈線を加えた隆帯が頸部に貼付される。23は深鉢胴下半で、単節RLの縄文施文後、下半は縦ミガキにより縄文が磨り消され、最後に蛇行する沈線が描かれる。24は撚糸文を施文した深鉢胴部で、上下輪積部から欠損する。25は口縁部が屈曲する深鉢頸部で、押捺を加えた隆帯が2条周回する。26は縦位の条線を施す深鉢胴部片である。27は隆帯間に沈線を沿わせ、隆帯上にもミガキを施す。28は加曾

側ヶ谷戸貝塚



利E式鉢形土器の頸部で、29は沈線内に縄文が充填された称名寺 I 式。30、31の底部は、無文の器面にミガキ調整が施される。

32は内外面ミガキが施された口縁部で、古墳時代前期の土師器であろう。



側ヶ谷戸貝塚

第4号竪穴状遺構 (第65図)

調査区北東端で検出した。東側は調査区外に延び、南西部分は攪乱により壊される。本遺構は第12・15・16・22号土坑に切られ、13・14号土坑と重複する。現存する規模は、長軸233cm、短軸220cmで、確認面からの深さは約8cmと非常に浅い。底面にはピットを5基伴う。

第4号竪穴状遺構出土遺物 (第66図33)

第66図33は胎土に繊維を伴う縄文前期関山~黒浜式の胴部片で、コンパス文が描かれる。

第5号竪穴状遺構(第65図)

調査区中央付近で検出した。北および西側は攪乱を受ける。本遺構は第1、21号土坑と重複する。現存する規模は、長軸160cm、短軸130cmである。確認面からの深さは約22cmで、底面にピットを1基伴う。本住居の時期は、縄文中期に比定されよう。

第5号竪穴状遺構出土遺物 (第67図1~12)

第67図1は早期後葉条痕文土器である。2~4は中期中葉勝坂式で、2は波頂部から垂下する隆帯と口縁端部に押捺を加える。4は隆帯上に刻みを施文する。5は隆帯に沿って上下に連続した刺突を施す。阿玉台式であろう。6は中期中葉の口縁が屈曲する無文の鉢である。7~9は中期後葉加曾利E式で、7、8は口縁部、9は頸部、10、11は胴部である。12の底部は中期であろう。

第6号竪穴状遺構(第65図)

調査区西側で検出した。東側は攪乱を受ける。現存する規模は、長軸196cm、短軸48cmで、確認面からの深さは約19cmである。底面にピットを3基伴う。

第6号竪穴状遺構出土遺物 (第67図13)

第67図13はピット2から出土した。諸磯式であろう。

第3節 土坑

第1土坑 (第68図・第9表)

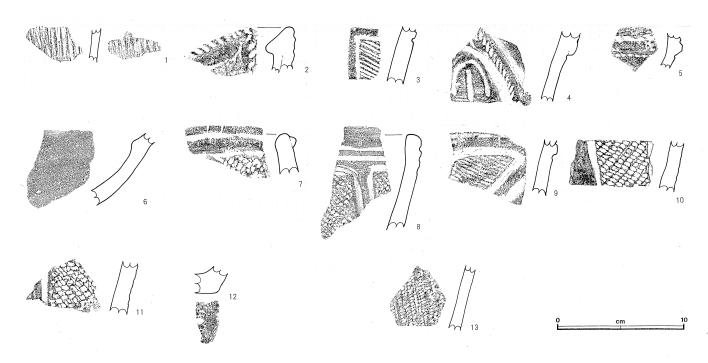
調査区北端西側で検出したもので、北側は調査区外に延びる。楕円形のプランを呈する。

第2土坑 (第68図・第9表)

調査区北端、第3号土坑の東側で検出したもので、北側は調査区外に延びる。南東側の底面にピットを伴う。北側はさらにもう一段掘り込まれる。

第2号土坑出土遺物(第69図1~5)

第69図1は、縄文前期関山~黒浜式で、絡状体とループ文が施文される。2、3は中期後葉加曾利EI



第67図 竪穴状遺構出土土器 (2)

~Ⅱ式で、2は頸部に隆帯のみを貼付し、3は隆帯上に沈線が施文される。4は中期の内湾する鉢の口縁部で、口縁部外面の隆帯が剥落し、接合面が露出する。5は手捏ね土器であろう。

第3土坑 (第68図・第9表)

調査区北端、第2号土坑の西側で検出したもので、北側は一部、調査区外に延びる。

第4土坑(第68図・第9表)

調査区北側、中央付近で検出。東側で第1号竪穴状遺構を切り、西側では第2号土坑と一部重なる。

第5 土坑 (第68図・第9表)

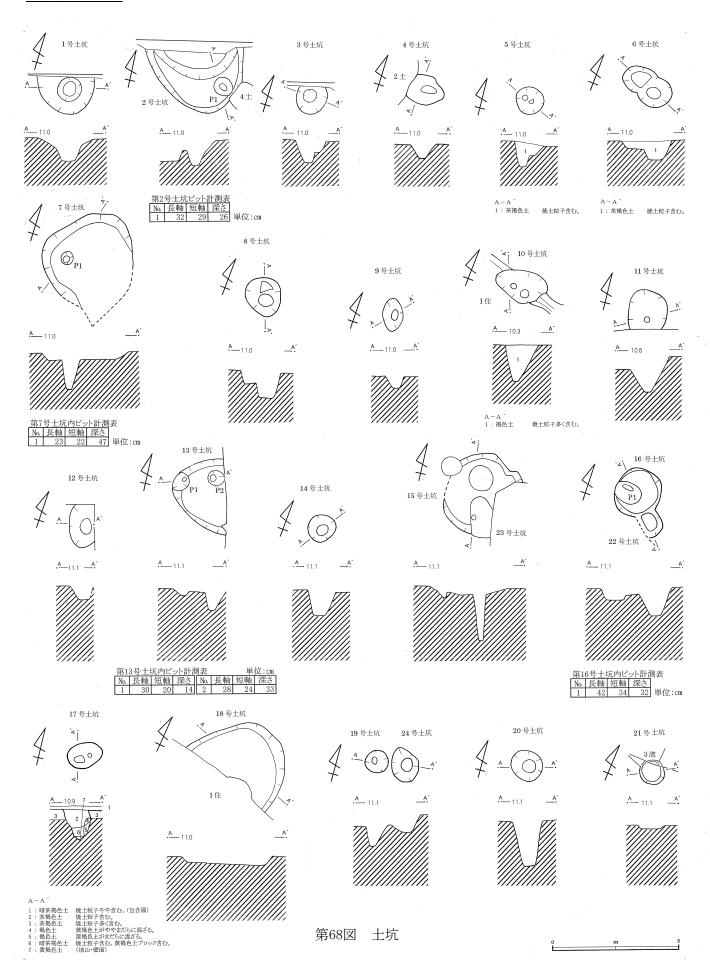
調査区西側、第6号土坑の西側で検出したもので、円形のプランを呈し、底面は北西側がやや深く掘り込まれる。

第6土坑 (第68図・第9表)

調査区西側、第3号竪穴状遺構の西側で検出。楕円形のプランを呈する。

第7土坑 (第68図・第9表)

調査区中央付近で検出したもので、南側は攪乱を受け不整円形のプランを呈する。第2号竪穴状遺構の 南側を切る。



第8土坑 (第68図・第9表)

調査区北東、第9号土坑の西側から検出。楕円形のプランを呈する。

第9土坑 (第68図・第9表)

調査区北東、第8号土坑の東側から検出。楕円形のプランを呈する。

第10土坑 (第68図・第9表)

調査区南側中央で検出したもので、第1号住居跡の東壁と重複する。底面から第1号住居跡に伴うピットを2基検出した。楕円形のプランを呈する。

第11土坑 (第68図・第9表)

調査区西側南端、第1号住居跡の床下から検出。南側は一部、調査区外に延びる。

第11号土坑出土遺物 (第69図 6 、 7 、11)

第69図6は縄文早期後葉の条痕文土器、7、11は前期関山~黒浜式で胴部にループ文を伴う。

第12土坑 (第68図・第9表)

調査区北東端で検出し、第4号竪穴状遺構の北側を切る。北及び東側は調査区外に延びる。

第13土坑 (第68図・第9表)

調査区東端、第4号竪穴状遺構内から検出。東側は調査区外に延びる。

第14土坑 (第68図・第9表)

調査区東側、第4号竪穴状遺構内から検出。

第15土坑 (第68図・第9表)

調査区南東コーナーから検出。第4号竪穴状遺構の南側を切り、南側を第23号土坑により切られる。

第16土坑 (第68図・第9表)

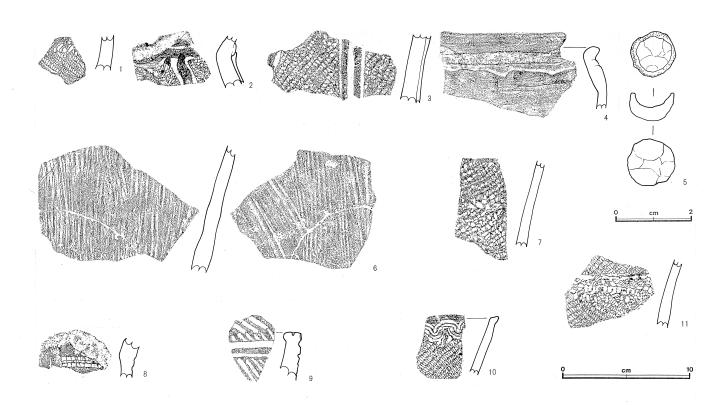
調査区北東側で検出。第22号土坑と重複し、第4号竪穴状遺構の西側を切る。

第17土坑 (第68図・第9表)

調査区南西側、第9号土坑の北側で検出。楕円形を呈する。

第17号土坑出土遺物 (第69図8)

第69図9は胎土に金雲母を伴う縄文中期中葉の資料で、押引文を2列施す。



第69図 土坑出土土器

第18土坑 (第68図・第9表)

調査区中央で検出したもので、南西側を第1号住居跡によって切られる。楕円形のプランを呈し、底面は平坦である。

第18号土坑出土遺物 (第69図9)

第69図9は口縁部に斜位の沈線を描いた後、横方向に2条の沈線が周回する。また口唇部にも、口縁部同様、斜位の沈線を施文する。

第19土坑 (第68図・第9表)

調査区南東側で検出したもので、第24号土坑の西側に隣接する。円形のプランを呈する。

第19号土坑出土遺物 (第69図10)

第69図10は縄文前期関山~黒浜式で縄文施文後、口縁部にコンパス文を描く。

第20土坑 (第68図・第9表)

調査区中央南側、第1号住居跡東側で検出したもので、円形のプランを呈する。

第21土坑 (第68図・第9表)

調査区中央東側で検出したもので、第5号竪穴状遺構の南側と重複する。

第22土坑 (第68図・第9表)

調査区北東側で検出したもので、第16号土坑と重複し、第4号竪穴状遺構の西側を切る。

第23土坑 (第68図・第9表)

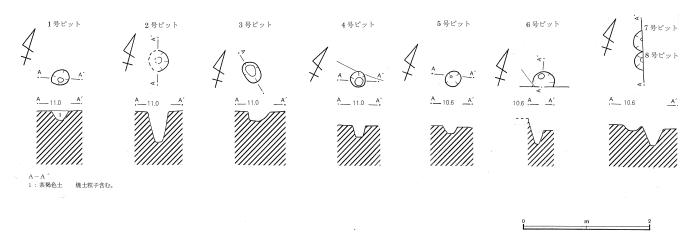
調査区南東コーナー付近から検出。第15号土坑の南側を切る。

第24土坑 (第68図・第9表)

調査区南東側で検出したもので、第19号土坑の東側に隣接する。

第4節 ピット

住居跡や竪穴状遺構に付属しないピットを8基検出した。規模や深さは第8表に示す。いずれのピットからも土器の出土がなかったため、帰属時期の詳細は不明である。



第70図 ピット

第5節 周溝(15号墳)

調査区北西角で検出した。現存する規模は、全長220cm、上幅60cm、下幅40cmで、確認面からの深さは、 南側最深部で60cmである。溝の底面は北から南側に向かって緩やかな傾斜を見せる(第71図)。

溝の覆土からは、縄文土器片とともに、古墳時代に属する台付甕の台部が検出された。

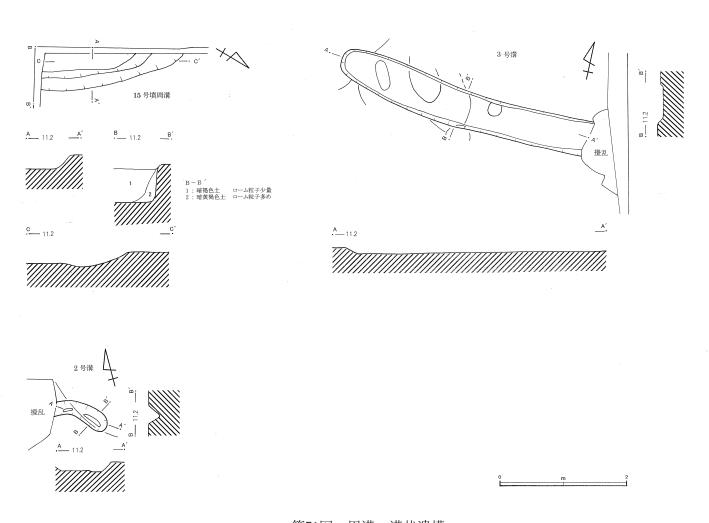
周溝(15号墳)出土遺物(第72図1~11)

第72図1、2は、縄文早期後葉条痕文土器の胴部で、器面は赤褐色を呈する。3は単節RLの縄文を施文した深鉢胴部片で、胎土に繊維を含んでいない。前期後葉諸磯式であろう。4は3列のキザミを伴う中期中葉の深鉢頸部。5は口縁部に連続押捺を加えた中期後葉の口縁部。6、7は中期後葉加曾利E式キャ

側ヶ谷戸貝塚

リパー形土器の頸部と胴部。8は胴部で括れる深鉢の屈曲部である。括れ部には縦方向の櫛歯状の条線施 文後、粘土隆帯の貼り付けを伴うが、隆帯部が剥落する。9、10は厚手の器面に条線文が施され、9は交 差する斜線文、10は曲線文が描かれる。

11は古墳時代前期の台付甕の台部で、上部に焼成前の穿孔を伴う。内面には、時計回りに土器を回転させながら施した縦方向の調整痕が見られる。



第71図 周溝・溝状遺構

第6節 溝状遺構

2号溝 (第71図)

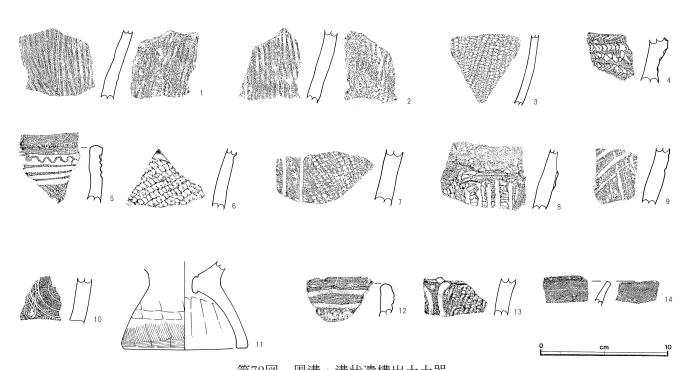
調査区中央で検出した。西側は攪乱を受ける。本遺構は第3号竪穴状遺構の南西側を切る。現存する規模は、全長85cm、上幅30cm、下幅6cmで、確認面からの深さは約17cmと非常に浅い。溝は断面V字状を呈する。本遺構に伴う遺物は検出されなかった。

3号溝(第71図)

調査区中央西側から東側に向かって延び、東端は攪乱により壊されるが、本来は東側調査区外に伸びるものと思われる。本遺構は第3号、第5号竪穴状遺構と重複する。現存する規模は全長407cm、上幅60cm、下幅50cmで確認面からの深さは約7cmと非常に浅い。本遺構に伴う遺物は少なく、縄文土器、土師器の小片が出土した。

3 号溝出土遺物 (第72図12~14)

第72図12、13は縄文中期後葉で、12は口縁部に2条の沈線を伴う。13は深鉢胴部で、逆U字状の沈線内に単節RLの縄文が施文される。14は土師器の口縁部で、内外面赤彩される。



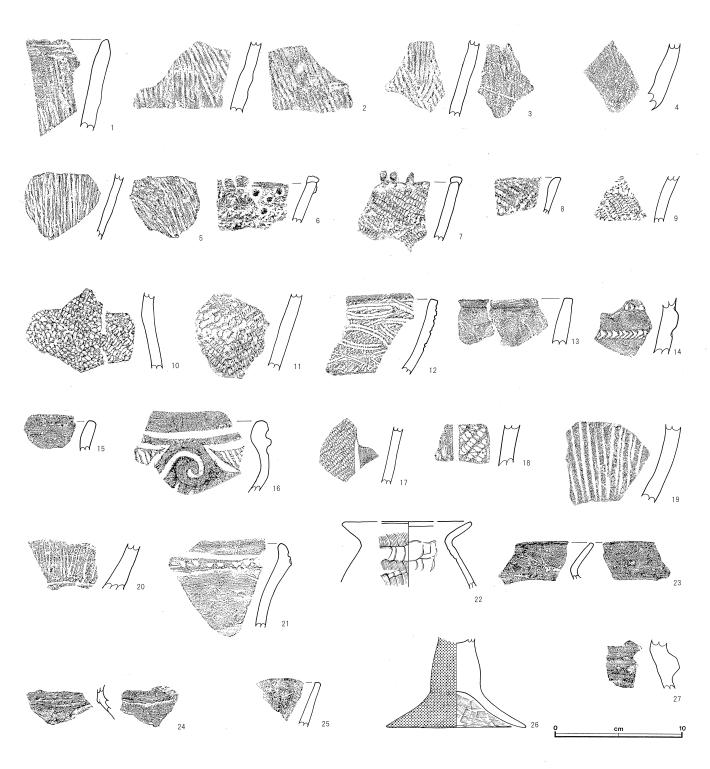
第72図 周溝·溝状遺構出土土器

第7節 遺構外出土土器

第73図1~5は、縄文早期後葉条痕文土器である。1の口縁部は、縦方向の条痕施文後、口縁端部に横方向の条痕を施文する。2、3、5は胴部、4は尖底をなす底部片である。6~11は胎土に繊維を伴う前期の土器で、関山~黒浜式である。6の口縁部は、ループ文施文後口縁部にコンパス文を描き、最後に粘土瘤を貼り付ける。口唇部にも隆帯を貼り付け、鋭利な工具で隆帯を分割する。さらに口唇部の瘤上には縄文が施文される。7は口唇部に瘤を貼付後、口縁部に羽状縄文を施文する。8の口縁部も羽状縄文が施される。9~11は胴部片で、9は附加状の縄文と単段のループ文、10、11は羽状縄文と複段のループ文が

側ヶ谷戸貝塚

施文される。12は無節1の縄文施文後、竹管状工具による木の葉文を描く諸磯a式である。13は無文の口縁部で、内面には横方向のナデ調整が施される。14、15は中期中葉で、14は横走する隆帯の上下に先端三角形の押引き文が描かれる。15は無文の口縁部で、胎土に金雲母を多量に含む。16~20は中期後葉加曾利



第73図 調査区出土土器

E式である。16はキャリパー形土器の口縁部、17、18は胴部である。19、20は櫛歯状の工具による縦方向の条線が施された深鉢胴部下半。21は屈曲する口縁部に沈線を沿わせ、下端に押捺を加えた口縁部で、内外面横方向のミガキが施される。後期前葉堀之内1式であろう。

22~26は古墳時代の土師器である。22の壺形土器は、外面および口縁部内面が赤彩される。外面は屈曲部に縦方向のハケメが施された後、口縁部は横ナデ、胴部は横ミガキが施される。内面も口縁部のみ、横ミガキが施される。23~25は台付甕で、23は口縁部内外面ともに横ナデが施される。24は頸部、25は台部で、25の外面は縦方向のハケメ、内面は横ナデが施される。26は高坏脚部で外面赤彩される。調整は外面が横ミガキ、裾部内面はハケメが施される。27は埴輪片で、突帯部には横方向のナデ調整が施される。内面に屈曲部を伴うことから、器形は朝顔形であろう。

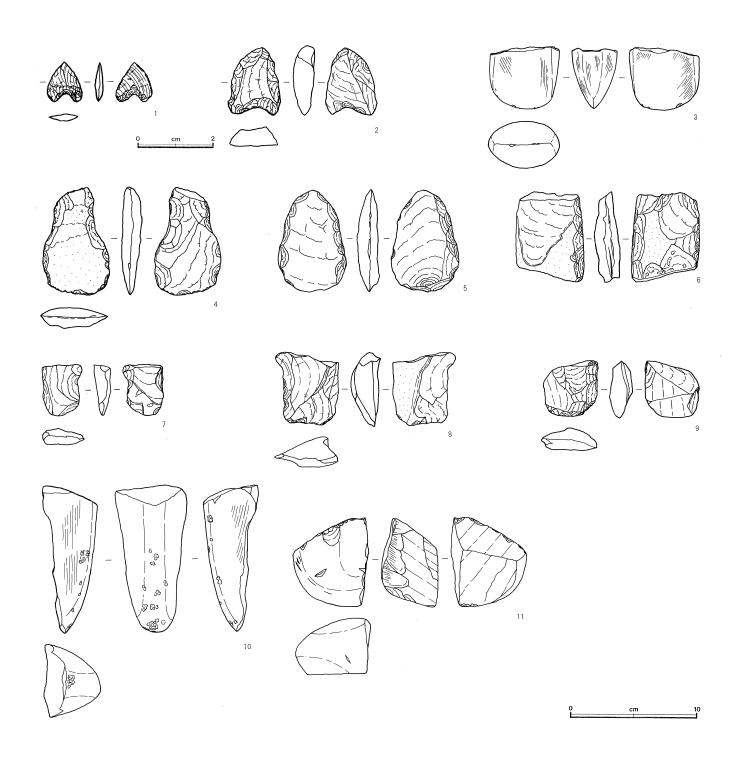
第8節 石器

今回の調査で出土した石器を未掲載資料も含め下記の計測・観察表にて示す。未掲載資料中、黒耀石の 剥片が第1号住居及び、第1号竪穴状遺構にやや多く見られた。

(単位;cm, g)

図版番号	種別	報告書	発掘調査	長さ×幅	厚さ	重さ	石質
74図 1	石 鏃	1号竪穴状遺構	1号住居跡	1.0×0.9	0.2	0.2	黒耀石
2	石鏃未製品	1号住居跡南壁沿い床直	4号住居跡南壁沿い床直	1.7×1.3	0.5	1.4	チャート
3	磨製石斧	1号住居跡西側上層	4号住居跡西側上層	4.8×5.5	3.6	129.4	緑色岩
4	打製石斧	表土	表土	8.4×5.2	1.5	69.6	砂岩
5		1号住居跡ベルト下層	4号住居跡ベルト下層	7.9×5.3	1.7	86.3	頁岩?
6		5号竪穴状遺構	7号住居跡	6.8×5.3	2.0	96.0	砂岩
7	剥片石器	精査	精査	4.0×3.2	1.2	17.6	泥岩?
8		5号土抗下層	5号土坑下層	5.6×5.0	2.2	59.9	砂岩
9		5号竪穴状遺構東	7号住居跡東	4.5×4.3	1.7	35.3	泥岩
10	磨石	1号住居跡ベルト上層	4号住居跡ベルト上層	11.5×4.4	5.7	253.3	花崗岩
11		表土	表土	7.0×5.9	4.4	235.7	花崗岩?
		表土	表土	6.4×3.7	1.0	35.6	砂岩
		表土	表土	5.9×6.2	2.2	152.0	花崗岩?
	石鏃基部	1号住居跡住ベルト下層	4号住居跡ベルト下層	0.7×0.6	0.2	0.1	黒耀石
	剥片	1号住居跡南側壁沿い中央	4号住居跡南側壁沿い中央	10.2×8.4	2.4	337.4	緑泥片岩
		1号竪穴状遺構	1号住居跡	2.8×1.1	0.3	0.8	黒耀石
		1号竪穴状遺構	1号住居跡	0.95×0.6	0.2	0.1	黒耀石
		1号竪穴状遺構	1号住居跡	2.1×0.75	0.3	0.2	黒耀石
		1号竪穴状遺構	1号住居跡	1.0×0.7	0.2	0.1	黒耀石
		1号住居跡ベルト上層	4号住居跡ベルト上層	1.1×1.6	0.3	0.4	黒耀石
		1号住居跡住ベルト下層	4号住居跡ベルト下層	2.6×2.2	0.6	2.5	黒耀石
		1号住居跡住ベルト下層	4号住居跡ベルト下層	0.6×0.6	0.01	0.1	黒耀石
		4号竪穴状遺構内P1	6号住居跡内P1	0.8×0.8	0.2	0.1	黒耀石
		5号竪穴状遺構東端	7号住居跡東端	2.8×2.1	0.5	1.5	黒耀石
		5号竪穴状遺構東端	7号住居跡東端	2.2×0.8	0.4	0.2	黒耀石
		8区21号土坑	8区21号土坑	0.35×0.45	0.1	0.1	黒耀石
		南側壁沿いTP	南側壁沿いTP	2.25×1.6	0.4	0.9	黒耀石
		西区2号土抗	西区2号土坑	2.2×1.35	0.8	2.2	チャート
		南側東よりベルト包含層	南側東よりベルト包含層	5.4×3.4	0.9	21.1	緑泥片岩
		精査	精査	1.1×1.0	0.3	0.2	黒耀石

第8表 石器観察・計測表



第74図 石器

単位:cm	1 () は弱	存

,						
報告書	発掘調査	平面形	主軸方位	長軸	短軸	深さ
第1号住居跡	第4号住居跡	隅丸正方形	N-57° -W	(280)	(270)	20
第1号竪穴状遺構	第1号住居跡	楕円形	N-50° -E	(250)	(150)	13
第2号竪穴状遺構	第2号住居跡	不整円形	N-2° -W	(110)	170	12
第3号竪穴状遺構	第7号土坑	不整円形	N-58° -W	225	(209)	49
第4号竪穴状遺構	第6号住居跡	楕円形	N-80° -W	(233)	(220)	8
第5号竪穴状遺構	第7号住居跡	不明	不明	(160)	(130)	22
第6号竪穴状遺構	第3号・4号土坑	楕円形	N-19° −E	(196)	(48)	19
第1号土坑	第1号土坑	楕円形		(66)	90	35
第2号土坑	第2号土坑	楕円形		(100)	150	34
第3号土坑	第8号土坑	楕円形		(45)	50	35
第4号土坑		楕円形		58	48	22
第5号土坑	第5号土坑	円形		46	43	39
第6号土坑	第6号土坑	楕円形		83	50	30
第7号土坑	第3号住居跡	不整円形		(150)	150	12
第8号土坑		楕円形		64	56	35
第9号土坑		楕円形		50	30	36
第10号土坑	第4号住居跡P1	楕円形		75	50	24
第11号土坑	第11号土坑	楕円形		(62)	(60)	53
第12号土坑	第12号土坑	楕円形		(69)	(38)	24
第13号土坑	第13号土坑	楕円形		(90)	110	9
第14号土坑	第14号土坑	円形		44	42	39

			単位:c	m ()	は残存
報告書	発掘調査	平面形/ 全長	長軸/ 上幅	短軸/ 下幅	深さ
第15号土坑	第15号土坑	不整円形	134	(114)	12
第16号土坑	第16号土坑	円形	80	70	12
第17号土坑	第17号土坑	楕円形	58	42	50
第18号土坑	第18号土坑	楕円形	(100)	160	14
第19号土坑	第19号土坑	円形	38	36	35
第20号土坑	第20号土坑	円形	52	46	57
第21号土坑	第21号土坑	円形	(38)	40	11
第22号土坑		楕円形	42	(32)	16
第23号土坑		楕円形	63	36	10
第24号土坑		楕円形	58	45	11
P1	第9号土坑		28	25	11
P2	第10号土坑		33	(25)	50
P3			36	26	18
P4			26	24	17
P5			26	24	8
P6			(21)	33	37
P7			32	(18)	30
P8			30	(14)	8
15号墳周溝	第1号溝	(220)	(60)	(40)	26
第2号溝	第2号溝	85	30	6	17
第3号溝	第3号溝	407	60	50	7

第9表 遺構新旧対応・計測表

第IV章 貝類・獣骨・魚骨

第1節 検出状況と整理方法

ここで取り上げる貝類等は、第1号住居から出土したもので、貝層は南側の調査区域外まで広がっていた。なお住居内貝層の取り上げ後、下層からは、本住居に伴う炉跡を検出した(第62図)。

検出した貝層は、南西で検出された小ブロック(第1貝層)と、東側のやや大きなブロックの二つに分かれる。東側のやや大きなまとまりは、下層でカキを主体とし、上層とは貝種構成が著しく異なっていたため、上層を第2貝層、下層のマガキ主体の貝層を第3貝層として取り上げた。

出土した貝は、土嚢袋で全量回収し、水洗前に各貝層の重量計測後、2.5mm、5 mm、10mmのフルイにより水洗選別作業を行った。選別は、貝、骨、炭化物、土器、石等に分け、それぞれ同定を行った(第10表)。

第2節 貝類

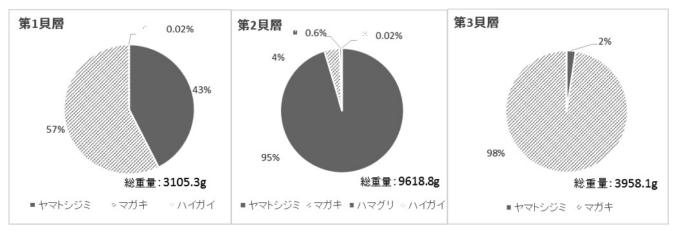
各貝層の重量に基づく貝種構成は以下のとおりである(第11表)。第1貝層はヤマトシジミ42.5%、マガキ57.4%の2種類で構成され、ハイガイの破片をわずかに含む(グラフ1)。その一方で、第2、第3貝層では、貝種構成に隔たりが見られ、第2貝層ではヤマトシジミが95%を占め、次いでマガキ4%、そしてハ

	水洗前総量(g)	水洗後重量			mm	2.5mm		1mm		微小貝			
	水洗削総重(g)	総量	貝	骨	その他	総量	骨	総量	骨	巻貝	二枚貝	不明	
第1貝層	4606	3429	3105	0.5	318.9	339	0.5	137.7	0.4	0.1	0.1	0.2	
第2貝層	17184	9647	9619	0.3	30.7	161.3	0.9	442.4	1.2	0.5	1.2	0.3	
第3貝層	4484	4058	3958	0.1	96.2	91.6	0.3	77	0.4	0.1	0.1	0.1	

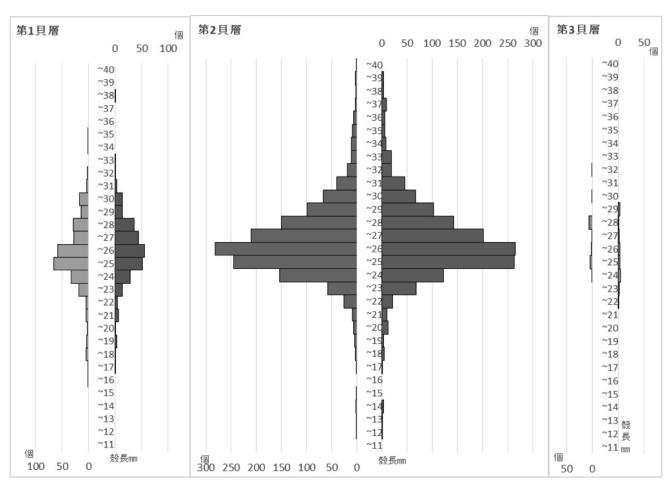
第10表 貝層水洗前・水洗後重量

	ヤマトシジミ					マガキ				ハマグリ					ハイガイ					
	L	g	R	g	不明g	Г	g	R	g	不明g	L	g	R	g	不明g	Г	g	R	g	不明g
第1貝層	448	614	471	617	90	91	345	62	375	1064	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第2貝層	2721	4337	2717	4361	473	45	68	23	26	295	1	11	3	43	3	1	1	1	1	0
第3貝層	24	33	39	52	11	76	1353	59	1449	1061	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第11表 貝種構成



グラフ1 貝種組成

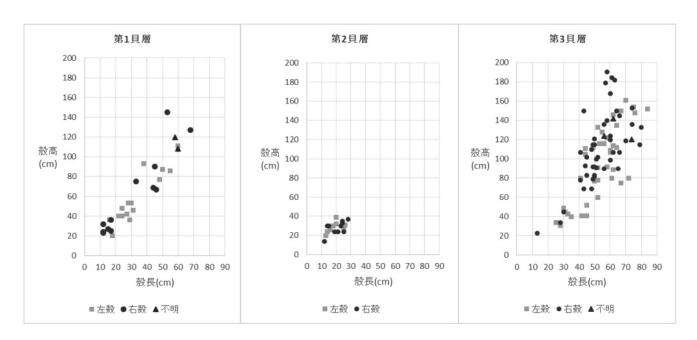


グラフ2 ヤマトシジミ殻長構成

マグリとハイガイを僅かに含む。一方の第3貝層では、第2貝層と主体となる貝種が逆転し、マガキが98%、ヤマトシジミが2%という構成となる。

各貝層におけるヤマトシジミの殻長構成は以下のとおりで、第1、第2貝層ともに、26mmにピークを持ち、25~27mmに集中する。ただし第2貝層は、殻長が12mm~40mmまでと第1貝層に比べて幅広いサイズが見られる(グラフ2)。

マガキは殻長および殻高に個体差が見られるため、両属性を加味してそのサイズ構成を検討した(グラフ3)。殻高に関して、第1、第3貝層では、20mm以上の小型サイズから、140mmを超える大型のものまで幅広いサイズが見られるのに対して、第2貝層では14~39mmまでの小型サイズに集中する。



グラフ3 マガキ殻高・殻長構成

第3節 獣骨・魚骨

住居内貝層から検出した獣骨、魚骨に比定される資料は、第1~3貝層のいずれも1g未満~数g程度の 非常に少ない検出にとどまる。

第4節 まとめ

本貝塚は汽水産のヤマトシジミと汽水~鹹水産のマガキを主体とする貝塚であり、時期は黒浜式期に 比定される。貝塚内からは、獣骨・魚骨の出土は著しく少なく、貝塚は主に前記2種類の貝で構成され る。それ以外の貝種としてハマグリとハイガイの2種類をごく少量確認するのみであった。

第V章 まとめ

今回の調査地点は遺跡の中央北寄りに所在し、第2次調査が行われた地点の北北東約70mに位置する。本遺跡は未報告分も含め、これまでに11次の調査が行われており、縄文時代前期中葉~後葉、中期後葉、そして古墳時代を中心とした遺構・遺物が確認されている(註1)。

今回報告を行った第8次調査でも過去の調査同様、当該期の遺構・遺物が確認され、遺跡の主体となる時期を網羅した遺物が確認された。

縄文前期の貝塚の広がりは、第3次調査地点を南限とし、その北限は第59図の稲荷塚古墳の東側にある ●印までの南北450mという非常に広範囲に亘る。その主な分布は、遺跡の中央部を南北に縦走する市道を 中心に展開しており、今回の調査地点もまさにその中心ラインに近接した地点から住居跡に伴い検出され た。本貝塚は、縄文前期の集落としての広がりもさることながら、西側の低地に並列して展開するという 環状構成をとらない特徴的な集落形態が、今回の調査でより明確になったといえる。

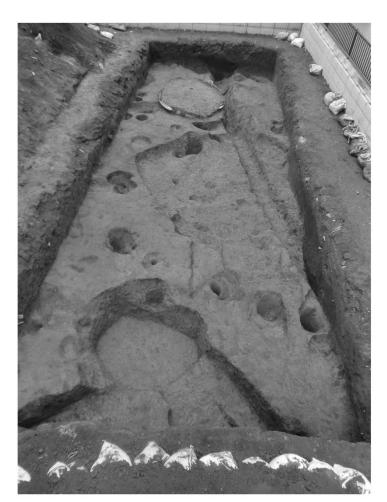
さて、関山・黒浜式期の貝種構成として、大宮台地西側の荒川流域では、ヤマトシジミとマガキを主体とする一方で、大宮台地東側の綾瀬川流域ではハイガイ等が主体をなし、大宮台地の東西で貝種構成に違いが認められる。その点で第1号住居跡出土の貝種構成は、これまでの本遺跡や周辺遺跡の貝種傾向を補強する結果となった。なお本遺跡からはこれまでに当該期の貝層を伴う住居跡が7軒調査されている。今後、各住居単位で貝種や獣魚骨の構成比率を分析することで、集落内の詳細な食料資源の利用実態の解明が進むものと期待される。

さて縄文中期の遺構は、竪穴状遺構や土坑等が検出されている。しかしながら本地点からは明確に住居跡と判断できる遺構は検出されていない。これまでに検出された当該期の住居跡は第2次調査(9軒)と第4次調査(3軒)の2地点であり、その分布は本地点よりも南側に位置する。その点で今回の成果は、居住域の北限を考える上で重要である。

なお、古墳時代の遺構・遺物は、縄文時代に比べて極めて低調であった。しかしながら調査区西側では 周溝と想定される一部が確認された。残念ながら、調査できた面積はごく一部のため、周溝と判断するに は確実性を欠く点は否めない。周辺を調査する可能性を考慮し、その存在をあえて指摘するものである。

このように本地点は、調査面積自体は小規模であったものの、その内容は多岐にわたり、本遺跡を理解する上で果たす役割は大きいといえよう。

(註1)縄文前期、中期以外にも第2次・第3次の調査では、縄文後期後葉〜晩期前葉、末葉の遺物が出土しており、各時期に小規模ながら遺跡内での活動が想定される。

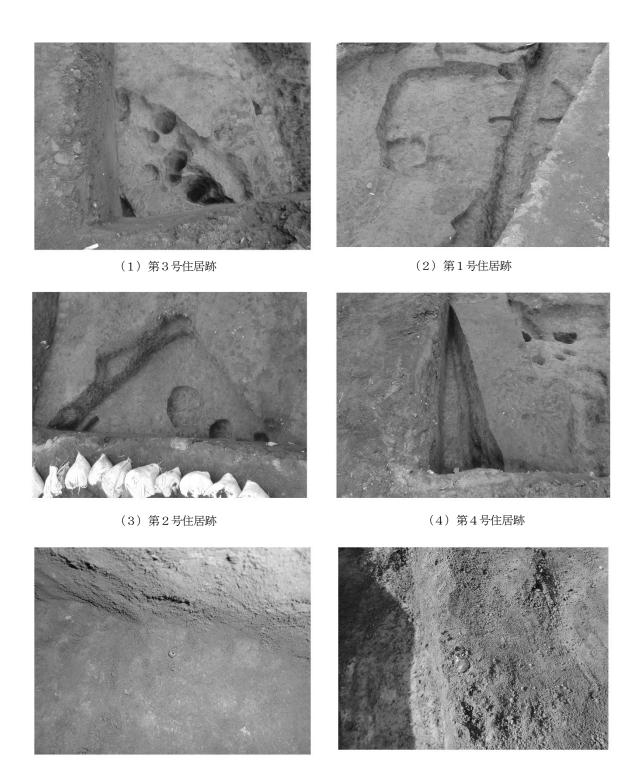


(1) 1区全景



(2) 2区全景

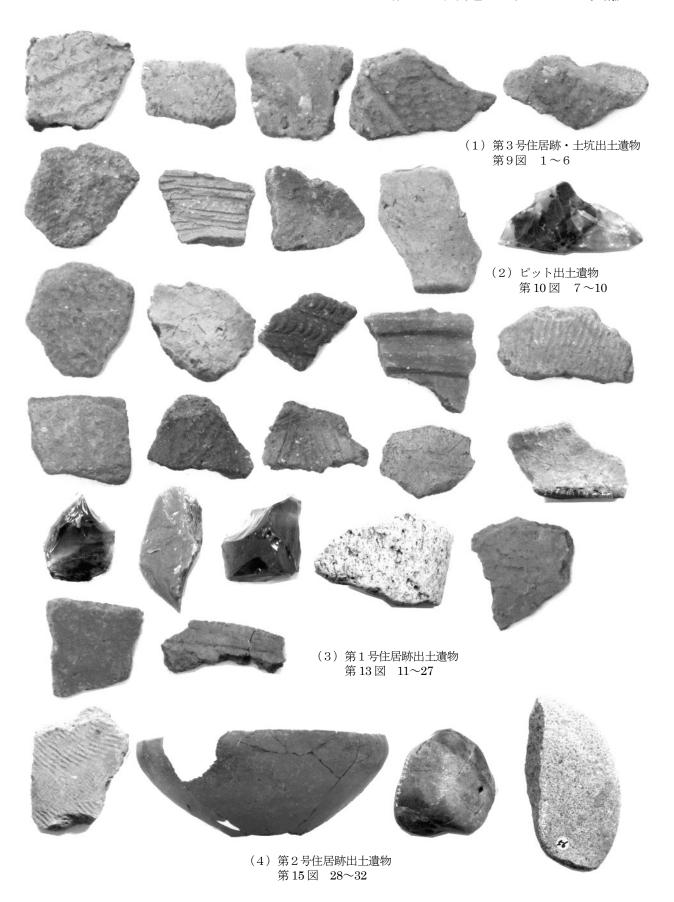
図版一2 府内三丁目南遺跡(第1地点)



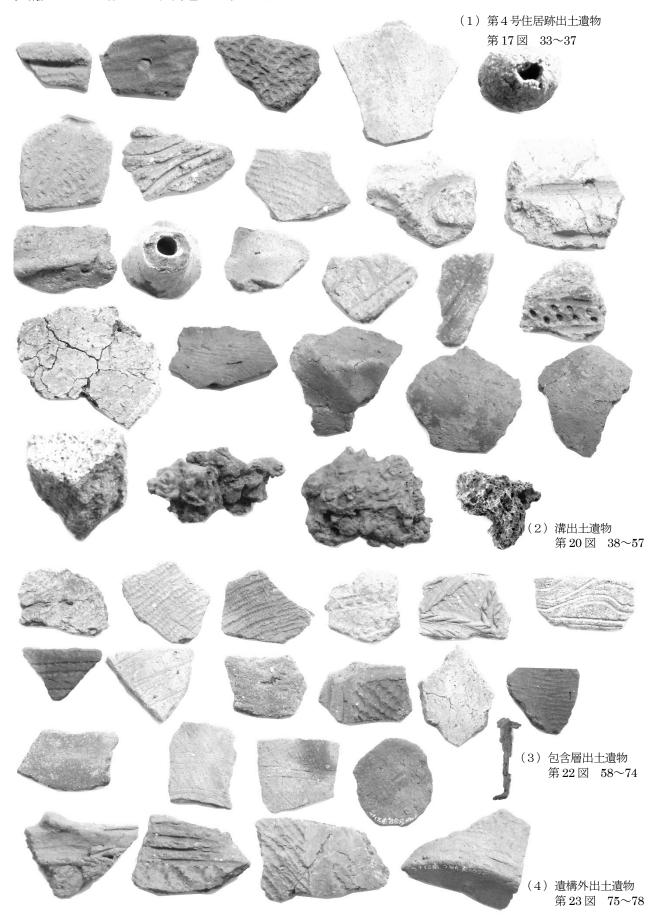
(5) 土製品 (漆玉) 出土状況

(6) 石器出土状況

府内三丁目南遺跡(第1地点) 図版一3

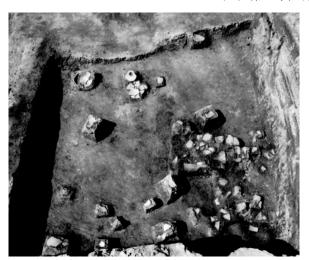


図版一4 府内三丁目南遺跡(第1地点)

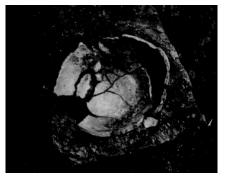




(1) 第1号住居跡完掘状況(北から)



(2) 第1号住居跡遺物出土状況



(4) 遺物出土状況 (第28図 No. 8)

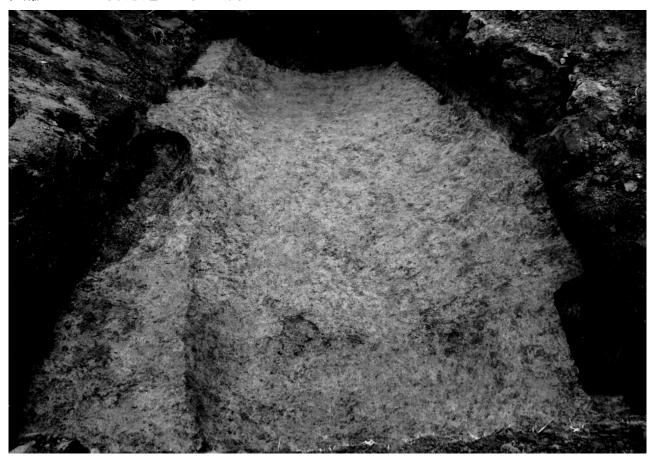


(3) 遺物出土状況 (第28図 No. 5)

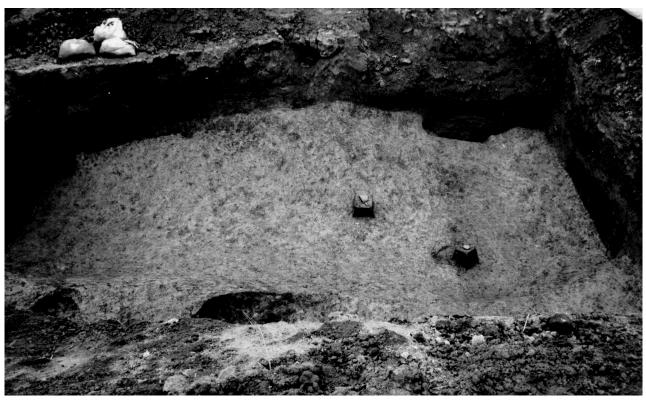


(5) 遺物出土状況 (第28図 No. 9・15)

図版-6 白鍬宮腰遺跡(第8次調査)



(1) 第1号溝完掘状況(北から)



(2) 第1号溝遺物出土状況 (東から)

白鍬宮腰遺跡(第8次調査) 図版-7



(2) 第1号住居跡出土遺物(第28図2)



(1) 第1号住居跡出土遺物(第28図1)



(3) 第7号住居跡出土遺物(第28図4)



(4) 第97号住居跡出土遺物(第28図3)



(5) 第1号住居跡出土遺物(第28図5)

図版-8 白鍬宮腰遺跡 (第8次調査)



(1) 第1号住居跡出土遺物(第28図6)



(2) 第1号住居跡出土遺物(第28図7)



(3) 第1号住居跡出土遺物 (第28図8)



(4) 第1号住居跡出土遺物 (第28図9)



(5) 第1号住居跡出土遺物 (第28図10)





(6) 第1号住居跡出土遺物 (第29図11~13)





(7) 第1号住居跡出土遺物 (8) 第1号住居跡出土遺物 (第 29 図 15)





(9) 第1号溝出土遺物(第29図16)



(10) 第1号溝出土遺物 (第29図17)



(11) 第1号溝出土遺物 (第29図18)



(1) 調査区全景

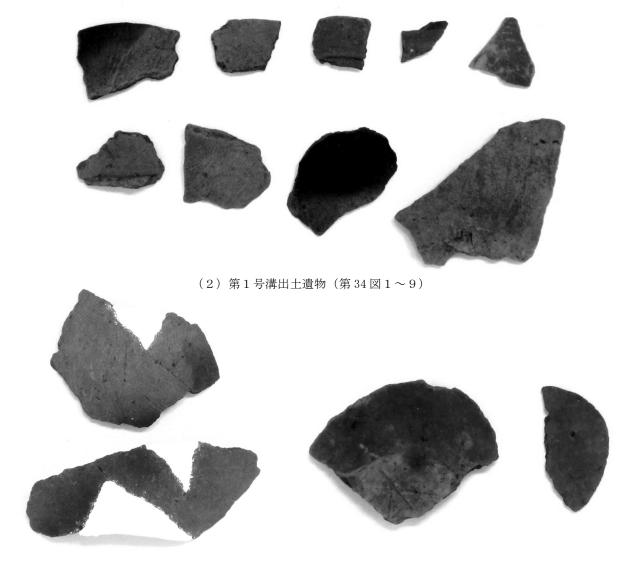


(2) 第1号溝(東から)

図版-10 白鍬宮腰遺跡(第10次調査)

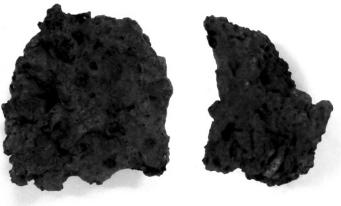


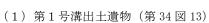
(1) 第1号溝(南西から)



(3) 第1号溝出土遺物(第34図10) (4) 第1号溝出土遺物(第34図11・12)

白鍬宮腰遺跡(第10次調査) 図版-11







(2) 第1号溝出土遺物(第34図14)





(3) 第1号溝出土遺物(第34図15・16)







(4) 遺構外出土遺物(第35図17~19)







(5) 遺構外出土遺物 (第35図20)

(6) 遺構外出土遺物(第35図21)

図版-12 大在家遺跡(第2・3次調査)



(1) 第2次調査区全景(北西→)



(2) 第2号住居跡完掘 (東→)

大在家遺跡(第2・3次調査) 図版-13



(3) 第2号住居跡炉完掘(南→)



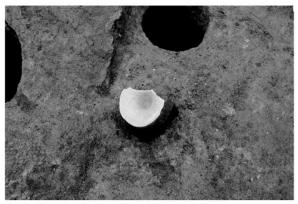
(4) 第2号住居跡炭化材出土状況 (西→)



(5) 第2号住居跡土器出土状況 (東→)



(6) 第2号住居跡台付甕出土状況(西→)



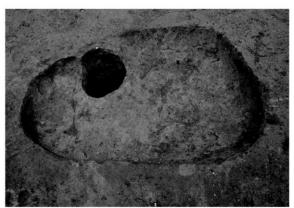
(7) 第2号住居跡高坏出土状況(西→)



(8) 第2号住居跡炉直上出土鉢形土器(南東→)

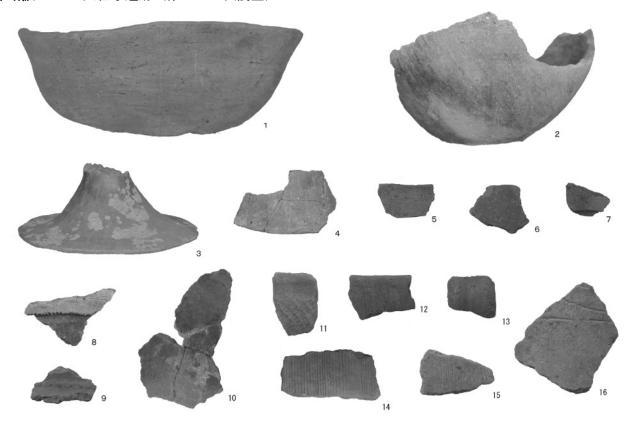


(9) 第3次調査区全景(北→)

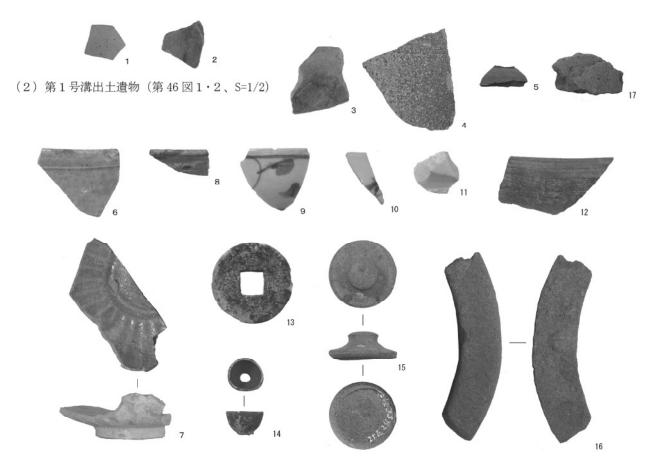


(10) 第3次調査区第1号土坑完掘(東→)

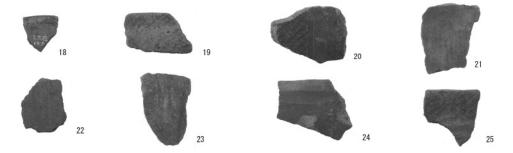
図版-14 大在家遺跡 (第2・3次調査)



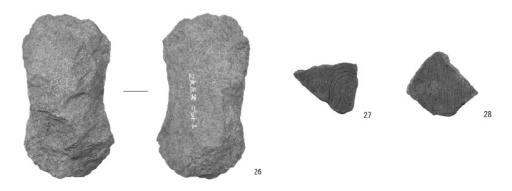
(1) 第2号住居跡出土遺物(第44図1~16、S=1/3)



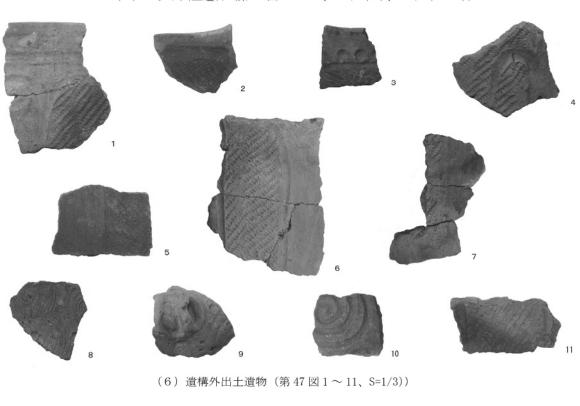
(3) 第2号土坑出土遺物(第46図 $3\sim17$ 、S=1/1(13)、S=1/2($3\cdot5\cdot6\cdot8\sim11$ 、 $14\cdot15$)、S=1/3($4\cdot7\cdot12\cdot16\cdot17$))



(4) 土坑出土遺物 (第 46 図 18 ~ 25、S=1/2(18)、S=1/3(19 ~ 25))



(5) ピット出土遺物(第 46 図 26 ~ 28、S=1/2(26)、S=1/3(27・28))





(7) 第3次調査区出土遺物(第49図1~4、S=1/1(1)、S=1/3(2~3))

図版一16 茶臼塚古墳(第1次調査)

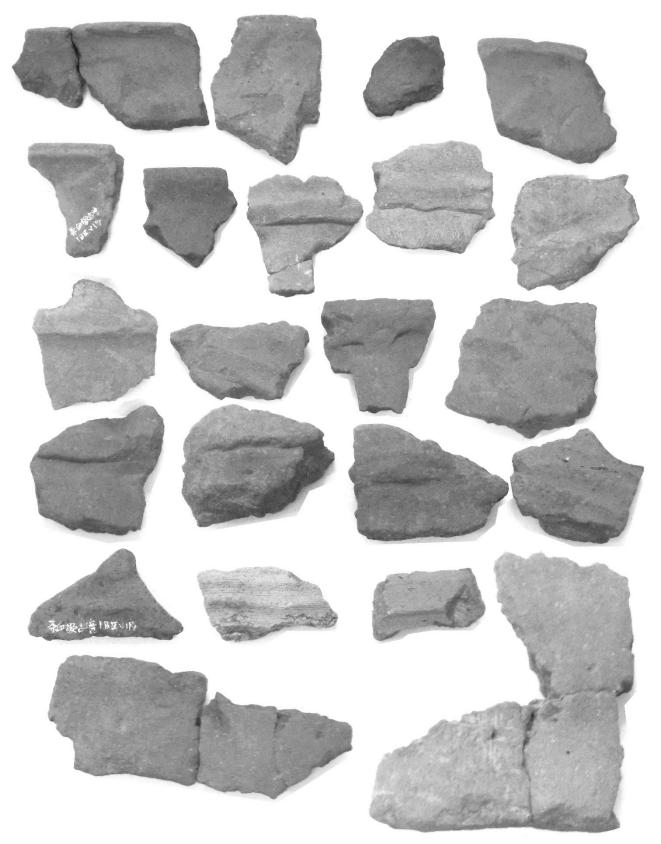


(1)調査区1区全景



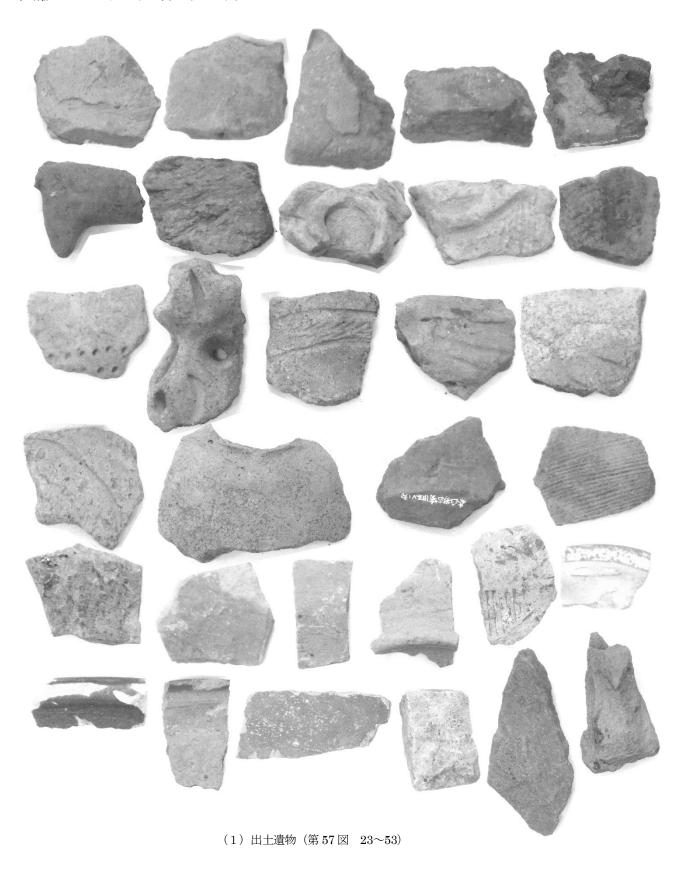
(2)調査区2区全景

茶臼塚古墳(第1次調査) 図版 - 17



(1) 出土遺物(第56図 $1\sim22$)

図版一18 茶臼塚古墳(第1次調査)



側ヶ谷戸貝塚(第8次)図版-19





(2)調査区北側(南西から)



(3) 4号竪穴状遺構(北東から)



(4) 15号墳周溝(北東から)



(5) 15号墳周溝(北から)

図版一20 側ヶ谷戸貝塚 (第8次)



(6) 1号住居跡(北東から)



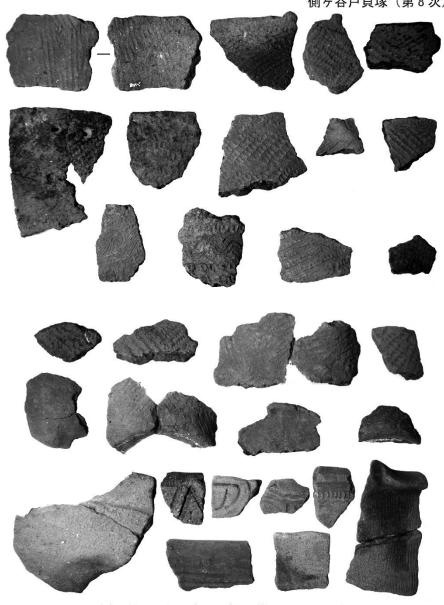
(7)1号住居跡第2・3貝層(北から)



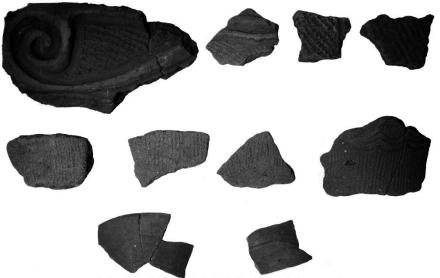
(8) 1号住居跡第2・3貝層(北東から)



(9)1号住居跡土層断面(東から)



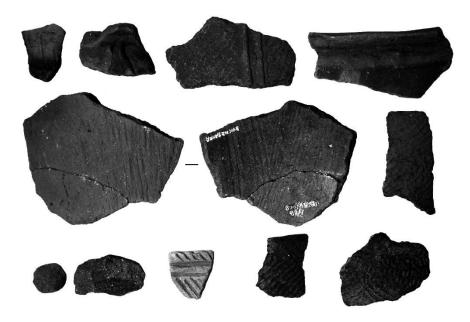
(1) 第 1 号住居跡出土遺物 (第 63 図 1 \sim 29)



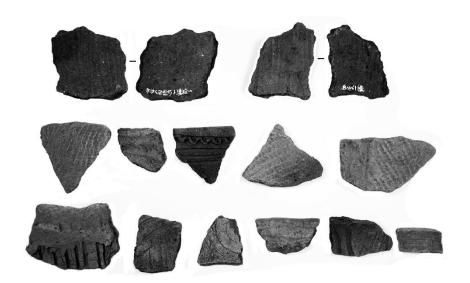
(2) 第 1 号住居跡出土遺物 (第 64 図 $1 \sim 10$)

図版 -22 側ヶ谷戸貝塚 (第8次)





(1) 土坑出土遺物 (第69図1~11)



(2) 周溝・溝状遺構出土遺物 (第72 図1~10、12~14)



(3) 周溝・溝状遺構出土遺物 (第72図13)

図版一24 側ヶ谷戸貝塚 (第8次)



報告書抄録

	報 告 書 抄 蚊												
ふりがな	るないさんりょうのみなみいせさ、しらくわみやこしいせさ、おねさいけいせさ、らやうすつか こふん、そばがいとかいづか												
書 名	府内三丁目南遺跡 (第1地点)、白鍬宮腰遺跡 (第8・10 次調査)、大在家遺跡 (第2~3次調査)、茶臼塚古墳 (第1次調査)、側ヶ谷戸貝塚 (第8次調査)												
シリーズ名	さいたま市内遺跡発掘調査報告書												
シリーズ番号	第 17 集												
編著者名	関根俊雄・鈴木久雄・橋本玲未・永瀬史人・吉岡卓真												
編集機関	さいたま市教育委員会												
所 在 地	330-9588 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号 TEL 048-829-1724												
—————————————————————————————————————	2018年3月28日												
ふりがな	ふりがな	コード		→レ√去	東経 調査期間		調査面積	细术匠口					
所収遺跡名	所 在 地	市町村	市町村遺跡番号		- 北緯	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		m²	調査原因				
***い かりょうめ かなか 府内 三丁目 南 遺 跡 (第1地点)	さいたま市岩槻区 常内二丁目	11110	77-051		35° 56′ 35″	139° 42′ 54″	2010. 1. 28 ~ 2010. 2. 26	78 m²	個人専用 住宅建設				
白鍬宮腰遺跡 (第8次調査)	さいたま市桜区 大字白鍬	11106	01-230		35° 52′ 51″	139° 36′ 10″	2010. 5.10 ~ 2010. 5.25	32 m²	個人専用 住宅建設				
上京くわみでこし 白鍬宮腰遺跡 (第 10 次調査)	さいたま市桜区 大字白鍬	11106	01-230		35° 52′ 56″	139° 36′ 12″	2010. 11. 9 ~ 2010. 11. 22	90 m²	個人専用 住宅建設				
************************************	^{みどりく} さいたま市緑区 ^{たいたくぼ} 太田窪一丁目	11109		01–208	35° 51′ 47″	139° 40′ 6″	2011. 6. 18 ~ 2011. 7. 22	127 m²	個人専用 住宅建設				
大在家遺跡 (第3次調査)	^{みどりく} さいたま市緑区 ^{だいたくぼ} 太田窪一丁目	11109		01-208	35° 51′ 47″	139° 40′ 6″	2011. 7. 6 ~ 2011. 7. 15	41 m²	個人専用 住宅建設				
*************************************	さいたま市大宮区 ^{みはし} 三橋四丁目	11103		12-305	35° 53′ 34″	139° 35′ 59″	2011. 5. 19 ~ 2011. 6. 24	87 m²	個人専用 住宅建設				
************************************	さいたま市大宮区 ^{みはし} 三橋四丁目	11103		12-304	35° 53′ 39″	139° 36′ 3″	2012. 9.20 ~ 2012. 10. 12	66 m²	個人専用 住宅建設				
所収遺跡名	種別	主な時代		主な	遺構	主	な遺物	特記	事 項				
府内三丁目南遺跡 (第1地点)	集落跡	縄文時代 住居跡 弥生~古墳時 住居跡 代 土坑				縄文時代土器 石器 土器 石器		縄文時代前期の住居 跡を検出した。弥生 〜古墳時代の住居跡 、溝、時期不明の柱 穴列を検出した。					
白鍬宮腰遺跡 (第8・10 次調査)	集落跡	古墳時代前期 古墳時代後期		住居跡 溝 (古墳周溝)		土師器 埴輪破片・鉄滓		(第8次) 古墳時代 前期の住居跡と、それを切る古墳時代後期の溝を検出した。 住居跡からは多数の 土師器、溝からは埴 輪破片が出土した。 (第10次) 古墳出した 後期の溝を検出上した。 を数達が出土した。					
大在家遺跡 (第2・3次調査)	集落跡	縄文時代 古墳時代前期 中世 江戸時代		土坑 住居跡・土坑 溝 土坑		縄文土器・石器 土師器 かわらけ 陶磁器・古銭		古墳時代前期の住居 跡の床面付近から多 量の炭化材と土師器 が出土した。江戸時 代の墓壙からは、陶 磁器のほか、煙管や 古銭が出土した。					

茶臼塚古墳	古墳	古墳時代	周溝	縄文時代中期土器・ 石器 古墳時代の埴輪・土 師器	茶臼塚古墳の周溝及 びそれに伴う埴輪を 検出した。				
側ヶ谷戸貝塚 (第8次調査)	集落跡	縄文時代 前期~中期 古墳時代 時期不明	住居跡・貝塚 竪穴状遺構・土 坑 周溝 土坑・ピット・ 溝	縄文時代前・中・後 期土器・石器 古墳時代の土師器・ 埴輪	を伴う住居跡を 1 軒 検出した。古墳周溝				
要約	7件の発掘調査を収録した。収録した遺跡の立地は、白鍬宮腰遺跡は荒川低地の自然堤防上、他は大宮台地上に立地している。調査結果の主要な時期は、縄文時代から近世にわたる。 縄文時代 府内三丁目南遺跡で前期の住居跡、土坑を調査した。大在家遺跡で中期と推測される土坑及びピット群を調査した。側ヶ谷戸貝塚で前期の貝塚を伴う住居跡を1軒検出した。 弥生~古墳時代 府内三丁目南遺跡で弥生~古墳時代の住居跡及び溝を調査した。 古墳時代 白鍬宮腰遺跡で古墳時代前期の住居跡、古墳時代後期の溝(古墳周溝)を調査した。 住居跡からは多数の土師器が出土した。大在家遺跡で古墳時代前期の住居跡を調査した。茶臼塚古墳で古墳に伴う周溝を調査した。側ヶ谷戸貝塚で周溝の一部を1条検出した。 中世 大在家遺跡で中世の溝跡を調査した。溝跡からはかわらけが出土した。 近世 大在家遺跡で江戸時代の墓壙を調査した。墓壙内からは陶磁器類や古銭などが出土した。								

さいたま市内遺跡発掘調査報告書 第17集

府内三丁目南遺跡(第1地点) 白鍬宮腰遺跡(第8・10次調査) 大在家遺跡(第2・3次調査) 茶臼塚古墳(第1次調査) 側ヶ谷戸貝塚(第8次調査)

平成 30 年 3 月 28 日 発行

編集 生涯学習部文化財保護課

発行 さいたま市教育委員会 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号 TEL 048-829-1724